長崎県文化財調査報告書 第132集

黒丸遺跡 II

都市計画道路杭出津・松原線改良工事に伴う発掘調査報告書

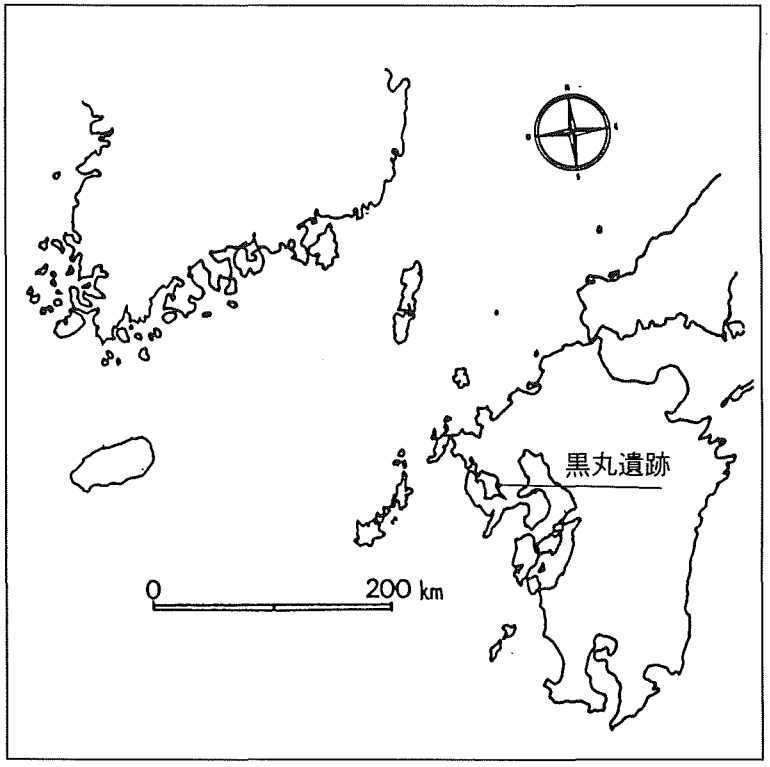
1997

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書 第132集

黒丸遺跡 II

都市計画道路杭出津・松原線改良工事に伴う発掘調査報告書



1997

長崎県教育委員会

序

遺跡は，私たちが普段目にすることの少ない地下に埋没した遺構や遺物等を含んだ過去の人々の生活の証であります。長崎県下には，約3,500箇所の遺跡が知られております。

都市計画道路杭出津・松原線改良事業につきましては，道路計画の当初より文化財の保存について関係機関と協議を重ねてまいりましたが，計画変更が不可能な地区について，発掘調査を実施しました。

大村市所在の黒丸遺跡は，郡川が形成した扇状地にあり，平成５年度から平成７年度までの３年間の調査で出縄文時代から中世に至る複合遺跡であることを確認しました。それぞれの時代の特色ある遺構・遺物を伴っており，平成５年度は，中世の掘立柱建物，土壙，溝等の生活意向を確認し，平成６年度は，弥生時代の甕館墓・石棺墓・土壙墓を検出して，隣接する富の原遺跡へ移行する墓地解明のてがかりを得ております。

今回報告します「黒丸遺跡Ⅱ」におきましては，平成７年度に調査を実施し，縄文時代晩期としては，全国的にも最大規模の62基のドングリ貯蔵穴が確認され，稲作開始の時代における食糧確保の実態を知る貴重な発見であります。

本書が文化財保護や地域の歴史を知るうえでの資料として，活用いただければ幸いに存じます。

平成９年３月31日

長崎県教育委員会教育長

中　川　　忠

例　　言

1．本書は，長崎県大村市黒丸町５８７番地１外に所在する黒丸遺跡に関する緊急発掘調査報告である。

2．調査は，都市計画道路杭出津・松原線改良工事に伴って長崎県教育庁文化課が平成２年度に範囲確認調査，平成５年度～平成７年度に本調査を実施した。なお，平成６年度までの調査報告については，平成７年度に既刊済である。

3．平成２年度・平成５年度・平成６年度・平成７年度の発掘調査担当

平成２年度（平成２年12月３日～平成２年12月14日）

主任文化財保護主事	宮崎貴夫	（現　原の辻遺跡調査事務所　係長）
文化財保護主事	町田利幸	

平成５年度（平成５年10月25日～平成６年２月15日）

文化財保護主事	町田利幸	
〃	岡　大博	

平成６年度（平成６年11月15日～平成７年２月３日）

課長補佐	田川　肇	（現　原の辻遺跡調査事務所　所長）
文化財保護主事	村川逸朗	
〃	古門雅高	
〃	岡　大博	（現　県立西彼杵高等学校）
文化財調査員	松尾昭子	（現　鷹島町教育委員会）
〃	高原　愛	

平成７年度（平成７年11月１日～平成８年３月15日）

文化財保護主事	町田利幸	（現　阪神･淡路大震災復旧･復興支援事業派遣）
〃	高原　愛	（現　松浦市教育委員会）

4．本書の執筆は第１部を町田が担当し，第２部の自然分析は，Ⅰ自然遺物の分析を古環境研究所に委託し結果報告を記載した。Ⅱ地質については，長崎大学教育学部　長岡信治先生に玉稿をお願いし，掲載した。

5．写真撮影は，第１部の遺構・遺物を町田が第２部のⅠは古環境研究所で行い，Ⅱは長崎大学教育学部　長岡信治が図，写真作成を行う。

6．本書の編集は，第１部を町田が担当し，第２部を荒木伸也が担当した。

7．本書の作成にあたっては，文化課内業整理員による遺物洗浄，注記，実測，トレース等と，現地の作業員，内業整理員の方々による協力によって作成することができた。ここに深く感謝いたします。

本　文　目　次

序

第１部　平成７年度調査

Ⅰ　地理的歴史的環境……　1

１．地理的環境……　1

２．周辺の遺跡……　1

Ⅱ　調査（三次調査・所在地：大村市黒丸町５８７番地１～３５２）……　2

１．調査の経緯と概要……　2

２．土層……　4

３．遺構……　4

４．遺物……２１

Ⅲ　まとめ……４２

第２部　自然科学分析

Ⅰ　長崎県，黒丸遺跡における自然科学分析……　５１

１．黒丸遺跡の植物珪酸体分析……５１

２．黒丸遺跡における花粉分析……５４

３．黒丸遺跡における種実同定……５６

４．黒丸遺跡出土木材の樹種同定……５８

５．放射性炭素年代測定結果……５９

Ⅱ　黒丸遺跡の地形と地質……６１

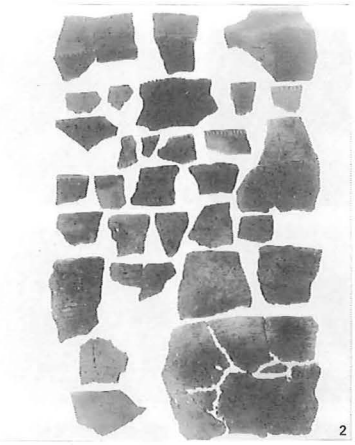
１．黒丸遺跡周辺の地形……６１

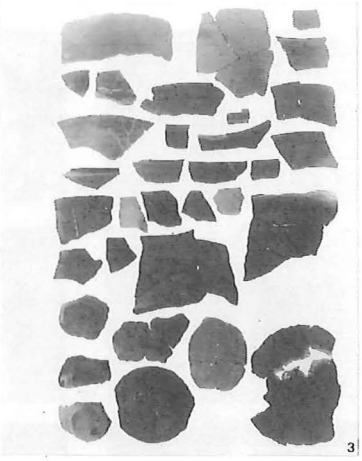
２．Ⅳ区における地層の堆積環境と貯蔵穴の関係……６２

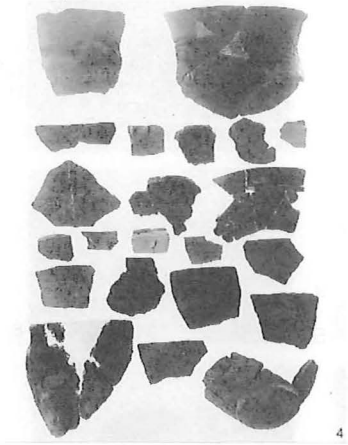
３．Ⅴ区の小流路の成因……６４

４．まとめ……６４

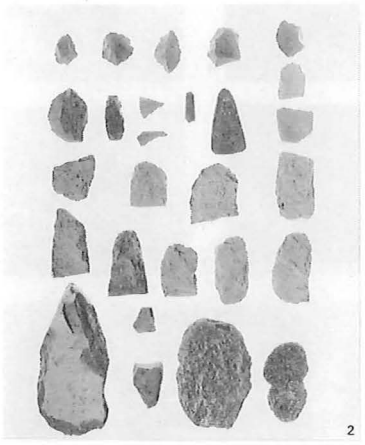
図版４

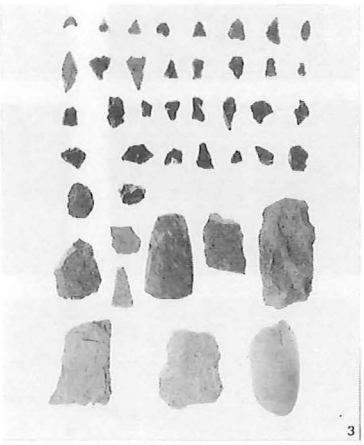


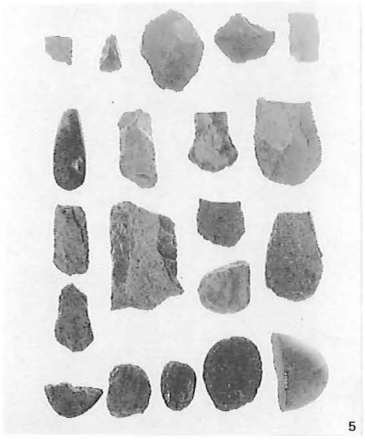




1．２層出土土器
2．２ｂ層出土土器
3．２ｂ層出土土器
4．２ｂ層・２ｃ層出土土器
5．２層・２ｂ層出土土器







1．２層出土石器
2．２層出土石器
3．2’層出土石器
4．２ｂ層出土石器
5．２ｂ層出土石器

出土遺物

第 1 部

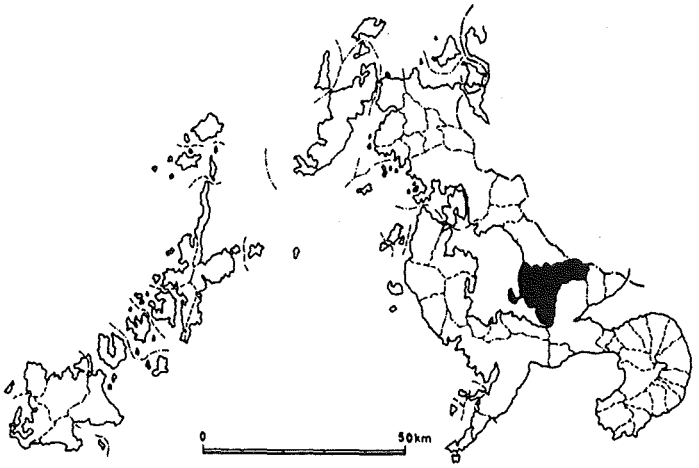
平成7年度調査

Ⅰ　地理的歴史的環境

1　地理的環境

遺跡は，大村市北部を流れる市内最大の郡川と接する扇状地の標高２～５ｍに所在する。

大村市は，長崎県の中央部にあり高速道路，空港，鉄道等の交通網の拠点的な位置にある。交通の利便性から工業・農業の集散基地として経済発展が飛躍的に延び続けている。



第１図　大村市の位置図

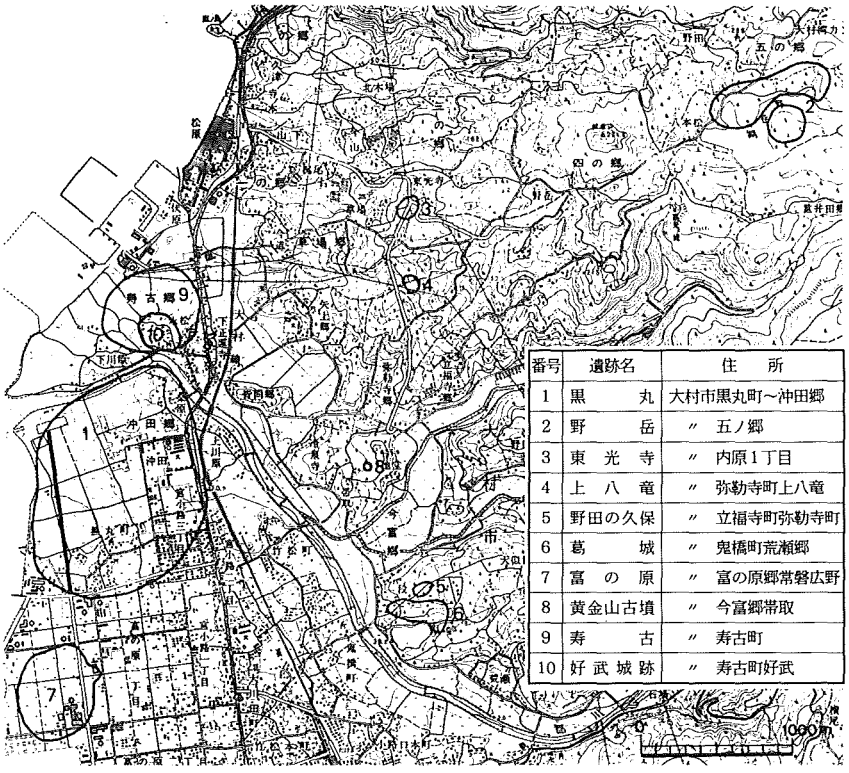
地質[註1]は，第三紀堆積岩を基盤とし上部に安山岩，玄武岩質の火山性岩石が覆い複雑な地形をなしている。地形は，前面に大村湾がひろがり沿岸では真珠，ハマチ，マダイの養殖の外に天然のナマコ，イワシ，エビ等の漁業が盛んである。背後は，東側に経ケ岳，五家原岳，多良岳，郡岳等の山系が連なり，多良山系の裾野の標高２３０ｍ～３００ｍは国天然記念物イチイガシ天然林が自生している。

2　周辺の遺跡

大村市は，現在２０５遺跡を埋蔵文化財の周知遺跡として把握している。

旧石器時代の遺跡は，位牌塔形石核の出土地で知られている野岳遺跡の外２０カ所がある。縄文時代の遺跡は，早期～後期にかけての良好な包含層が少ないが九州横断自動車道路建設[註2]に伴う発掘調査から後・晩期の葛城，野田の久保，上八竜，東光寺遺跡が確認されている。

また，黒丸遺跡[註3]は，今回



番号	遺跡名	住　所
1	黒　丸	大村市黒丸町～沖田郷
2	野　岳	〃　五ノ郷
3	東光寺	〃　内原１丁目
4	上八竜	〃　弥勒寺町上八竜
5	野田の久保	〃　立福寺町弥勒寺町
6	葛　城	〃　鬼橋町荒瀬郷
7	富の原	〃　富の原郷常磐広野
8	黄金山古墳	〃　今富郷帯取
9	寿　古	〃　寿古町
10	好武城跡	〃　寿古町好武

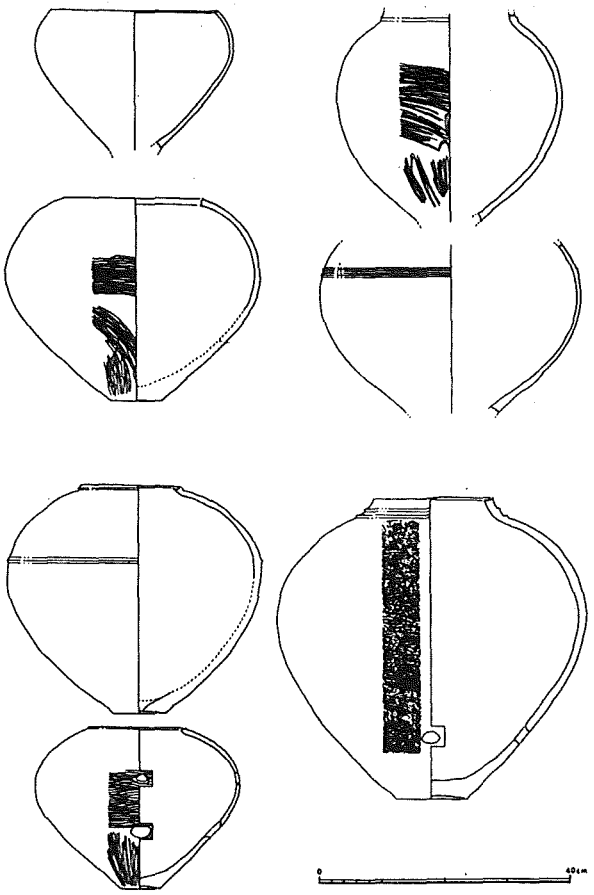
第２図　黒丸遺跡及び周辺の遺跡

の調査以前の昭和５２年～昭和５３年の調査で縄文晩期の甕棺，打製石斧の出土が知られている。

弥生時代は，平成６年度黒丸遺跡第二次調査[註4]で弥生時代中期前半～中葉の子児用甕棺９基と土壙１基を検出した。以後に継続する遺跡としては，昭和５５年から昭和６１年に発掘調査を実施した富の原遺跡がある。検出遺構に甕棺墓，住居跡[註5]があり，これに伴って鉄戈３本の外に弥生時代中期から後期前半にかけての土器等の遺物が出土している。

古墳時代は、石棺８基を検出した小左古石棺群[註6]（４～５世紀）や住居跡の発見があった稗田遺跡[註7]（４～５世紀）の外５世紀代の黄金山古墳[註8]，６世紀の鬼の穴古墳，７世紀代の玖島崎古墳群[註9]が知られている。

古代から中世は，大上戸川条理[註10]，沖田黒丸条理[註11]が上げられる。また，郡川北岸の好武城跡[註12]周辺の寿古遺跡[註13]からは白磁椀，石鍋，土師器が出土しており，１２～１３世紀に栄えた地域と考えられる。その後，キリシタン大名の大村純忠（１５３３～１５８７年）による寺院，仏閣の破壊を受けたため関連する字名が各所に伝わるが，確認までには至っていない。



第３図　黒丸遺跡二次調査出土甕棺

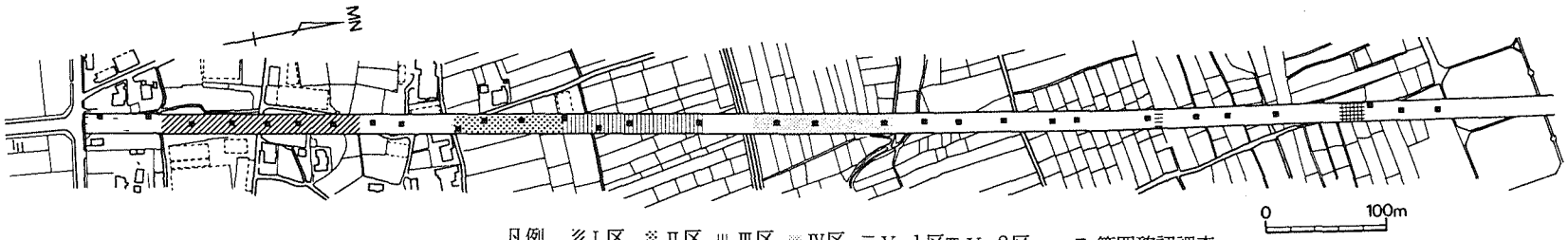
近世は，現在大村市役所南側に大村家第１９代善前が慶長３年（１５９８）玖島城[註14]を築城し，今日に至っている。

Ⅱ　調査（三次調査・所在地：大村市黒丸町５８７番地１～３５２）

１　調査の経緯と概要

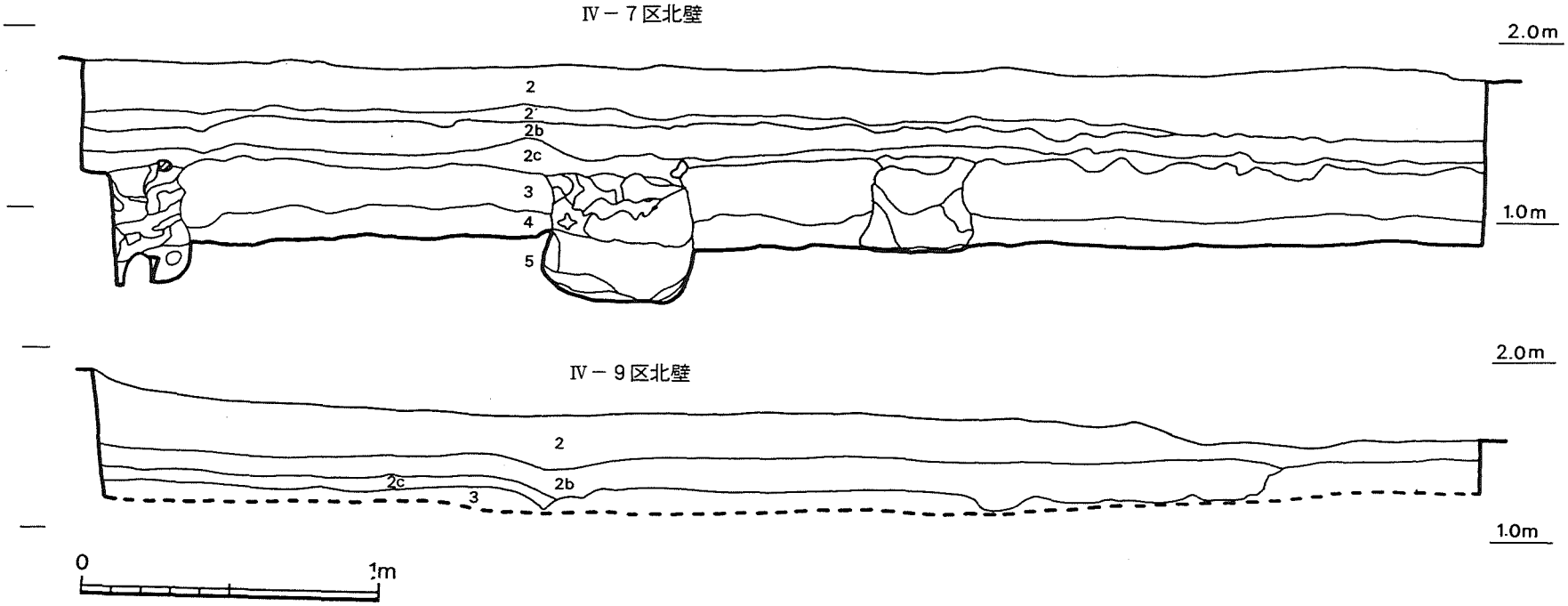
調査は，平成２年度の範囲確認調査の結果に基づき平成５年度から３カ年計画でⅠ～Ⅴ区の発掘調査を行ってきた。

これまでの調査で，平成５年度のⅠ・Ⅱ区に古代の溝や中世の柱穴群，土壙，溝等の生活遺構を確認した。平成６年度のⅢ区は，弥生時代の壺棺墓９基，土壙墓１基を検出し，墓地の実態解明に貴重な資料を得ている。平成７年度は，調査の最終年度にあたるⅣ区（１，４４０m²）とⅤ－２区（３５２m²）について発掘調査を実施した。Ⅳ区は，長さ９０m，幅１６mの調査範囲を南北１０m，東西１６mに区切り前年度のⅣ－１・２区に引き続き調査区の名称をⅣ－３区～１１区とし，精査を行った。Ⅴ区は，前年度のⅤ－１区から北側へ約１５０mの地点に設定し，南北２３m，東西１５mをⅤ－２区と名称を付して精査した。



凡例　▨Ⅰ区　▩Ⅱ区　▥Ⅲ区　▧Ⅳ区　☰Ⅴ-1区▦Ⅴ-2区　■範囲確認調査

第4図　調査区



第5図　Ⅳ－7・9区土層図

2　土層

Ⅳ区の層序は，１層に耕作土が１５～２０ｃｍ堆積している。２層（縄文～中世時代の遺物出土）は，灰黄色粘質土が調査区西側Ⅳ－７・８区で約５０ｃｍ前後，東側で３０ｃｍ前後の堆積があった。３層は，黒色泥炭層で２０～２５ｃｍ。４層は，暗茶灰色土。５層は，淡青灰色砂質土。６層は，礫層を基本層序とする。

ただし，Ⅳ－７～１１区は，２層と３層の間層に２’～２ｃ層の堆積がある。２’層（弥生時代～縄文時代の遺物出土）は，灰白黄色砂質土で３～５ｃｍ程度の堆積が認められる。地区によっては存在する部分と存在しない部分がある。２ｂ層（縄文時代晩期の遺物が主体を占める）は，暗灰黒色土が約１５～２０ｃｍ程堆積する。２ｃ層（縄文時代の遺物出土）は灰黒黄色土で自然の木片・木葉等の植物遺体と小礫が混じり，約５～１０ｃｍの堆積がある。

Ⅴ－２区は，１層の水田耕作土が１５～２０ｃｍ。２層は，暗茶色土が１０ｃｍ。３層は，明黄灰色砂層。４層は，砂礫層が堆積し，弥生時代中期の土器が出土している。また，調査区内の北側で東西方向に延びた小河川跡を検出し，３層以下に砂，粘質土がサンドウィチ状に約４０ｃｍ堆積し，植物遺体や弥生時代後期の遺物を包含した河川堆積層を確認している。

3　遺構

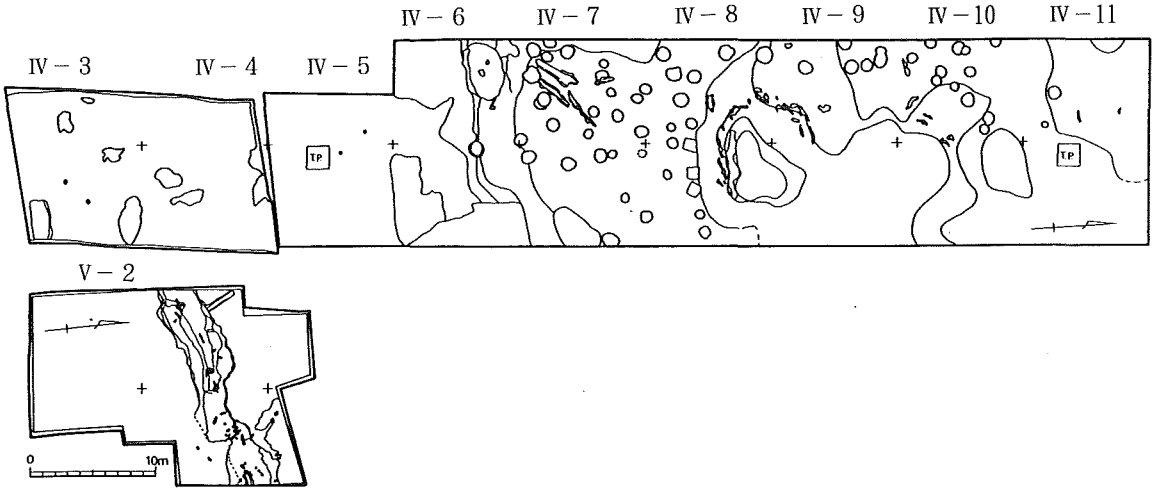
Ⅴ－３・４区からは，３層面に円礫の集中が７カ所認められたが掘り込みプラン及び遺物の出土は認められず自然堆積によるものと考えられる。

Ⅳ－５区は，集石と埋甕を２層面で検出する。

Ⅳ－６区は，南北３ｍ，東西４ｍの楕円形を呈するプランの住居跡を検出し，中央部に４０×３０ｃｍの焼土を伴っていた。

Ⅳ－７～１１区からは，６２基のドングリ貯蔵穴を検出した。貯蔵穴の形態は，断面がフラスコ状とU字状があり素掘りのまま木の枝で蓋をしたものと木枠で囲み枝で蓋をしたものがある。

以下にⅣ－５～１１区の遺構状況について記述する。なお，Ⅳ－７～１１区のドングリ貯蔵穴については一覧表としている。



第６図　Ⅳ－３～１１区・Ⅴ－２区遺構配置図

Ⅳ－５区

１号集石；南北８０ｃｍ，東西７０ｃｍの範囲に１７～１８ｃｍ程度の円礫を２層面で検出した。遺物には，５３の縄文晩期の土器底部と使用痕ある剝片，スクレイパーの石器が出土している。土壙の掘り込みプランについては確認できなかった。また，礫は平面に並べたのみで積み重ねた状態ではなかった。礫上面の標高で１．９ｍを測る。

埋甕　　；単独で検出し主軸方位Ｎ４９°Ｅを示す。底部から胴部中位にかけては，ほぼまとまって出土するが，口縁部，胴部上位については，耕作による削平を受け消失している。

Ⅳ－６区

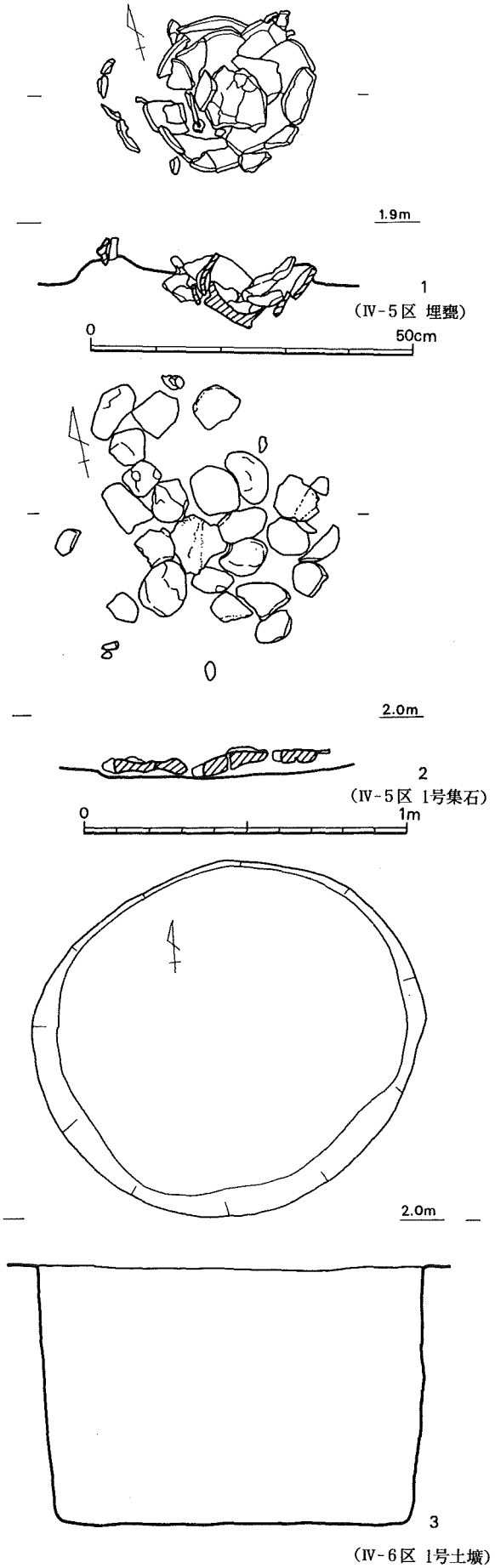
１号土壙；径１２０ｃｍのほぼ円形プランをしている。検出面で深さ７９ｃｍ，底径１０８ｃｍを測る。含土は，ブロック状に土の塊が堆積している。上面は，明灰黄色から徐々に黒色の粘性の強い土に変化する。遺物に土師器片，須恵器（第２６図－５１）が出土している。

２号土壙；Ⅳ－５区と６区の２層に検出した。東西約５ｍ，南北４ｍに灰色土の広がりを認め掘り下げを行い１５ｃｍ程で黒色土（３層）となる。遺物は，土師器，須恵器，剝片石器等が出土している。

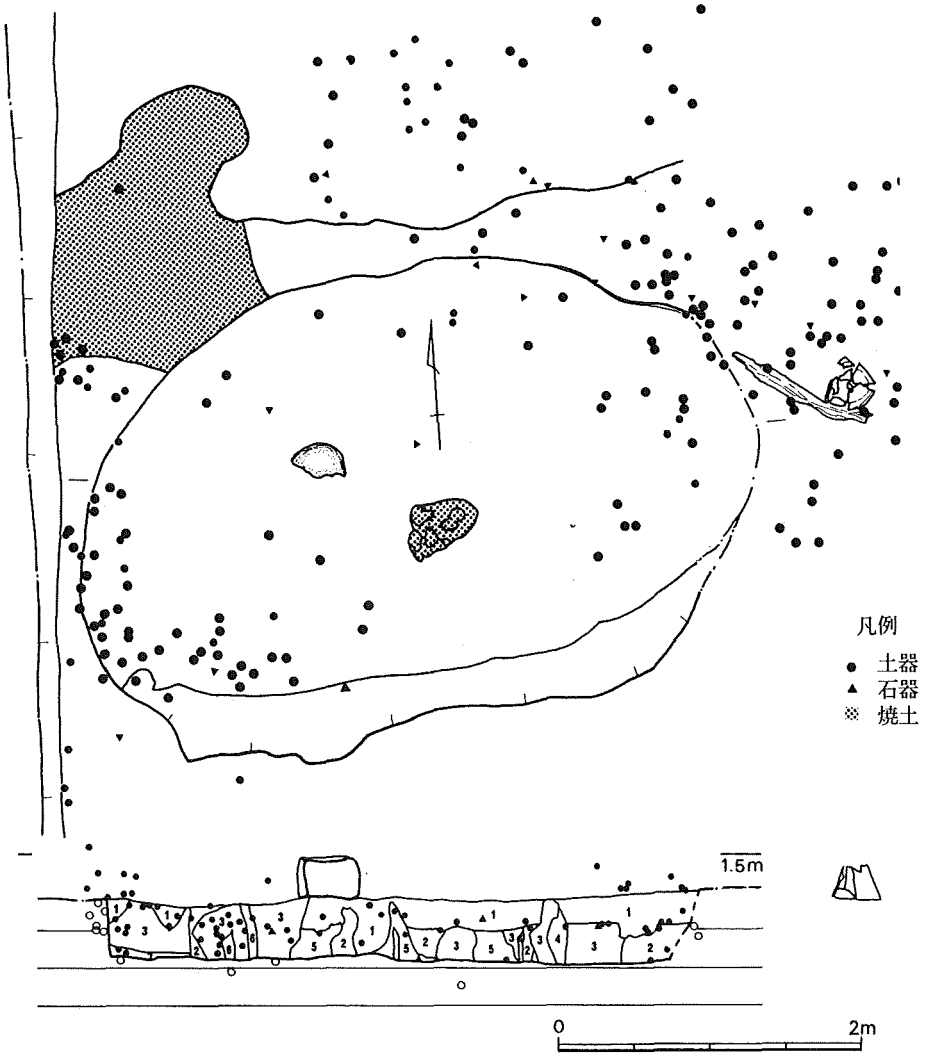
住居跡　；２ｂ層上面で検出。楕円形のプランをなし，東西の長軸４６０ｃｍ，南北２９０ｃｍを測る。プラン中央部に焼土塊と西側に５０ｃｍ程離れて凹石（火を受け赤色を呈する）が出土する。住居跡外の東側に山形口縁を有する浅鉢が出土している。焼土塊は，プラン外の北西隅に廃棄した状況で薄く（２～３ｃｍ）堆積する。遺物は，縄文時代晩期の土器，石器がプラン内外より出土している。西側の壁面立ち上がりで１５ｃｍ程度である。

Ⅳ－７区

ドングリ貯蔵穴；３層上面から土壙の掘り込みを行っており，２５基を検出している。１０号～２５号周



第７図　埋甕（1/10・1号集石・１号土壙（1/20）

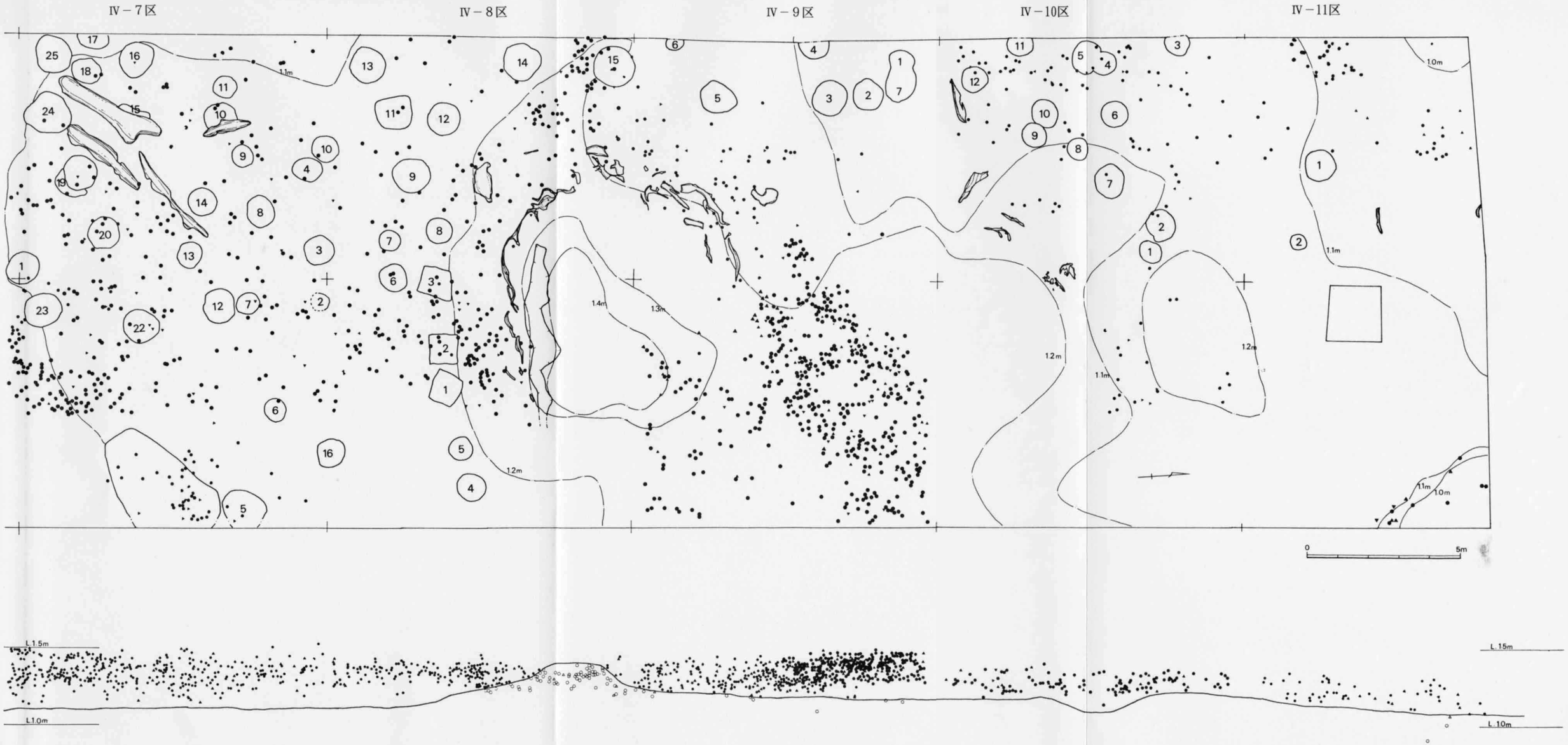


第８図　Ⅳ－６区住居跡

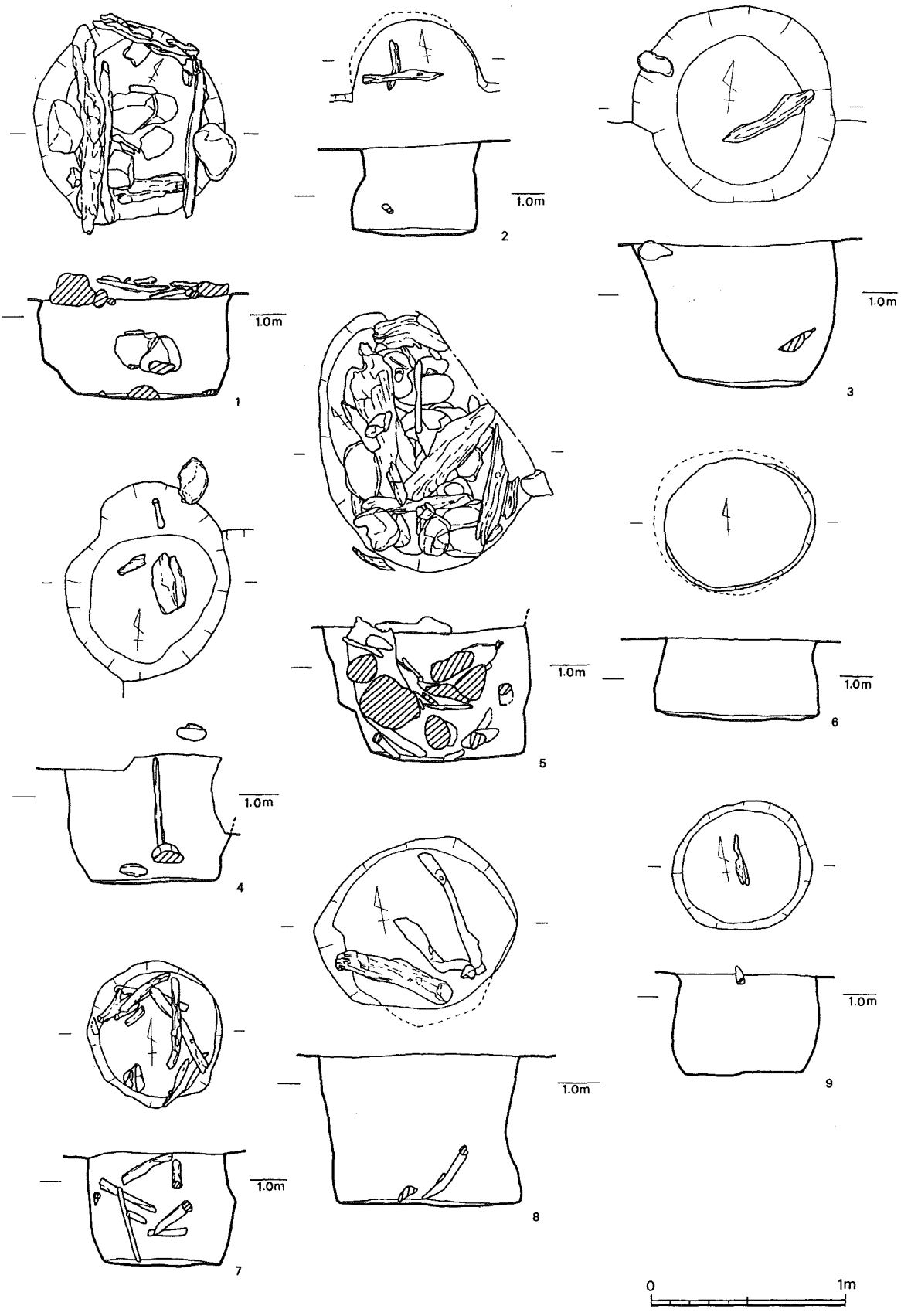
ドングリ貯蔵穴一覧表１

図番号	地区番号	特　　徴
10-1	Ⅳ－７区１号	上部は，長さ１～0.8mの木材と0.3～0.5mの木材で長方形に土壙を囲み，木材の押さえに20ｃｍ前後の円礫を用いている。貯蔵穴の深さは，50cm程度で掘り込み上面径95cm，底面径70cmを測る。遺物には堅果類の実と植物の葉が出土している。掘り込みの層は，泥炭層を40cm，礫層を12cm程穿っている。
10-2	Ⅳ－７区２号	上部の木枠及び礫は認められなかった。貯蔵穴内より自然木材２点。掘り込みプランは円形となし上面径60cm，底面径63cm，深さ45cmの断面が袋状をなしている。
10-3	Ⅳ－７区３号	円礫が１点と自然木材１点が貯蔵穴内より出土。プランは，円形とし上面径100cm，底面径で64cm，深さが70cmを測る。
10-4	Ⅳ－７区４号	上部に礫１点と貯蔵穴内に木材３点が出土。木材は，木枠としていたものが落ち込んだものと思われる。上面径が100×82cmの楕円形のプランを呈し底面径は65cmを測る。
10-5	Ⅳ－７区５号	厚さ20～25cmの比較的大きな木材を使用し蓋をしていたものと思われ，上面から下面に落ち込んだ状況を示している。また，蓋材が水で浮かないよう15～20cmの円礫を乗せている。上面径で130×115cm，深さ67cm，底面径で77cmを測る。
10-6	Ⅳ－７区６号	上面の径が77cm，深さ43cm，底面径で83cmの断面袋状を呈する。遺物等の出土なし。

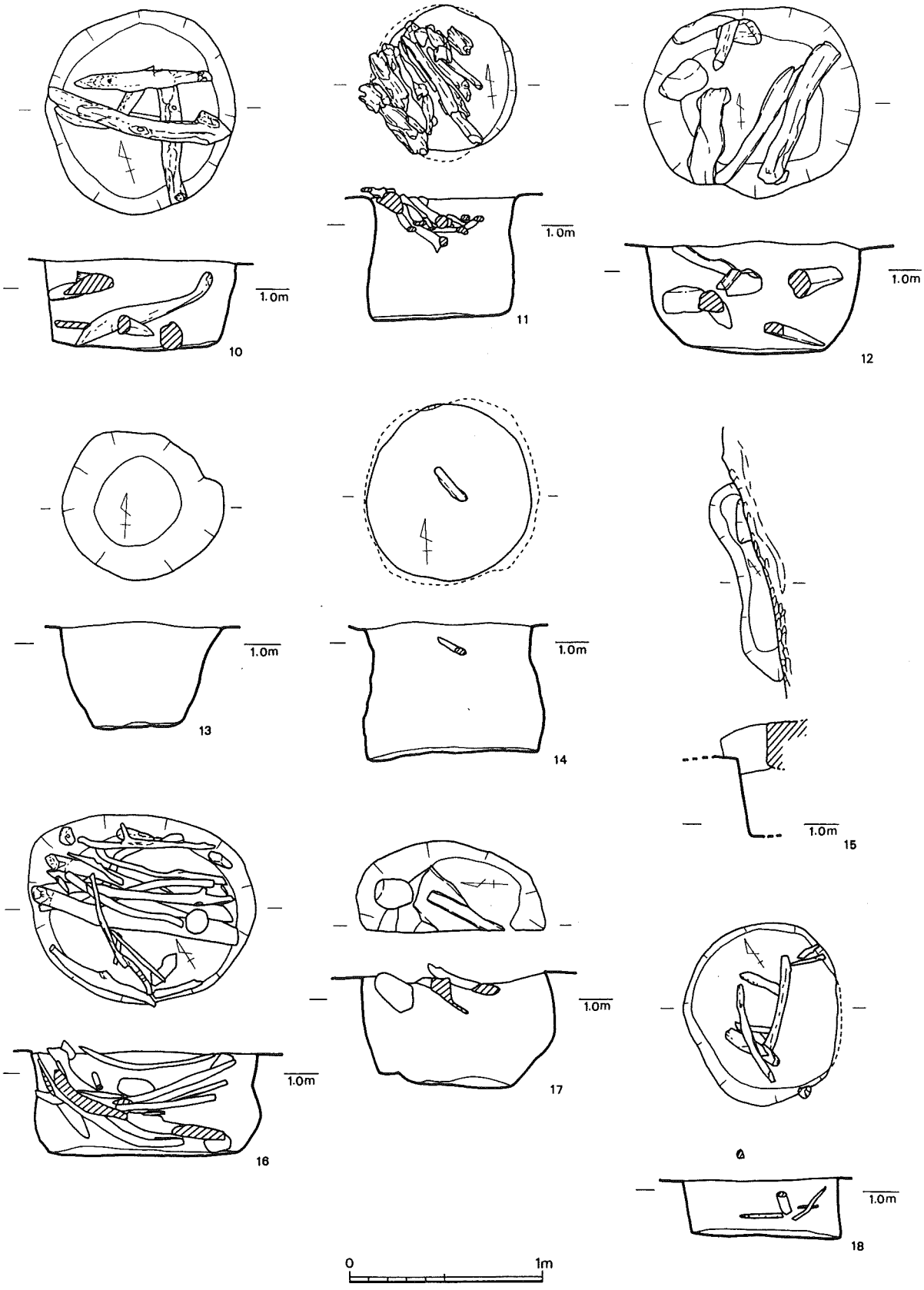
図番号	地区番号	特　　徴
10-7	Ⅳ－７区７号	貯蔵穴の上部は，木材・石材による囲みは認められないが，内部に木材片が落ち込んでおり上部に木材の蓋をしていたと思われる。上面の径は，75×68cm，深さ57cm，底面径が60cmを測る。
10-8	Ⅳ－７区８号	長さ60～70cmの木材が貯蔵穴内に落ち込む。上面の径が104×86cm，深さが76cm，底面径で92cmを測り，断面袋状をなす。
10-9	Ⅳ－７区９号	木片１点が上面より３cm程突き出ている。プランは，ほぼ円形で上面径は，70×65cm，深さ50cm，底面径が59cmを測る。断面は袋状となっている。
11-10	Ⅳ－７区10号	比較的幹の太い木材を用いる。交互に木材が落ち込んでいる状況から，四角形の囲みを行なっていたものと推定される。上面径は99×105cm，深さ47cm，底面径が85cmを測る。
11-11	Ⅳ－７区11号	上面の蓋に使用してた木材が南北方向へ平行に重なっている。上面径は，75×75cm，深さ62cm，底面径で70cmを測る。
11-12	Ⅳ－７区12号	長さ80cm程と30cm程の木材と礫が貯蔵穴内に落ち込む。プランは楕円形を呈し，上面径で110×97cm，深さが58cm，底面径で70cmを測る。
11-13	Ⅳ－７区13号	プランは，円形を呈し，上面の径が83×76cm，深さ53cm，底面径で45cmを測る。貯蔵穴内からの遺物出土なし。



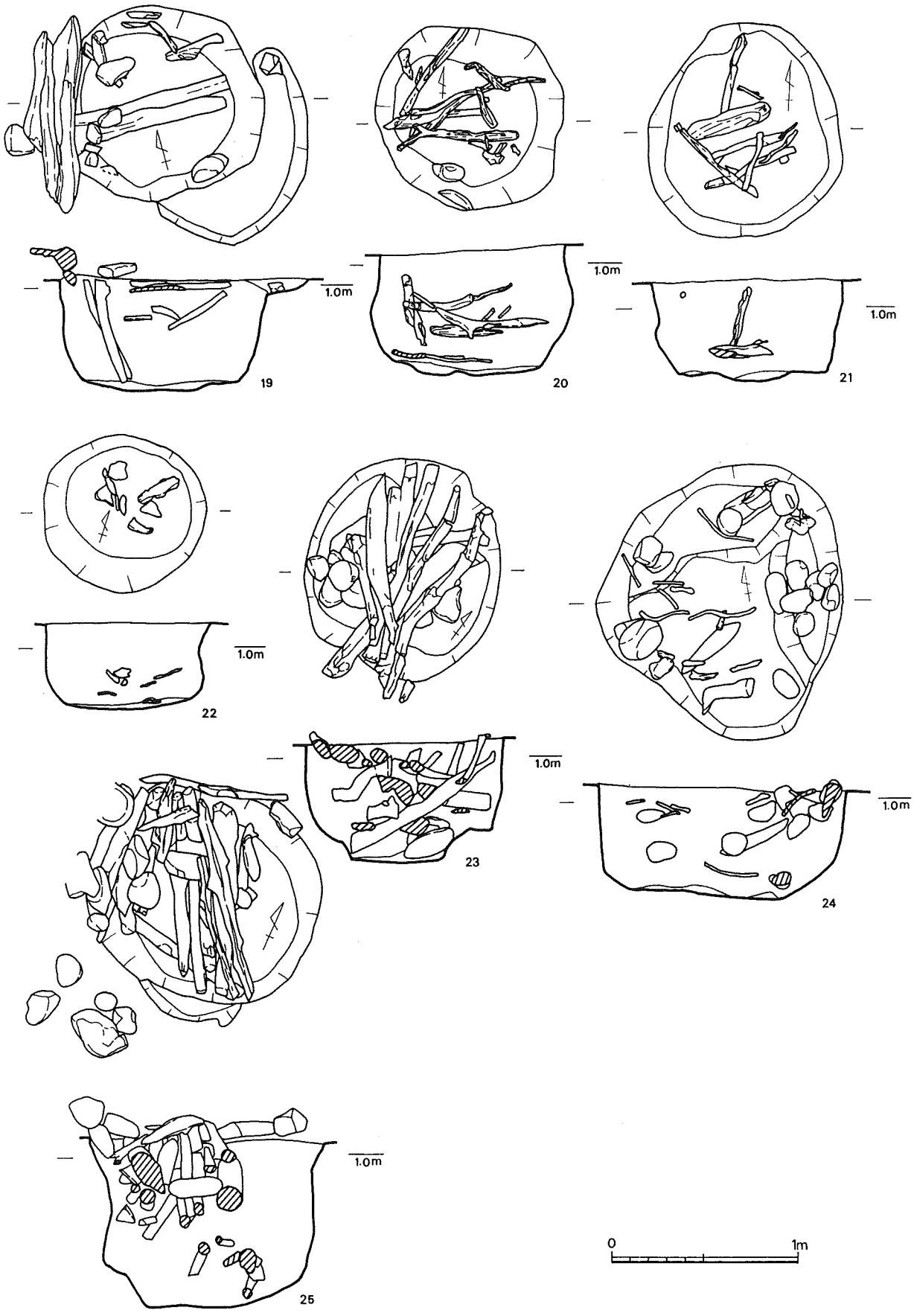
第9図　Ⅳ－7～11区
ドングリ貯蔵穴配置図及び遺物ドットマップ



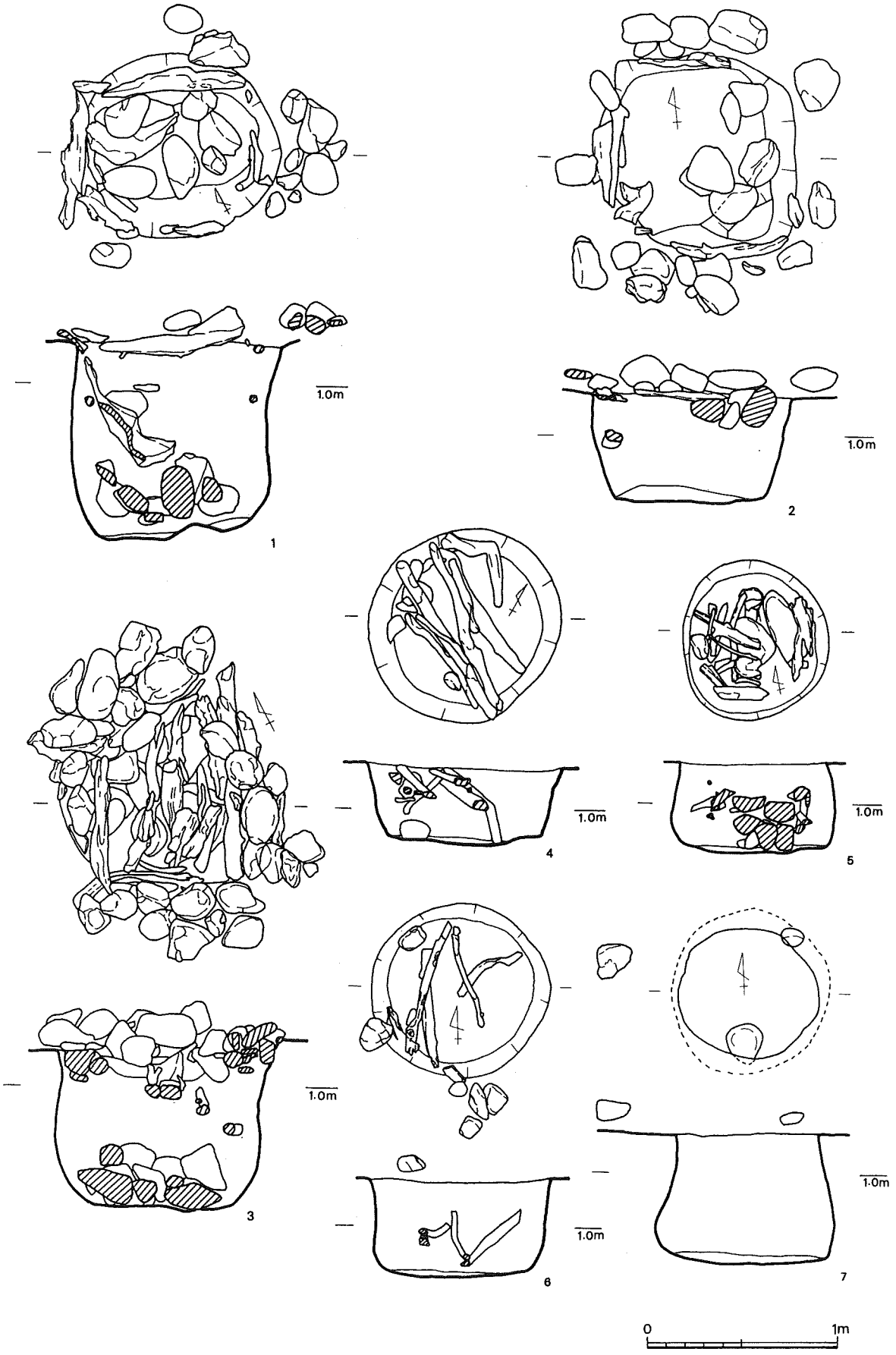
第10図　Ⅳ－７区ドングリ貯蔵穴①



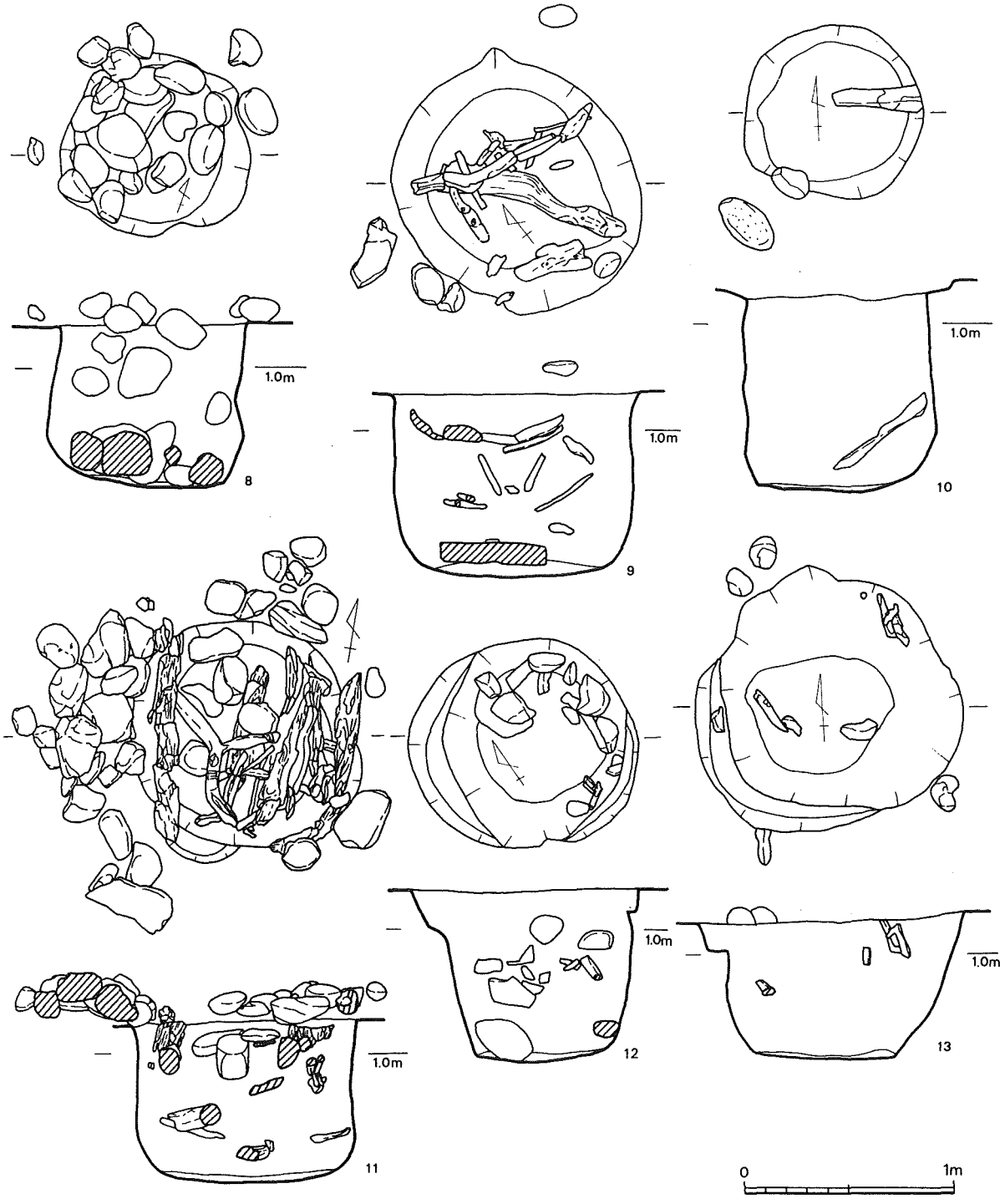
第11図　Ⅳ－７区ドングリ貯蔵穴②



第12図　Ⅳ－７区ドングリ貯蔵穴③



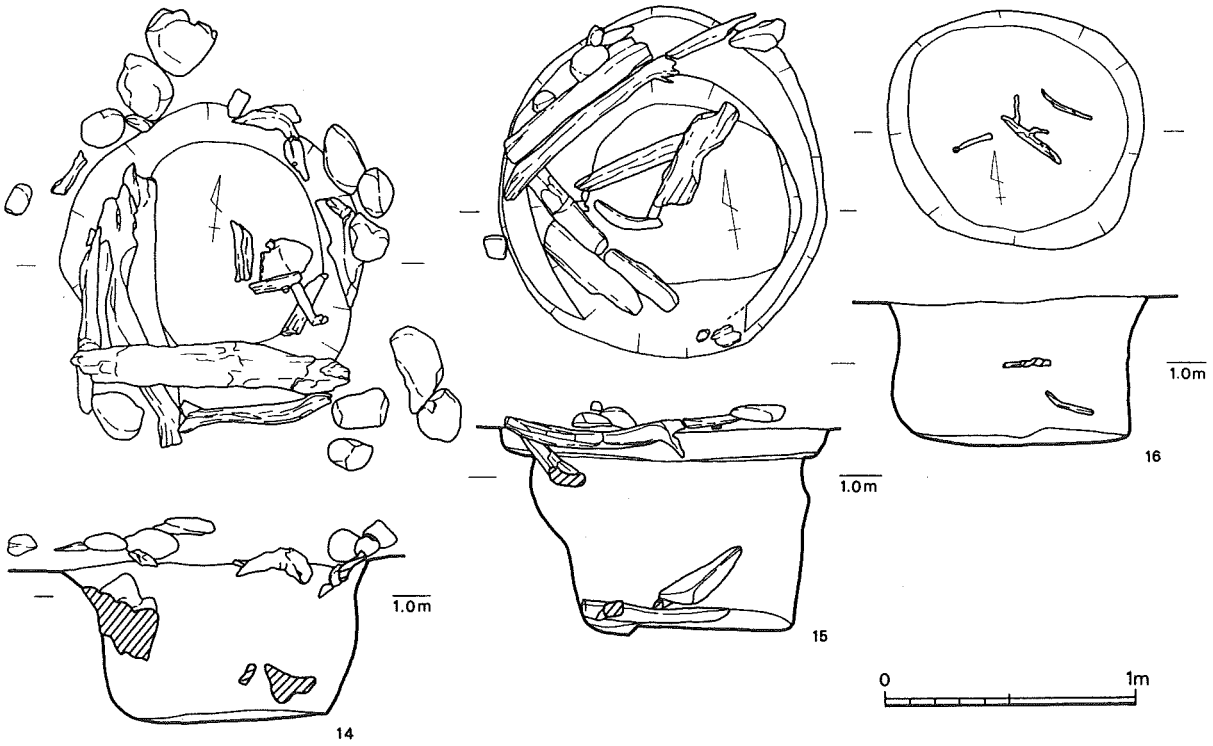
第13図　Ⅳ－８区ドングリ貯蔵穴④



第14図　Ⅳ－8区ドングリ貯蔵穴⑤

ドングリ貯蔵穴一覧表2

図番号	地区番号	特　　徴
11-14	Ⅳ－7区 14号	貯蔵穴内より，長さ22cmの木材1点が出土。ほぼ円形のプランをなし，上面径で84×90cm，深さ66cm，底面径が88cmを測る。断面は袋状となる。
11-15	Ⅳ－7区 15号	カシの木によって貯蔵穴を塞いだ状態にあり，全容を確認できない。最深部で57cmを測る。内部から堅果類出土あり。
11-16	Ⅳ－7区 16号	東西方向に木材を重ね合わせて蓋としていた状況が確認できる。上面の径が114×98cm，深さ53cm，底面径で96cmを測る。
11-17	Ⅳ－7区 17号	西側反面は，調査区外にあたる。遺物に土器片，円礫，木材が出土する。上面の径が95cm，深さ58cm，底面径で67cmを測る。
11-18	Ⅳ－7区 18号	貯蔵穴内の南北方向に60cm程度の木材と小枝状の木片が散見する。上面の径は，95×79cm，深さ28cm，底面径76cmを測る貯蔵穴。
12-19	Ⅳ－7区 19号	東側に浅いステップ状の段を有する貯蔵穴。上部の南北方向に木枠の一部が残り，東西方向に蓋をしていたと思われる木材2点が内部に落ち込む。上面の径で110×105cm，深さ59cm，底面径が80cmを測る。

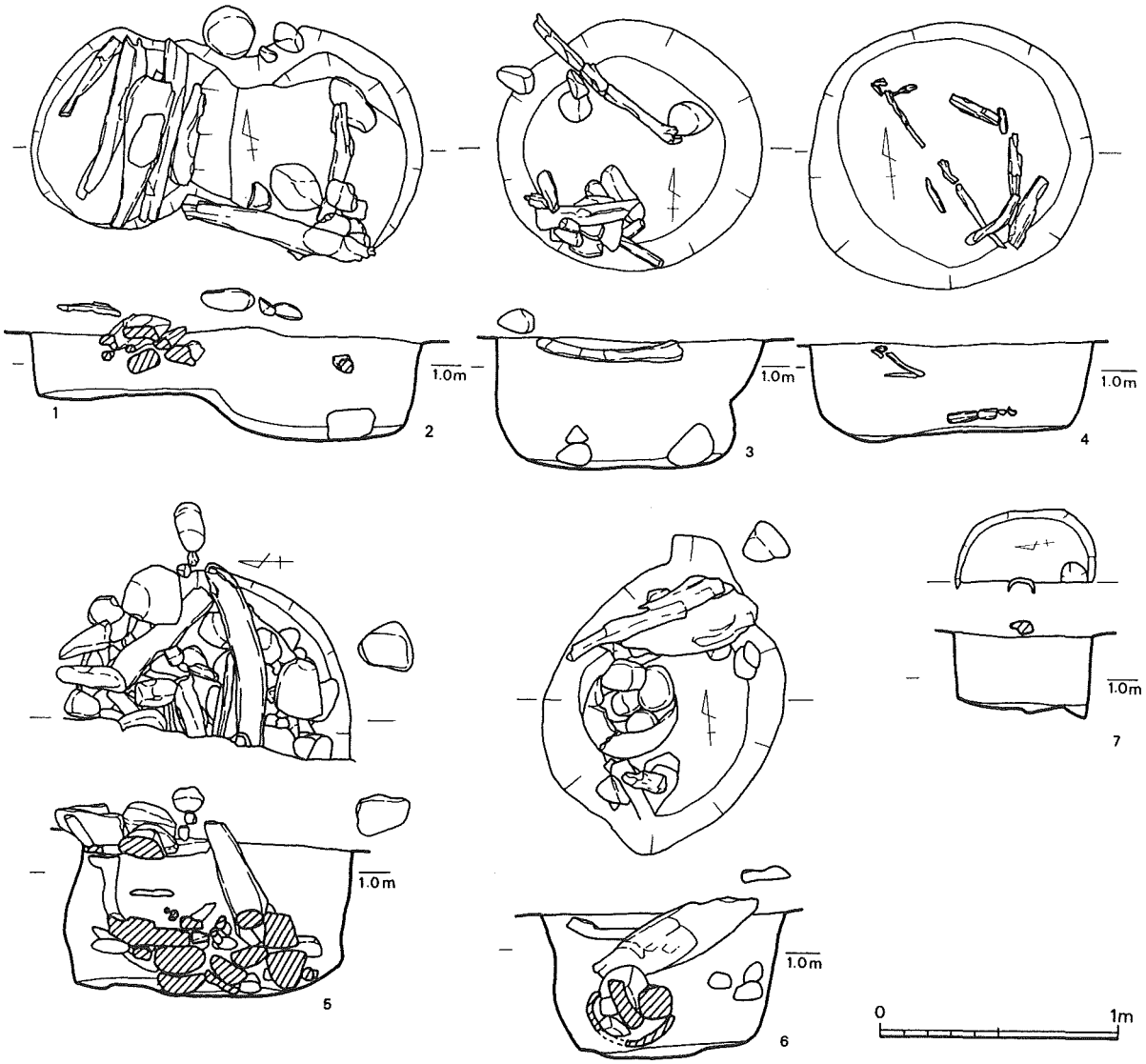


第15図　Ⅳ－８区ドングリ貯蔵穴⑥

ドングリ貯蔵穴一覧表３

図番号	地区番号	特　　徴
12-20	Ⅳ－７区20号	60cm程度の枝材が交互に重なり貯蔵穴内に落ち込む。上面の径は，100×97cm深さ65cm，底面径で76cmを測る。
12-21	Ⅳ－７区21号	長さ50～40cm前後の細い枝材に混じり太い木材が１点貯蔵穴内に落ち込む。上面径が102×113cm，深さ53cm，底面径で79cmを測る。
12-22	Ⅳ－７区22号	貯蔵穴内に土器片と木材片が出土する。上面の径が85×85cm，深さ48cm，底面径で65cmを測る。貯蔵穴内の東側壁を抉り袋状に掘り込んでいる。
12-23	Ⅳ－７区23号	南北方向に長さ100～90cmの木材を重ね合わせて蓋をしていた状況が窺える。また，蓋の押さえに置いた礫が西側から転落した形状を示している。上面の径が103×118cm，深さ63cm，底面径で83cmを測る。
12-24	Ⅳ－７区24号	10～20cm前後の円礫が貯蔵穴内の東側に集中して落ち込む。貯蔵穴は比較的大きい部類になるが蓋材が少量残る程度である。上面の径は，130×145cm，深さ59cm，底面径で76cmを測る。
12-25	Ⅳ－７区25号	100cmを越す木材を南北方向に重ね，下に支え木を３ケ所設置した状況をなしている。礫は，西側から東側へ落ち込んだ状況を示している。上面の径が125×120cm，深さ92cm，底面径で58cmを測る。
13-1	Ⅳ－８区１号	貯蔵穴上部に木の囲いを北側と西側に設置していた状況が木材の依存状況から認められる。また，東側に礫の集まりがあることから貯蔵穴上部を礫で四角に囲っていたことが窺える。貯蔵穴内部は，蓋石と思われる礫が西側から転落した状況で堆積している。上面の径が110×97cm，深さ104cm，底面径が79cmを測る。
13-2	Ⅳ－８区２号	南・北・西側に木枠の残存がある。周辺には，30～20cm程の礫の囲みがあり，木枠の押さえに使用していたと考えられる。内部には木材等の遺物は認められない。プランは，隅丸方形を呈する。上面の径は，104×103cm，深さ55cm，底面径が77cmを測る。
13-3	Ⅳ－８区３号	基本的な貯蔵穴の形態を示す資料で，貯蔵穴の上部を木と礫で囲み，上部を覆うために木材を上面に乗せ，さらに木材が水による流出をおこさないよう礫を重石として乗せている。掘り込みのプランは，上面径が112×98cm深さ86cm，底面径で72cmを測り，断面は下部がやや下膨れ状態に造っている。

図番号	地区番号	特　　徴
13-4	Ⅳ－８区４号	100cm前後の木材を東西方向に並べ貯蔵穴の蓋としている。下部に15cmほどの礫が落ち込む。上面の径は，100×100cmのほぼ円形プランをとし，深さ40cm，底面径で80cmを測る。
13-5	Ⅳ－８区５号	貯蔵穴の中央部に15cm程度の礫が重なり合って堆積しており，蓋石に使用していたと思われる。蓋の木材は，朽ち果ててほとんど消失している。上面の径で75×83cm，深さが46cm，底面径73cmを測る。断面は，袋状を呈する。
13-6	Ⅳ－８区６号	50～70cm程度の木材が貯蔵穴内に落ち込む。上部の周辺に礫が７点残っている。上面の径は，93×90cm，深さ49cm，底面径は，76cmを測る。
13-7	Ⅳ－８区７号	上部に10cm程度の礫がある。貯蔵穴内にも礫１点が落ち込む。上面径は，73×67cm，深さ68cm，底面径は，80cmの断面袋状をなす。
14-8	Ⅳ－８区８号	貯蔵穴を覆ってた蓋材は消失しているが，重石に用いていた礫10～20cmは内部に落ち込んでいる。上面の径は，88×86cm，深さ76cm，底面径は67cmを測るが，底面より25cm上部が径の最大となり95cmを測る。
14-9	Ⅳ－８区９号	貯蔵穴の上面と下面にやや太い木材がある。この中間部は，小枝材が残る。また，礫は貯蔵穴内に１点と貯蔵穴外の周辺に５点が認められる。上面の径は，115×119cm，深さ87cm，底面径が８３ｃｍを測る。
14-10	Ⅳ－８区10号	長さ57cmの木材１点が貯蔵穴内に落ち込む。上面の径は，84×77cmあり，深さ93cm，底面径で71cm。
14-11	Ⅳ－８区11号	貯蔵穴の西側周囲に20～25cm程の礫が集中する。また，東側は蓋材と見られる木材が集中する。上面の径は，104×106cm，深さ76cm，底面径で82cmを測り，底面より20cm上位に断面の膨らみを持つ。
14-12	Ⅳ－８区12号	貯蔵穴の北東側に礫と木材片が集中する。上面の径は，108×95cm，深さ80cm，底面径が61cm。貯蔵穴の上面から10～20cm下げた壁面東西にステップを設けている。

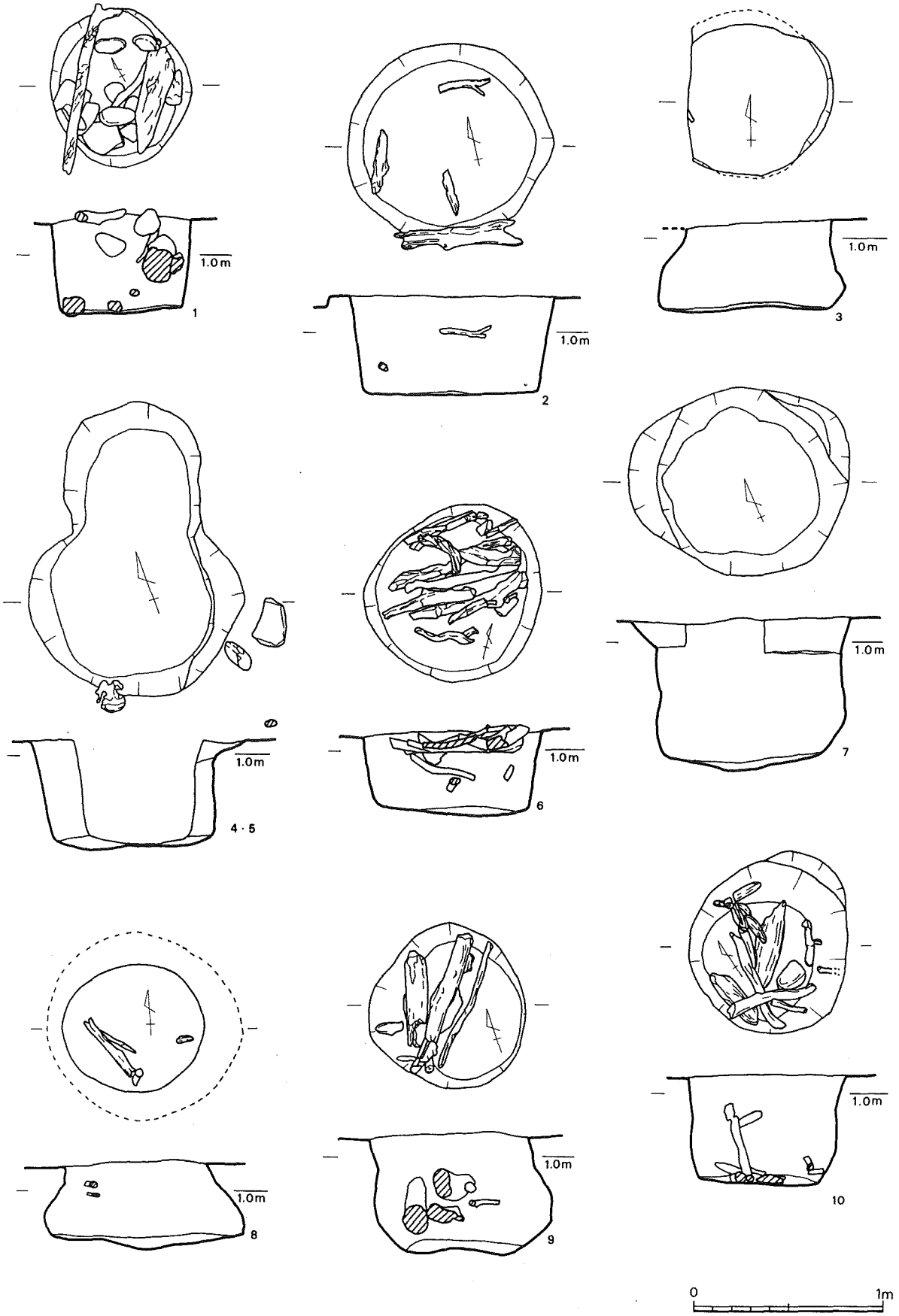


第16図　Ⅳ－９区ドングリ貯蔵穴⑦

ドングリ貯蔵穴一覧表４

図番号	地区番号	特　　徴
14-13	Ⅳ－８区 14号	比較的大きい貯蔵穴でありながら木材等の遺物はわずかである。上面の径は，127×115cm，深さ61cm，底面径で66cm。上面から15cm程下げた壁面の西側にステップを設けている。
15-14	Ⅳ－８区 13号	礫が北側に貯蔵穴を囲むように並び，上面の西側と南側に木枠部分が残存している。上面の径は，120×120cm，深さ61cm，下面径は86cmを測る。
15-15	Ⅳ－８区 15号	貯蔵穴の北側と西側に木枠が残る。上面の径は，129×138cm，深さ76cm，底面径で81cm。壁内面の南側以外の周囲にステップが巡る。
15-16	Ⅳ－８区 16号	貯蔵穴内に枝材が３点落ち込む。上面の径は，100×92cm，深さ56cm，底面径で85cm。
16-1	Ⅳ－９区 1号	貯蔵穴上面の蓋材の取り上げで７号との切り合い関係があきらかとなり，当初１基としてカウントしていたが２基とした。貯蔵穴の蓋材は，比較的偏平な木材をあてている。上面の径は，83cm，深さ26cm，底面の径が74cmを測る。
16-2	Ⅳ－９区 7号	南側と東側に木枠材あり，その周辺に20～10cmの礫が集まる。上面の径は，90cm，深さ42cm，底面径が58cm。
16-3	Ⅳ－９区 2号	木材及び礫が北側と南側に別れて残存する。下面から20cm上位に壁面を穿っている。上面の径は，110×104cm，深さは，51cm，底面径で84cmを測る。

図番号	地区番号	特　　徴
16-4	Ⅳ－９区 3号	貯蔵穴の上面と内部に木材が残存する。上面での径は，117×110cm，深さ36cm，底面の径で90cmを測る。この貯蔵穴は，イチイガシの実がほぼ満杯状態で土嚢袋１７袋分があった。
16-5	Ⅳ－９区 4号	礫の落ち込みがもっとも多い貯蔵穴である。蓋材に厚みのある木材を用いている。上面の径は，111cm，深さが65cm，底面径で87cmを測る。
16-6	Ⅳ－９区 5号	貯蔵穴内に厚みのある木材が落ち込んでいる。下面に鞘状の木製容器が礫４個に押さえ込まれた状態で出土した。上面の径は，100×119cm，深さ60cm，底面径は69cmを測る。
16-7	Ⅳ－９区 6号	西側は路線外のため全容を把握できない。南西隅から掘り込みが深くなり，イチイガシの実が出土する。
17-1	Ⅳ－10区 1号	西側と東側に木材を配置し，礫は南西隅にかたまった状態で落ち込んでいる。上面の径は，73×83cm，深さ52cm，底面の径が63cmを測る。
17-2	Ⅳ－10区 2号	南側上面の貯蔵穴淵に木材が残存するが，貯蔵穴内及び周囲には礫がない。上面の径が107×104cm，深さ52cm，底面径が90cmを測る。



第17図　Ⅳ－10区ドングリ貯蔵穴⑧

周辺に長さ１５０～３８０ｃｍほどの自然木が認められる。

Ⅳ－８区

ドングリ貯蔵穴；１６基検出。貯蔵穴の北側が２０ｃｍ程の高まりをなし，周囲を円形に自然木で囲み浮き島状としている。

Ⅳ－９区

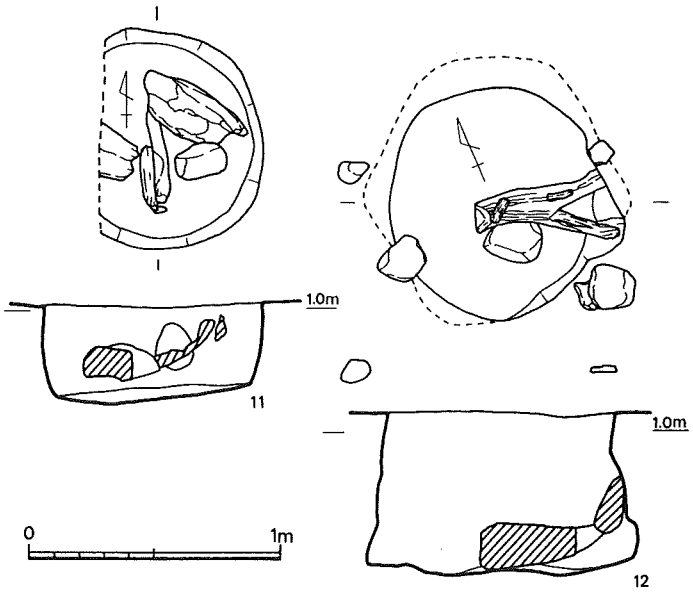
ドングリ貯蔵穴；７基検出。調査区の西側で北へ向かって貯蔵穴が延びる。遺物は，東側部分に集中して出土している。

Ⅳ－１０区

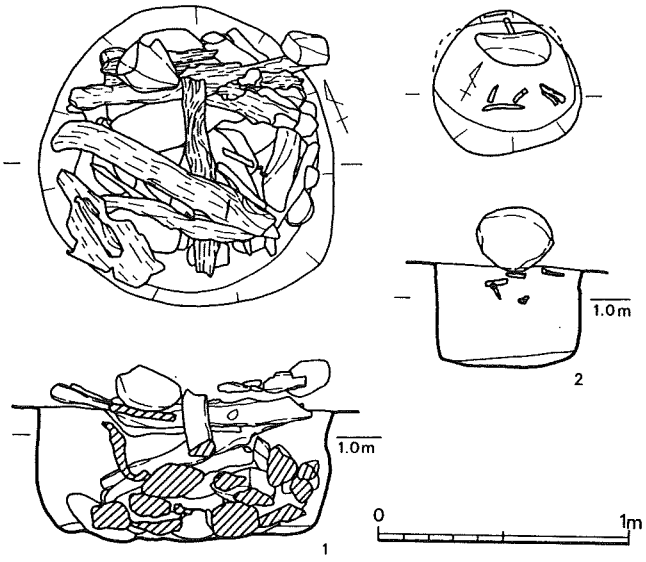
ドングリ貯蔵穴；１２基検出。Ⅳ－９区の延長で西側部分に貯蔵穴が集中し，東側部分は３層が１０ｃｍ程高くなり遺構・遺物が減少する。

Ⅳ－１１区

ドングリ貯蔵穴；２基検出。この地区では，極端に貯蔵穴・遺物が減少し調査区外の西側へ拡がると推測される。



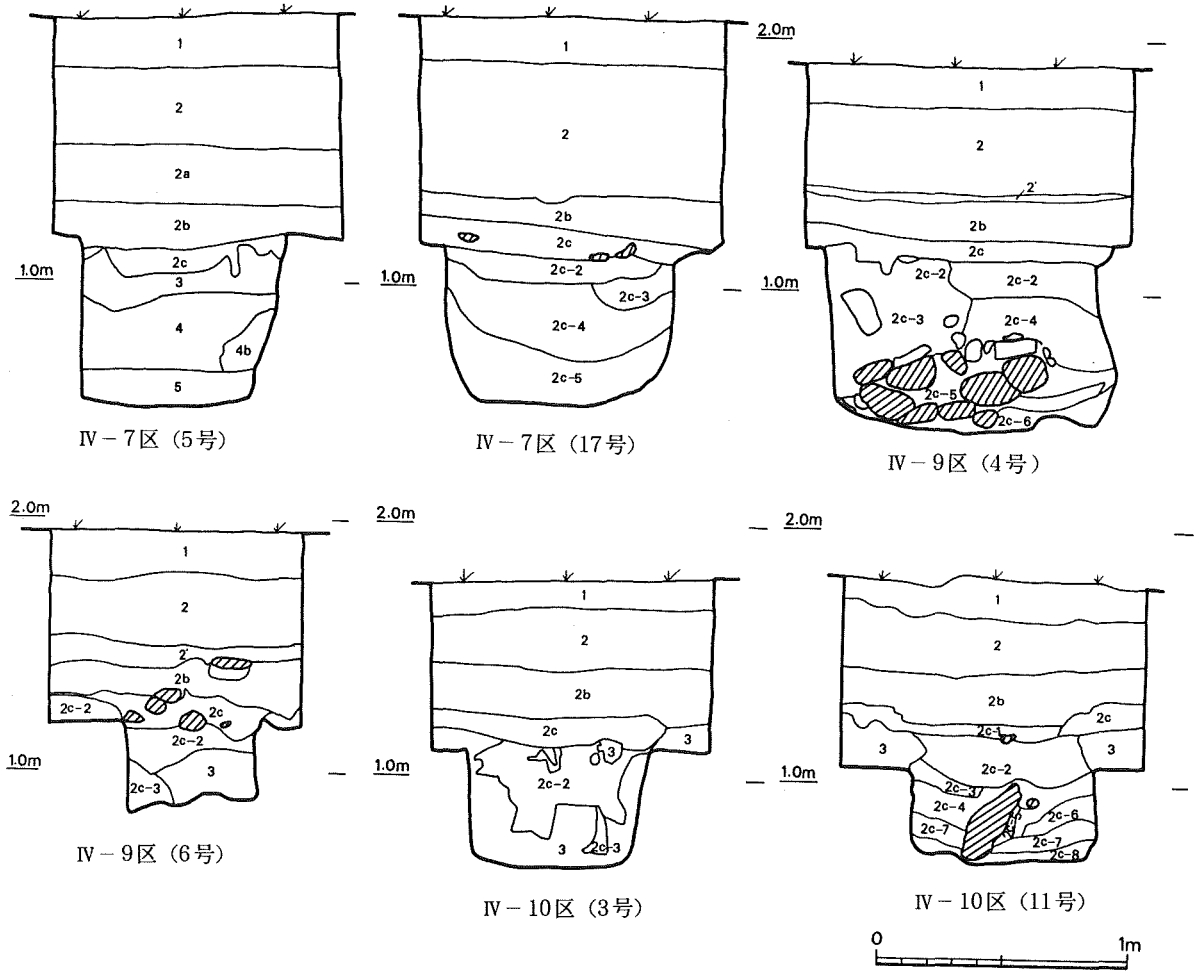
第18図　Ⅳ－10区ドングリ貯蔵穴⑨



第19図　Ⅳ－11区ドングリ貯蔵穴⑩

ドングリ貯蔵穴一覧表５

図番号	地区番号	特　　徴
17-3	Ⅳ－10区3号	西側壁面に木材１点が出土の外は，貯蔵穴を覆うための施設が認められない。上面の径が79cm，深さが45cm，底面径で87cmを測り，断面が袋状を呈する。
17-4	Ⅳ－10区4号	２基が切り合い関係で検出。底面での明確な掘り込みは差は認められない。上面の径は70cm，深さ53cm，底面径で49cmを測る。
17-5	Ⅳ－10区5号	貯蔵穴の南側上面淵に木片と東側に礫２点を認める。上面の径は，114cmで深さが55cm，底面径が78cmを測る。
17-6	Ⅳ－10区6号	貯蔵穴の蓋材が上面に残る。上面の径は，93×92cmのほぼ円形のプランを呈する。深さ44cm，底面径が78cmを測る。
17-7	Ⅳ－10区7号	楕円形のプランをなす貯蔵穴で西側と北東側にステップを設けている。上面の径で115×99cm，深さが79cm，底面径で81cmを測る。
17-8	Ⅳ－10区8号	貯蔵穴内に４点木片が出土する。上面の径は，74×68cm，深さが46cm，底面径で102cmを測り，断面が袋状をなす。
17-9	Ⅳ－10区9号	貯蔵穴内に落ち込んだ木材に焼け焦げたあとが残る。内部からは，礫の出土はない。上面の径が81×87cm，深さが61cm，底面径は62cm。
17-10	Ⅳ－10区10号	貯蔵穴の蓋材が放射状に広がり内部に落ち込んでいる。上面の径が82×91cm，深さは，58cm，底面径で58cmを測る。断面はU字形である。
18-11	Ⅳ－10区11号	木材と礫が貯蔵穴内に落ち込み，断面U字形をなす。上面の径が82cm，深さ35cm，底面径が77cmを測る。
18-12	Ⅳ－10区12号	二股の枝材と20cm程の礫が２点貯蔵穴内部に落ち込んでいる。上面の径で89×92cm，深さ62cm，底面径が105cmを測り，断面は袋状を呈する。



第20図　ドングリ貯蔵穴土層図

ドングリ貯蔵穴一覧表６

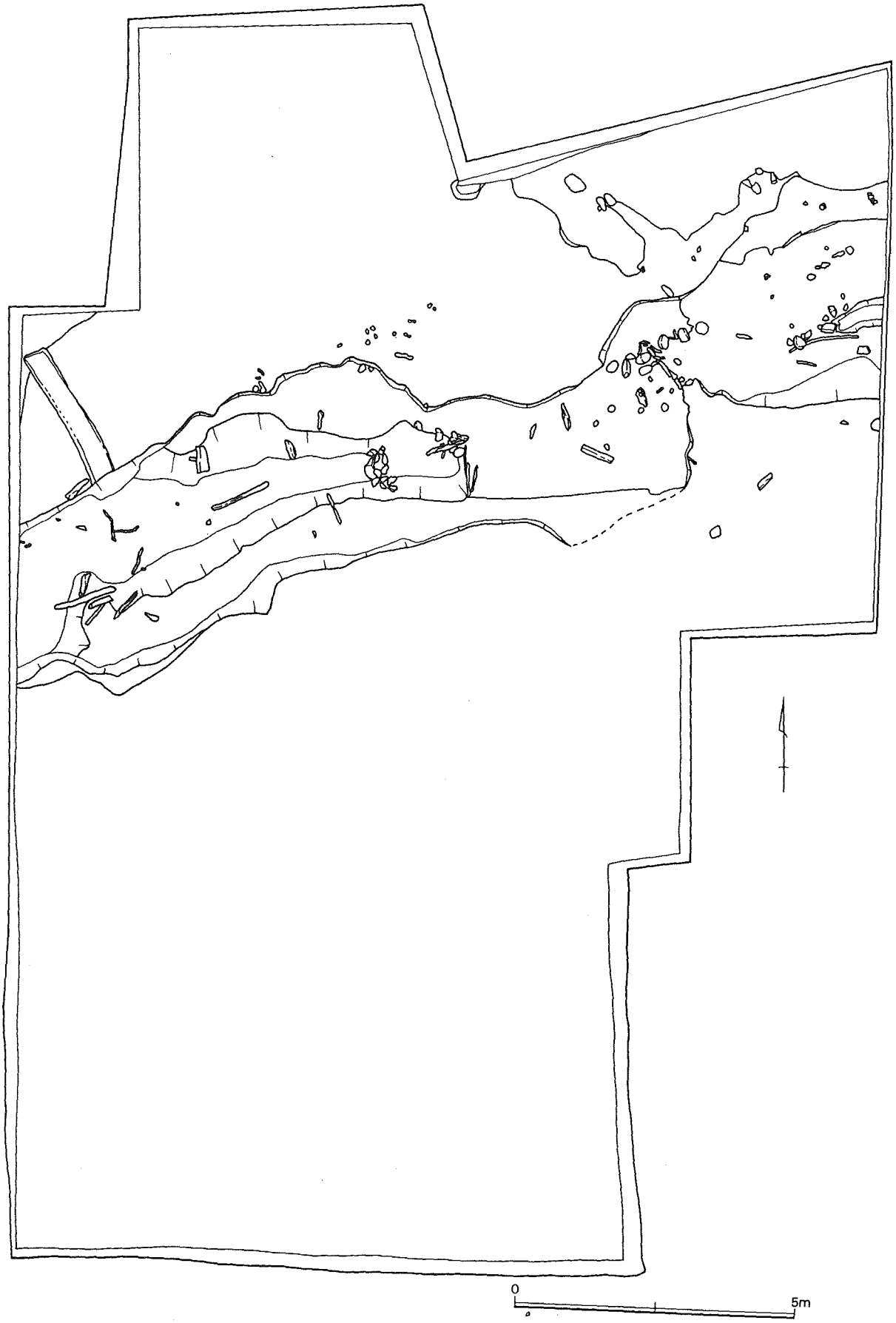
図番号	地区番号	特　　徴
19-1	Ⅳ－11区1号	貯蔵穴上面は，蓋材が覆い以下は礫が落ち込む。上面の径は，116×118cm，深さ52cm，底面径で99cmを測る。断面U字形をなす。

図番号	地区番号	特　　徴
19-2	Ⅳ－11区2号	調査区内で，確認した貯蔵穴で最も最小である。小枝が上面に散乱し，北側に円礫が立った状態にある。上面の径は，56×55cm，深さ38cm，底面径で54cmを測る。断面U字形を呈する。

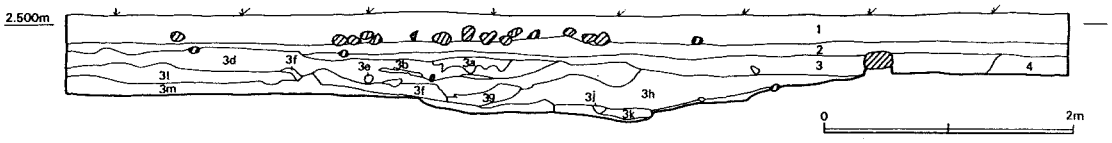
Ⅴ－２区

自然流路；調査区の北側で河川跡を検出した。川幅は，最大３５０ｃｍ，最小２００ｃｍで調査区外の東西方向へ延びている。川底内からは，弥生時代後期の甕形土器の口縁部及び台付甕の底部等が４２点出土し，石器は，大型の砥石の外に剥片石器３点が出土している。また，木製品は６１点あり，この内器種の判明する資料ではヤス・横槌・杭・板材等がある。

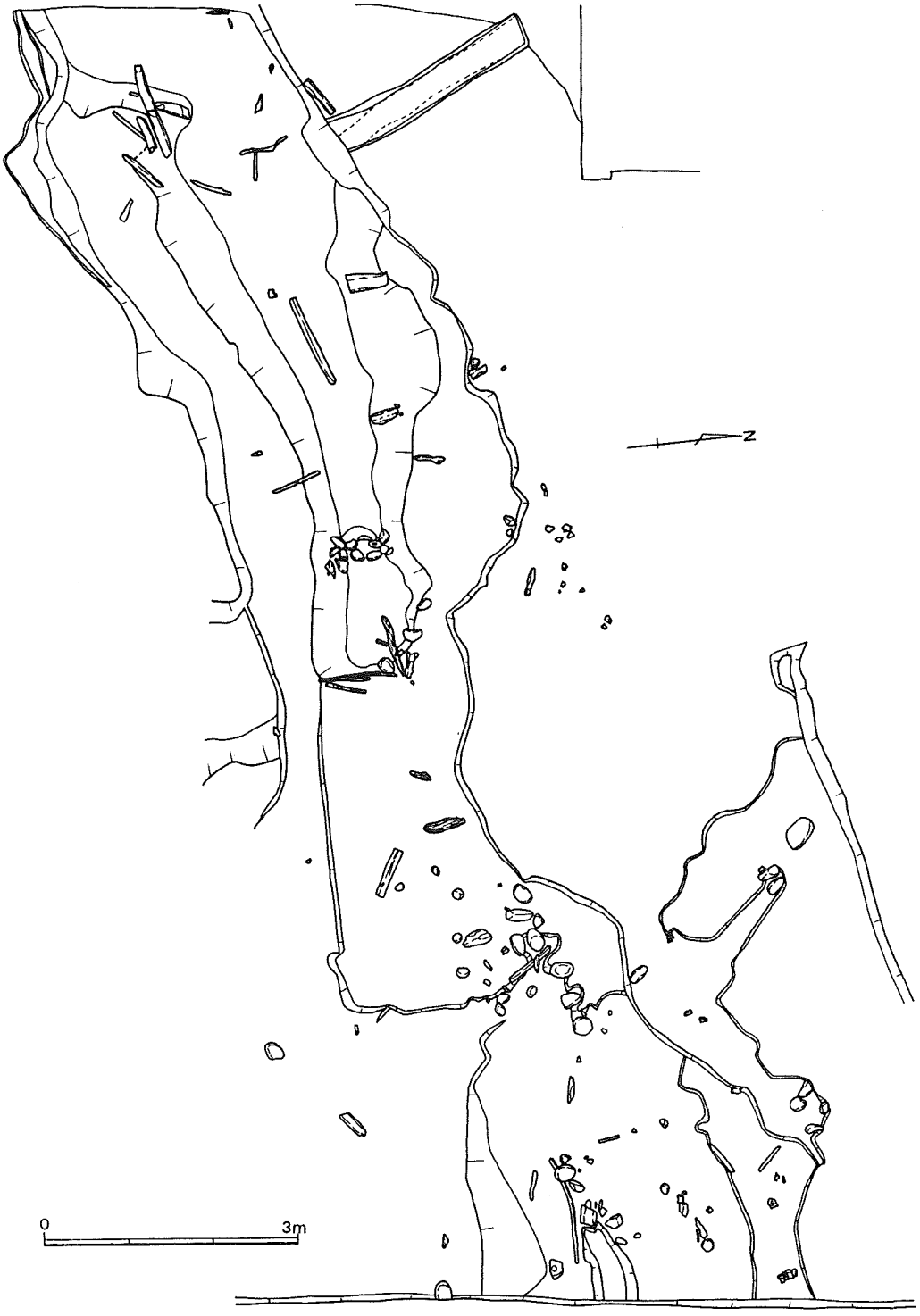
河川跡の北西隅に幅５０ｃｍ，長さ２５０ｃｍの礫が帯状に延びた部分について水田の畔ではないかとの指摘で精査を行うが１０ｃｍ程掘り下げると全面が礫層となり現状では畔としては，否定的であった。



第21図　Ⅴ－２区調査区



第22図　Ⅴ－２区東壁土層図



第23図　Ⅴ－２区遺物出土状況

4　遺物

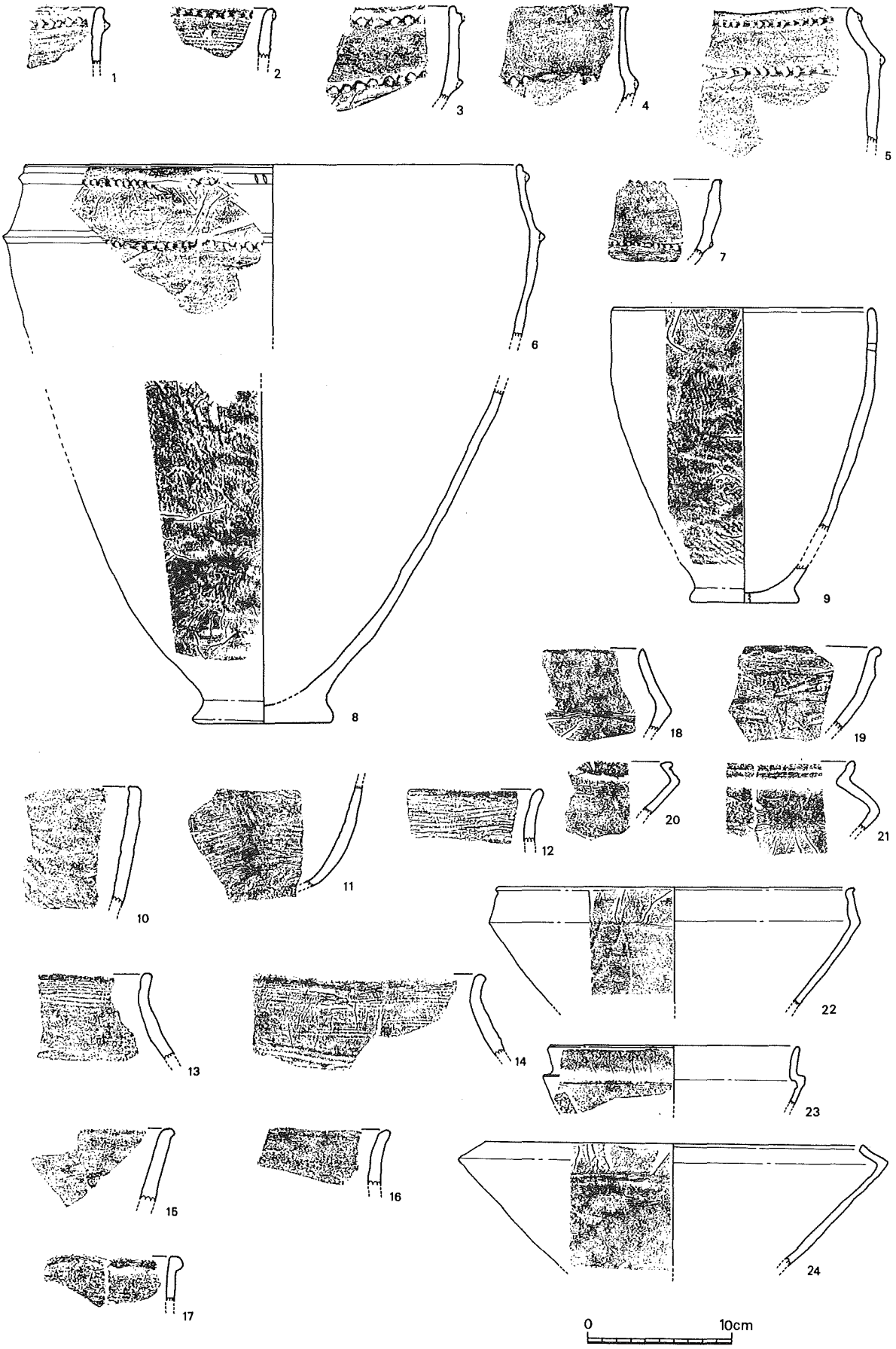
Ⅳ区は，１～２層が，上面に近世陶磁器，土師器，須恵器，弥生式土器，縄文式土器等と石器の出土があった。近世から古代の遺物は多少出土があったものの量的には，縄文時代晩期の遺物が２／３以上出土している。

２～２’層に奈良時代・弥生時代の土器等が出土した。２ｂ～２ｃ層は縄文時代晩期の遺物が出土した。２ｂ層から検出した住居跡からは，縄文時代晩期後葉の土器１６１点，石器６点が出土している。２ｃ～３層上面にかけての遺物は，縄文時代晩期中葉の浅鉢，壺型土器，打製石斧，磨製石斧，石鏃等が出土している。また，Ⅳ－９区５号貯蔵穴より木製容器とⅣ－７区２２号とⅣ－８区２号貯蔵穴より縄文時代晩期の土器が出土している。

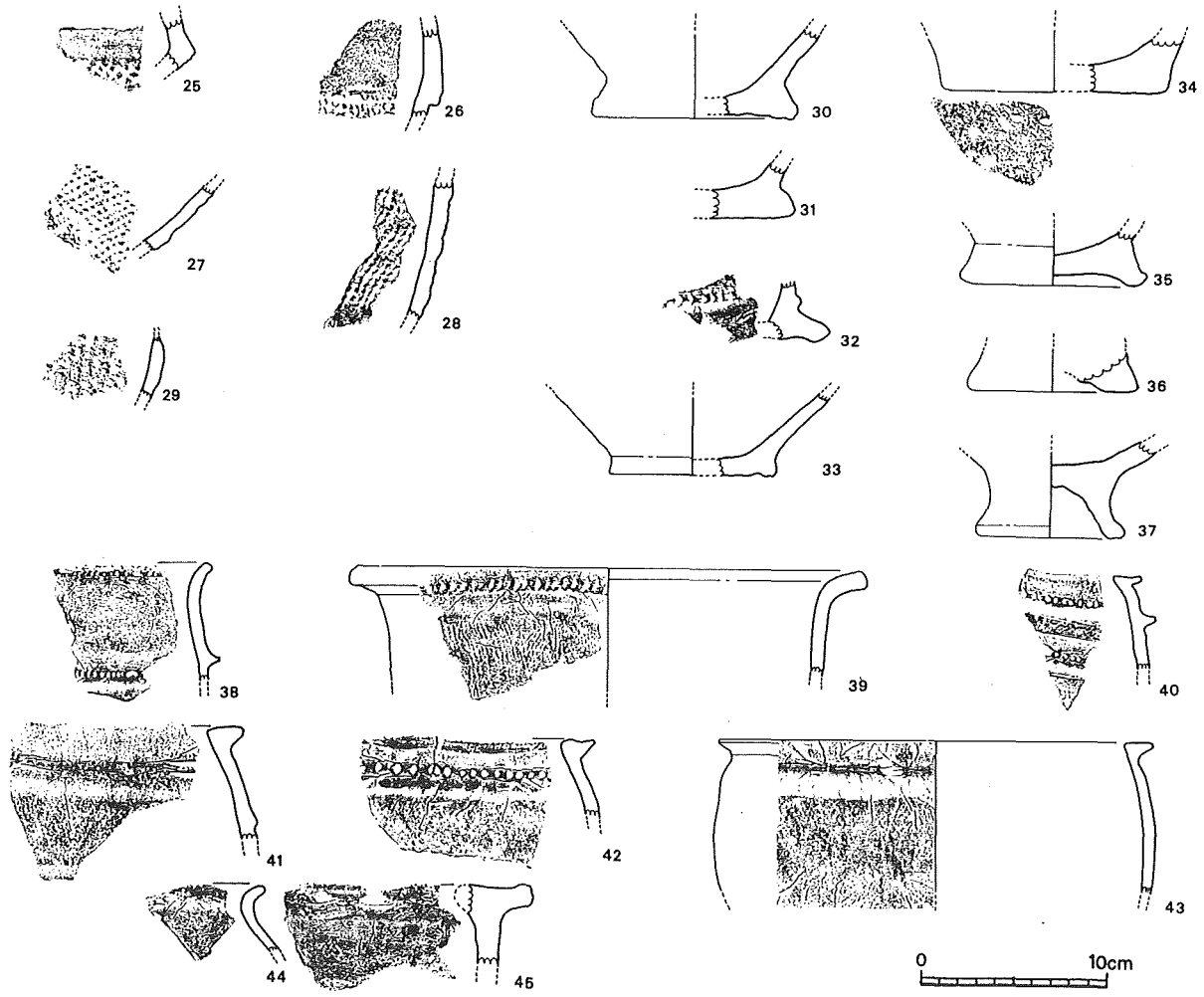
Ⅴ－２区は，弥生時代後期の甕形土器，砥石等が約３００点と木製のヤス，横槌，不明木製品等が６１点出土している。

Ⅳ区２層出土土器一覧表１

図番号	出土地区	特　色	備考
24-1	3KⅣ-10区 2層	器形は，直線的に上方に延びる。突帯文は口縁端部下８㎜に有し，刻目は右から左へ切り込みを入れている。器面の外面にナデ，内面に条痕が残る。	
24-2	3KⅣ-5区 2層	口縁端部に３～５㎜程度の刻目の切り込みを行っている。器形は，口縁部でやや外反気味とし端部は丸みを持つ。	
24-3	3KⅣ-10区 2層	内湾気味に立ち上がる器形をなす。口縁端部から６㎜下と5.2㎜下に丸みを持った刻目突帯文を付す。器面の内外面は条痕をナデ消している。	
24-4	3KⅣ-9区 2層	外反気味に直立する口縁部の器形をなす。頸部で屈曲する。頸部の屈曲部分に４㎜幅の刻目を付す。内面は，ヘラ状工具で器面を調整しており，条痕状の整形痕が残る。	
24-5	3KⅣ-5区 2層	頸部で内側へ屈曲する。刻目突帯は，口縁端部から６㎜下と46㎜下に二条をもうけている。突帯の切り込みは，右側から斜めに入れている。器面調整はヘラ状工具で整形し，ナデ消している。	2点接合
24-6	3KⅣ-5区 2層	刻目は，口縁端部から７㎜下と55㎜下に付している。切り込みは，左側から二条とも行い，切り込みの幅は最大４㎜最小３㎜である。器形は，胴部から頸部が内湾し頸部で屈曲して口縁部へ延びる。	9点接合
24-7	3KⅣ-9区 2層	刻目は，口縁端部と端部から46㎜に有する。切り込みは，２㎜～３㎜である。口縁端部を水平になし，器面はナデ整形を施している。弥生時代の所産であろう。	
24-8	3KⅣ-5区 2層	Ⅳ－５区に単独で埋設されていた土器である。頸部から上については，耕作による削平を受けて消失したものと思われる。器形は，底部端に張りがあり，外湾しながら立ち上がる。外面の器面調整は，条痕整形後に器面の凸凹をナデ調整している。内面は，条痕整形を外面よりさらに滑らかに調整する。焼成良好でよく焼き締まっている。色調は，内外面ともに明るい赤褐色を呈し，外面は煤の付着が認められる。	
24-9	3KⅣ-5区 2層	底部は，胴部片の近くに出土したもので，同一個体と考えられる資料である。底部径が7.4㎝端部に張りがある。胴部は外湾しながら立ち上がり頸部でやや屈曲して，口縁部が直上に延びる。口縁端部は，丸みを持つ。器面の調整は，内外面に条痕を残す。口縁下に外径８㎜，内径３㎜の補修孔有す。	
24-10	3KⅣ-9区 2層	外湾気味に立ち上がり，口縁端部を平坦にし内側を摘み出した作りとし器面調整は条痕とナデ整形を行なう。黒丸遺跡の土器の特色に結晶片岩を胎土に入れた土器が出土するが，その１点である。	2点接合
24-11	3KⅣ-6区 2層	器面調整は，内外面に条痕を残す。条痕の方向は，横と斜めから行っている。胴部下端に，爪状の押さえが残る。	
24-12	3KⅣ-10区 2層	外面に条痕文を内面は，ナデ整形をしている。口縁がやや外反し端部に丸みを持つ。	
24-13	3KⅣ-6区	口縁部が外反し，端部が丸みを持つ。外面は条痕整形，内面はナデ整形を行う。	
24-14	3KⅣ-6区 2層	口縁部で外反し，端部に丸みを持つ。外面は条痕を残し，内面はナデ整形を行う。器面にザラつきがある。	2点接合
24-15	3KⅣ-6区 2層	口縁部は，直線的に外反し，端部が丸みを持つ。条痕は見られないが，粘土紐の重ね部分は確認できる。内外ともに黒灰色を呈する。	
24-16	3KⅣ-5区 2層	口縁部がやや外反する。外面には，条痕がみとめられないが，内面に浅い条痕が残る。	
24-17	3KⅣ-5区 2層	口縁端部が丸みを持つ。胎土は，長石が含まれ，色調は明黄褐色を呈する。	2点接合 甕形
24-18	3KⅣ-5区 2層	肩部で屈曲し，直線的に内傾する浅鉢形の土器の口縁部である。口縁端部に丸みを持つ。外面は，磨きがかかるが内面はナデで終えている。	浅鉢形
24-19	3KⅣ-9区 2層	内外面を条痕調整している。器形は外湾する胴部から肩部で屈曲して立ち上がる。口縁端部は丸みを持つ。	浅鉢形
24-20	3KⅣ-6区 2層	直線的な胴部で肩部へ移行し，肩部から屈曲させて短い頸部からさらに粘土紐を重ねて口縁部を形成する。胎土は，粗く２～３㎜角の長石が多く混じる。晩期の終末期の様相を持った浅鉢形土器である。	浅鉢形
24-21	3KⅣ-6区 2層・2’層	丸みを帯びた胴部から肩部で屈曲し，口縁部へかけて内湾する。頸部から外湾して口縁部を形成する。口縁端部は膨らみを持って丸く納める。施文は外面の口縁部に幅２㎜程度の沈線を１本巡らしている。器面の調整は，全体に磨きをかけていたと思われるが，風化のため部分的に見られ，多くは器面がザラつく。	2点接合 浅鉢形
24-22	3KⅣ-9区 2層	器形は，胴部が直線的に外反し，肩部で屈曲させる。肩部から頸部にかけては，内傾し口縁部でやや外反する。口縁端部は，外側へ摘み出しによって形成される。器面は，内外面を潰し調整している。	4点接合 浅鉢形
24-23	3KⅣ-9区 2層	直線的な胴部から，肩部で水平に屈曲し，頸部から口縁部へ直線的に立ち上がる。口縁端部に丸みをもち器面は，潰し調整。	2点接合 浅鉢形
24-24	3KⅣ-9区 2層	器形は，直線的な胴部から肩部へ移行し，肩部で屈曲して口縁部を形成する。口縁端部は断面四角形となる。器面の調整は内外面を潰しによる磨きで整形する。色調は，外面が赤褐色，内面は，黒色を呈する。	2点接合 浅鉢形
25-25	3KⅣ-5区 2層	組織痕土器の肩部で，屈曲する部分に菱形の施文（４㎜）を有する。胎土やや粗いがよく焼き締まる。明確に認められないが内面に浅い条痕が残る。	網目状圧痕
25-26	3KⅣ-9区 2層	胴部に文様の施文があり，肩部の屈曲で器内が厚みをます。色調は内外面ともに黒色を呈する。器面は，ナデ整形を行う。	籠目状圧痕
25-27	3KⅣ-6区 2層	25より施文幅が狭い（３㎜）菱形を呈する。内面ナデ整形で色調は，黄灰色を内外面呈する。	網目状圧痕
25-28	3KⅣ-5区 2層	結接部が丸みをもつため押圧部分が円形に並ぶ。上部は，肩部の屈曲部となり施文がない。	網目状圧痕 2点接合
25-29	3KⅣ-5区 2層	１㎜間隔の横糸を５㎜間隔の縦糸で編み込んでいる。色調は，内外面ともに黒色を呈する。	蓆目状圧痕
25-30	3KⅣ-6区 2層	底径10.4㎝，外底部の中央がやや凹む。底部が張り胴部へ移行する。胴部に条痕調整の痕跡有り。色調は，黄色を呈している。	
25-31	3KⅣ-6区 2層	結晶片岩を胎土に混入し焼成している。底部に，厚みを持ち端部が広がり張っている。色調は，外面が赤みを持ち，内面は茶褐色を呈する。	



第24図　2層出土縄文時代の土器①

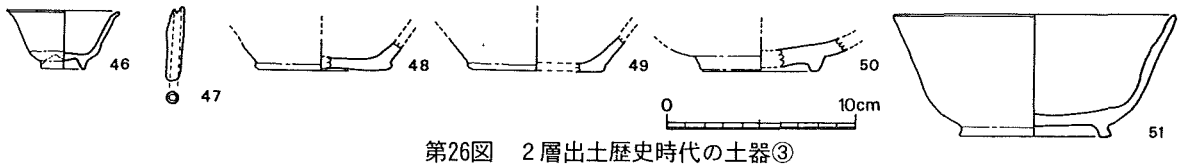


第25図　２層出土縄文～弥生時代の土器②

Ⅳ区２・２′層出土土器一覧表２

図番号	出土地区	特　　色	備考
25-32	3KⅣ-6区 2層	底部と胴部の境に刻目突帯文を貼り付ける。刻目の切り込み間隔３㎜，胎土に１㎜程の長石を多く混入する。底端部から中央へ向かって８㎜で凹む。色調は，赤褐色を呈する。	
25-33	3KⅣ-10区 2層	結晶片岩（３㎜）を胎土に混入している。底端部の張りが30ほど見られない。色調は，赤褐色を呈する。	
25-34	3KⅣ-5区 2層	籾の圧痕が底部に２点残る。胎土は粗く３㎜角の長石が混入する。淡黄色の色調を呈し，底端部の張りがなく胴部へ移行する。	籾の圧痕
25-35	3KⅣ-5区 2層	外底部が，上げ底になる。外底端部から1.1㎝までを接地面にし，高台状に底部を形成する。色調は，赤褐色を呈する。	
25-36	3KⅣ-6区 2層・2′層	35と同様の高台状の底部を形成し，上げ底をなす。	2点接合
25-37	3KⅣ-9区 2層	高台状に底部を形成（８㎜）し，接地面から３㎝凹む。色調は，赤褐色を呈し，胴部に条痕の整形痕を有する。	
25-38	3KⅣ-6区 2層	口縁端部と端部下に５㎝の刻目を有する。器形は，口縁が内傾気味に移行し，端部で外反する。色調は，灰白色を呈する。	
25-39	3KⅣ-5区 2層	口縁端部の直下に刻目を付す。刻目は，右側からヘラ状工具で幅３㎜の切り込みを入れる。胴部は，ハケ目調整を行う。口縁部で外反する。	
25-40	3KⅣ-6区 2層	口縁端部と2.4㎝下に刻目を付している。口縁部は，粘土紐を一周巡らして形成する。色調は，暗黒茶色を外面呈する。	
25-41	3KⅣ-6区 2層	断面三角形の口縁端部に刻目と５㎝下に刻目を付す。器形は内湾しつつ口縁部へ移行する。	
25-42	3KⅣ-7区 2層	土器形成後に，口縁部に一周巡らす粘土紐を貼り付けて端部に刻目を付す。刻目は左右から切り込みを幅４㎜で行う。	
25-43	3KⅣ-5区 2層	断面三角形の口縁部を有し，平坦な口縁端部をなしている。胴部にわずかにハケ目整形を確認できる。	6点接合

図番号	出土地区	特　　色	備考
25-44	3KⅣ-7区 2層	壺形土器口縁部。器形は，内傾しつつ口縁部へ延び口縁から外反する。	
25-45	3KⅣ-5区 2層	口縁部が厚く，中央部がやや凹むものの平坦な口縁部である。淡黄色を呈する。	弥生中期
26-46	3KⅣ-5区 2層	高台内に砂積み跡があり，釉薬は高台内のみに掛からないが鈍く白い釉薬を内外にかける。	猪口 17世紀中
26-47	3KⅣ-5区 2層	土錘。長軸3.8㎝，径が６㎜を測る。色調は，明黄色。	
26-48	3KⅣ-8区 2層攪乱	ヘラ切り整形の土師器皿。底部から丸みを持って立ち上がる。淡白色を呈する。	
26-49	3KⅣ-8区 2層攪乱	ヘラ切り整形の土師器皿。48よりやや直線的に立ち上がる。淡白色を呈する。	
26-50	3KⅣ-5区 2層	内面を黒色にした黒色土器Ａ類である。高台は，貼り付けの高台としている。	
26-51	3KⅣ-6区 2層・土壙1・8区2層攪乱	器高6.5㎝，口径14.9㎝。高台径８㎝を測る。口径に比較して高台径が約１／２程度である。高台は，接地面がハの字形をなし，高台から胴部下位で屈曲し立ち上がり，外方へ口縁部が延びる。口縁端部は，丸く納める。	5点接点
27-1	3KⅣ-7区 2′層	口縁部下５㎜と3.2㎜に突帯文を貼り付ける。器形は，直線的に外方へ延び肩部で屈曲し，内傾して口縁部へ移行する。口縁部直上を平坦になす。突帯の刻目は，５㎜間隔で作出している。器面の内外面ともにザラつき輪積の跡がある。	
27-2	3KⅣ-9区 2′層	器形は，直線的に外反し，口縁端部から59㎜下に突帯を付す。刻目の施文カ所で欠損する。器面の調整は，ナデによる整形で内外面ともにザラつく。	

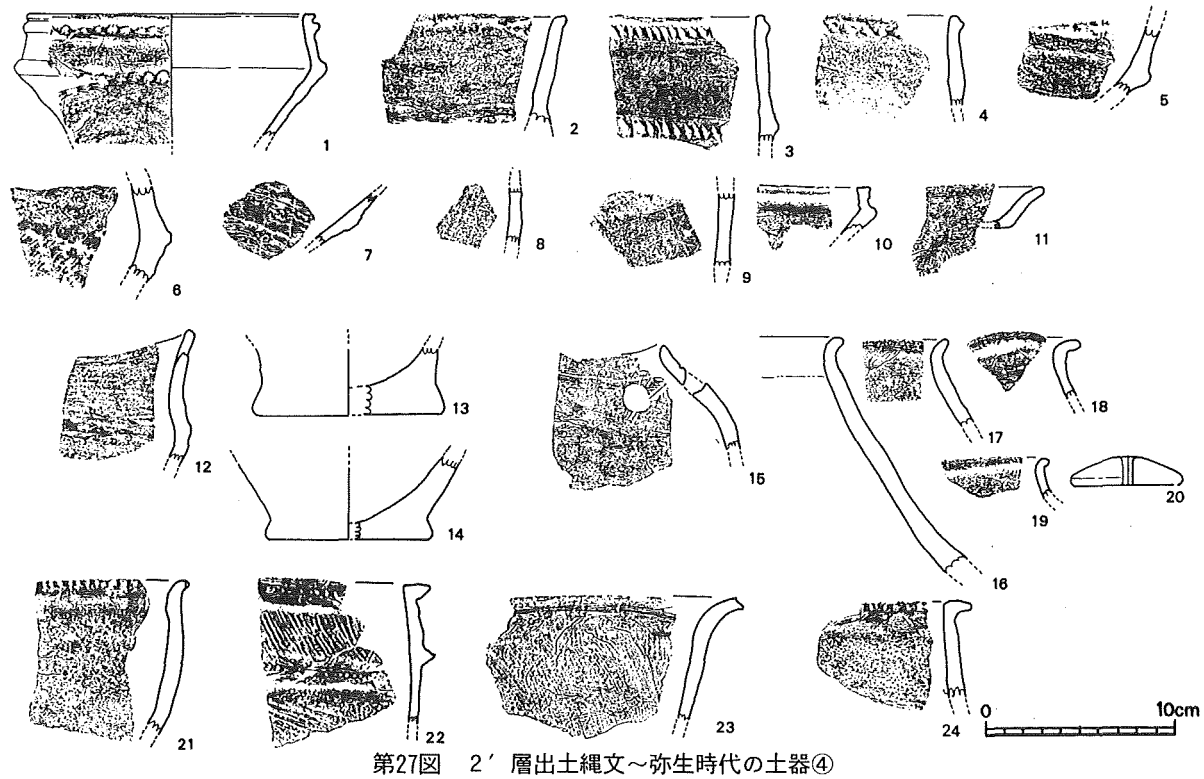


第26図　２層出土歴史時代の土器③

Ⅳ区２'・２ｂ層出土土器一覧表３

図番号	出土地区	特色	備考
27-3	3KⅣ-6区 2'層	口縁端部から２㎜下と5.8㎜に突帯文を付す。刻目の幅は２㎜間隔で切り込みを上下ともに行っている。器形は，口縁部がやや内傾ぎみである。胎土は緻密な粘土を用いて器面にザラつきがない。器面の整形は，外面が条痕をナデ消す。内面は指による押さえナデを行い色調は，暗茶色を呈する。	
27-4	3KⅣ-10区 2'層	口縁端部から２㎜下に突帯文を有する。切り込みは，２㎜間隔で行っている。胎土に３㎜程度の長石が多く含まれる。外面に粗い条痕が残る。内面は，指ナデによる整形。器形は，内傾ぎみに立ち上がり端部で直立する。	
27-5	3KⅣ-6区 2'層	組織痕土器の胴部片。屈曲部を境に上部を席目，下部を網目で施文する。	席目圧痕 網目圧痕
27-6	3KⅣ-8区 2'層	１cm間隔で，押圧部にへこみが左から右側へ斜行する。これに反し，１㎜の細い凹みのラインが右から左側へ斜行している。屈曲部上位は，黒色で下部は，黄灰色を呈する。	席目圧痕
27-7	3KⅣ-6区 2'層	組織痕土器。１㎜間隔のラインが左右に波を打つ胴部片。	席目圧痕
27-8	3KⅣ-6区 2'層	１㎜にも満たない網目が菱形状に押圧されている。内面は，黄茶色，外面は，黒色を呈する。	網目圧痕
27-9	3KⅣ-6区 2'層	細い線刻のある土器。	
27-10	3KⅣ-6区 2'層	浅鉢形の土器。肩部で屈曲して口縁が垂直に立ち上がる。口唇部は，平坦となす。胎土に２～３㎜の長石を含むが焼成堅牢。	
27-11	3KⅣ-6区 2'層	鉢形土器のミニチュア製品。一見土師器の皿様であるが，内外面ともに灰茶色を呈しザラつく。底部は，平坦となし胴部は外方へ延び口縁部でさらに外反する。	
27-12	3KⅣ-6区 2'層	口縁部に山形の粘土貼り付け突起が想定される土器片。器形は肩部で屈曲して口縁部が外湾する形状をなす。器面に条痕整形を施す。	
27-13	3KⅣ-6区 2'層	底部を平坦にした貼り付け円盤底である。端部の張りはさほどない。	
27-14	3KⅣ-6区 2'層	底部は，円盤貼付をなす。13ほどの厚みを持たない。	2点接合
27-15	3KⅣ-6区 2'層	無頸壺。口縁は，山形をなし，肩部に細い沈線を一本巡らす。沈線以下に，外径1.4cm，内径６㎜補修孔を穿っている。胎土は，緻密な粘土を使用し焼成堅牢である。	
27-16	3KⅣ-6区 2'層	外面全面に丹塗りを施し，内面は，口縁部下２cm程度まで丹の付着がある。器形は，長い頸部が直線的に内傾し，口縁部で外反する。	4点接合
27-17	3KⅣ-6区 2'層	口縁部で外反する壺形土器。赤色顔料の丹を使用しているようだが風化して明瞭でない。	
27-18	3KⅣ-6区 2'層	口縁部がやや垂下ぎみとなす壺形土器。胎土に３㎜程の長石が幾つか観察できる。	
27-19	3KⅣ-7区 2'層	口縁部が丸くなる壺形土器。器面がザラつく。	
27-20	3KⅣ-8区 2'層	円錐形をした蓋のミニチュア製品。中央部に５㎜の穿孔を有する。よく締まった焼きをし，下面は平坦にする。色調は，灰黄色と黒色が半々にある。	
27-21	3KⅣ-6区 2'層	如意形口縁の端部に刻目を付ける。外面は，黄茶色，内面灰茶色を呈する。	
27-22	3KⅣ-7区 2'層	器形は，内湾して口縁部へ延びる。口縁部は平坦とし，端部に刻目と下に3.8cmで刻目突帯文を貼り付けている。器面は粗いハケ整形を左から右へ斜行させている。内面は，口縁下に２cm程を細いハケの後にナデ消している。	2点接合
27-23	3KⅣ-8区 2'層	直線的に外方へ延びる胴部から口縁部で外反する。口唇部はナデによる整形で中央がやや凹む。器面は，ハケ目整形，内面はナデ整形としている。	
27-24	3KⅣ-6区 2'層	直線的に上方へ延び口縁部を直に外反させる。口縁端部に刻目を付ける。外面の風化進行のため整形状況不明。内面ナデ整形を行っている。	
28-1	3KⅣ-9区 2b層p360	肩部から屈曲し，口縁部へ内傾する器形をなす。口縁直下と端部より6.3cmにそれぞれ刻目突帯文を付す。切り込みの幅は上がヘラ状の工具で４㎜，下が爪状の丸みを持った切り込みを５㎜間隔で刻んでいる。器面の調整は，条痕の後に潰しを内外面行っている。色調は，外面が赤茶褐色，内面は淡黄色を呈する。	3点接合

図番号	出土地区	特色	備考
28-2	3KⅣ-10区 2b層p72	湾曲する胴部から肩部へ移行し，さらに口縁部へ内湾している。刻目は，口縁端部と端部下4.5cmに刻目を入れる。切り込み幅は５㎜。左右から切り込む。器面の調整は内外面ともに条痕整形を行うが，内面は，口縁下2.3cmをナデ仕上げしている。	2点接合
28-3	3KⅣ-7区 2b層p61	直線的に延びる胴部から肩部で屈曲し，口縁部へ内傾しつつ移行し，口縁部は直立する。刻目突帯文は，口縁部下と4.7cm下の肩部に付している。刻目の幅は，７㎜あり，丸みを持っている。器面は条痕をナデ消して整形する。	4点接合
28-4	3KⅣ-7区 2b層p54	内湾した口縁部を有し，口縁端部から３㎜下に刻目突帯を付している。刻目の幅は，５㎜。丸みを持った刻目である器面は，内外面ともにナデ調整を行っている。	2点接合
28-5	3KⅣ-7区 2b層p39	４と同様の資料で口縁端部４㎜に突帯文を有し，口縁から3.1cmに突帯文を付している。器形は肩部で屈曲し，口縁部は直線的に内傾する。口唇部は，平坦な作りをしている	
28-6	3KⅣ-8区 2b層	内湾ぎみに胴部から口縁部へ移行する。刻目は，口縁端部に１カ所施文している。切り込みの幅は４㎜，右斜めから行う。器面の整形は，外面は輪積の状態のまま内面は，条痕とナデによる調整を行っている。	
28-7	3KⅣ-8区 2b層p97	直線的な口縁部の端に刻目を施す。刻目の幅は，2.5㎜有る。切り込みは，浅く左右から行う。内面は，条痕，外面はナデ調整を行う。	
28-8	3KⅣ-7区 2b層p135	口縁下３㎜に刻目突帯を有する。切り込み幅は，４㎜で丸みを持つ切り込みである。直線的に口縁部へ延び施文部分でやや外反する器形である。	
28-9	3KⅣ-7区 2b層p270	口縁端部に刻目を有する。刻目幅は，３㎜の切り込みを右側から行う。器面整形は，外面が条痕，内面をナデ調整行う	
28-10	3KⅣ-9区 2b層p230	口縁下4.5㎜と4.6cmに刻目を付す。切り込みは１㎜以下で，外面ナデ，内面は口縁下2.8cmをナデ，以下を条痕調整している。	
28-11	3KⅣ-9区 2b層p195	口縁端部に刻目を有する。幅は２㎜の切り込みを入れる。器面の調整はナデ整形している。	
28-12	3KⅣ-10区 2b層	口縁端部に刻目を有する。幅２㎜の切り込みが連続して巡る。外面は潰しにより，滑らかだが内面は，条痕の後ナデ調整のため器面がザラつく。	
28-13	3KⅣ-8区 2b層p55	直線的にやや外反する器形をなす。刻目の幅は３㎜程度。口縁端部に粘土紐を貼り付け刻目の施文を施す。外面は淡黄褐色，内面は暗黄茶褐色を呈する。胎土に金雲母混入。	
28-14	3KⅣ-9区 2b層p160	比較的直線的に胴部から外方へ延び，口縁は，やや外反する。刻目は口縁端部と口縁下7.3cmに付す。切り込みは５～３㎜としている。器面の整形は，内外面ともに粗い条痕調整を行っている。	9点接合
28-15	3KⅣ-9区 2b層p379	口縁下４㎜に突帯文を施す。刻目の幅は３㎜，左右から切り込みを入れている。比較的緻密な粘土を使用し，器面の潰しを丁寧にしていて滑らかである。	
28-16	3KⅣ-8区 2b層	口縁下４㎜に刻目突帯文を有する。刻目の幅は２㎜，左から右へ斜行する切り込みを行う。口唇部がやや外反する。	
28-17	3KⅣ-9区 2b層p345	肩部で屈曲して，口縁部へ内傾ぎみに移行し，口縁部は極端に外反する。刻目は，口縁下２㎜と5.2㎜下の２カ所に有する。切り込みは上部の突帯が６㎜間隔，肩部の切り込み幅が６㎜で肩部突帯文が丸みを持つ。整形はナデ調整。	
28-18	3KⅣ-6区 2b層p6	刻目の大きさが均等になく，幅４～２㎜ある。肩部から胴部にかけての土器片である。	
28-19	3KⅣ-7区 2b層p1001	頸部で外湾し，口縁が内傾ぎみに立ち上がる。口縁部は，該化した沈線が５～６本途切れがちに巡らす。器面の調整はナデと潰しを行い滑らかである。	深鉢形
28-20	3KⅣ-9区 2b層p500	直線的な胴部から内湾して，口縁部に移行する。補修孔１カ所あり外径で８㎜，内径で３㎜，器壁が比較的薄く５㎜程度である。器面はナデ整形。	
28-21	3KⅣ-9区 2b層p167	胎土に結晶片岩粒を混ぜ焼成している。内湾して，口縁部に移行する形態である。口縁端部は丸みを持つ。器面は，外面が条痕，内面はナデ調整を行う。	

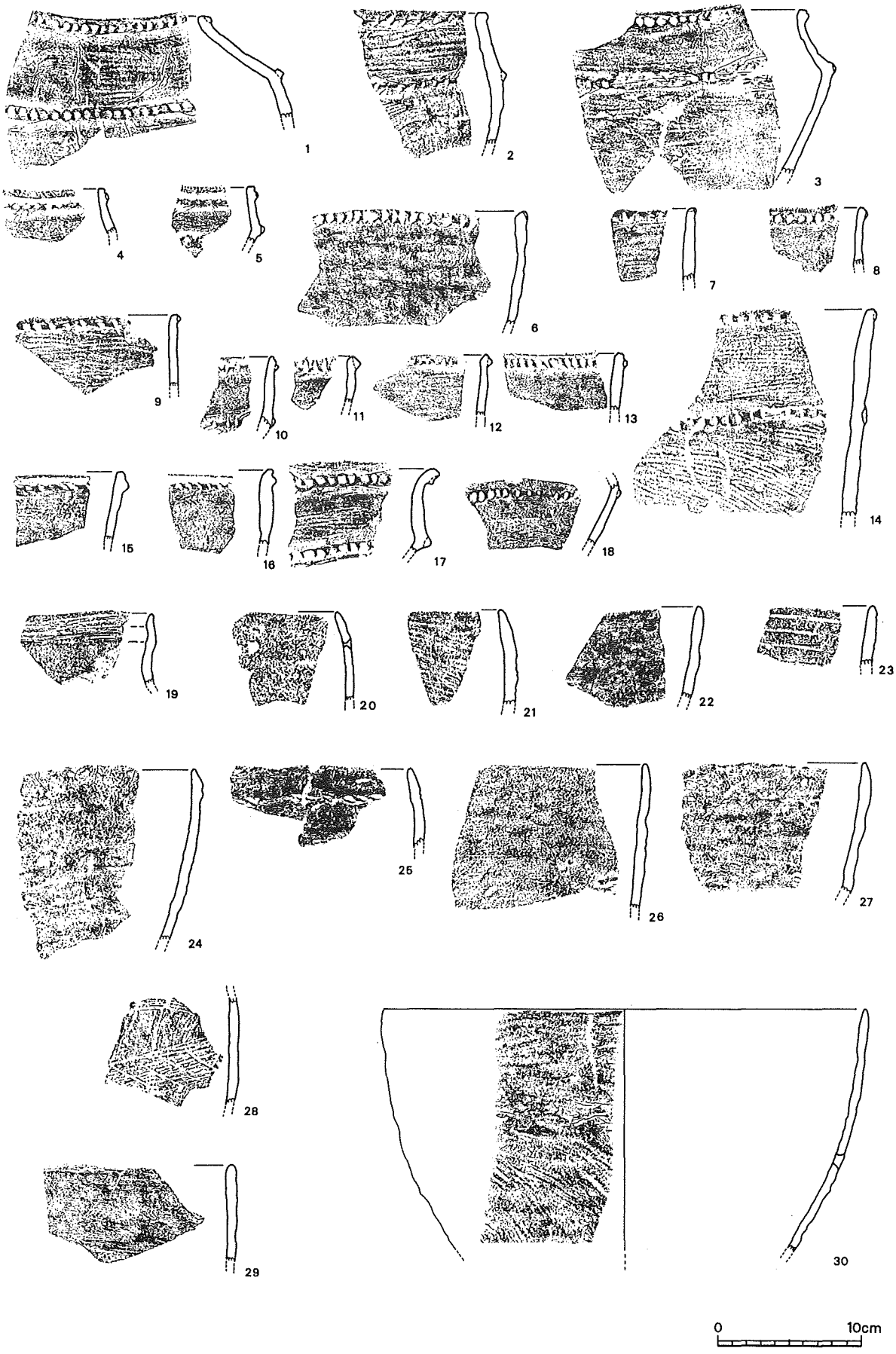


第27図　2′層出土縄文～弥生時代の土器④

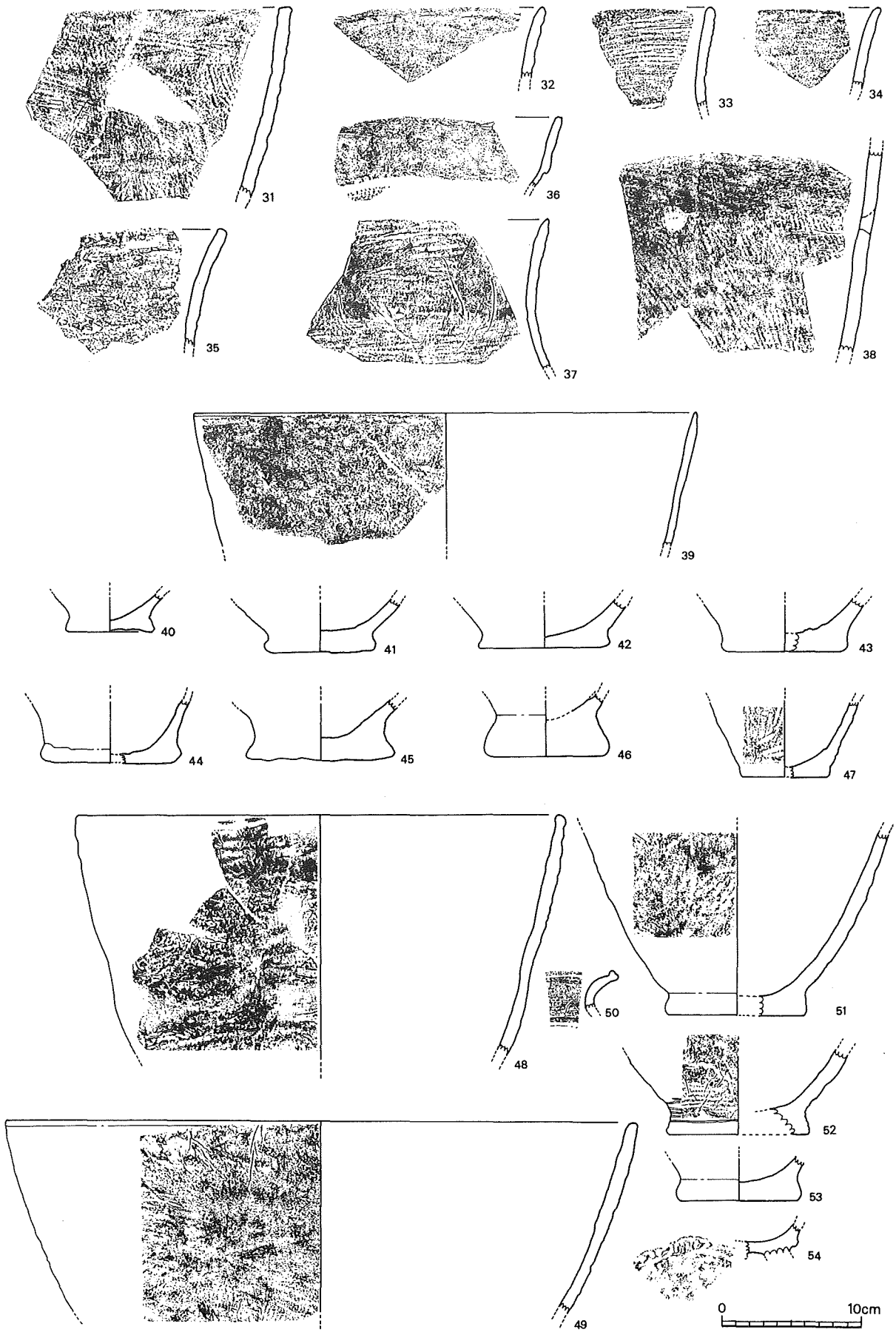
Ⅳ区26層・遺構出土土器一覧表４

図番号	出土地区	特　　色	備考
28-22	3KⅣ-10区 2b層p48	内湾しつつ口縁部へ移行する。粘土の重ね部分が残る。器面調整は内外面を潰しによって滑らかにしている。	
28-23	3KⅣ-10区 2b層p65	浅い沈線を口縁部に３本巡らす。口縁端部は丸く納める。内面の調整はナデ整形。	
28-24	3KⅣ-11区 2b層p6	胎土に結晶片岩を混入している。器形は，内湾しつつ口縁部へ移行する。器面は外面を粗い指ナデ整形，内面は潰しにより滑らかな調整を行っている。	2点接合
28-25	3KⅣ-11区 2b層	縄目を意識したような爪による連続列点状文を巡らす。器形は，内湾する口縁部となり，口縁端部は，尖りぎみに納める。	結晶片岩を混入
28-26	3KⅣ-6区 2b層p63	直線的な胴部からやや内湾ぎみの口縁部へ移行する。器面の調整は，指ナデと押さえで行ない，内面は潰し調整を行う。	
28-27	3KⅣ-11区 2b層p3	胎土に結晶片岩を混入。直線的な胴部からやや内湾ぎみに口縁部へ移行する。器形整形時の粘土紐の積み上げの繋ぎめを指によって押さえナデている。内面潰し調整。	
28-28	3KⅣ-9区 2b層p39	外面に斜行する沈線を引き，これに1.2cm間隔で分断する沈線を入れた文様を付している。内外面ともに，器面は潰しにより滑らかである。	
28-29	3KⅣ-6区2b層住p171	直線的に胴部から口縁部へ移行する。器面調整は条痕をナデ消しし，内面は潰し調整を行う。	
29-30	3KⅣ-7区 2b層p112	外反する胴部から補修孔部分より内湾ぎみに口縁部へ移行する。外面は条痕整形し内面はナデ調整を行う。目立つほどではないが結晶片岩を胎土に混入し焼成している。	8点接合
29-31	3KⅣ-9区 2b層p84	胴部から外方しつつ口縁部に向かって内傾ぎみとなる。口唇部は平坦となす。外面は斜行する条痕の上を横位の条痕でさらに器面調整を行う。内面は条痕とナデによる整形行う。	5点接合
29-32	3KⅣ-6区 2b層p85, 86	外面は，粘土帯の重ね部を指ナデによって粗く整形し，内面は潰しによる丁寧な調整を行っている。外反ぎみの口縁部である。	2点接合
29-33	3KⅣ-6区 2b層p44	外反ぎみの口縁部で外面に粗い条痕を施す。口縁端部は丸く納める。内面はナデ調整行う。	
29-34	3KⅣ-9区 2b層p139	外反する口縁部。外面は条痕をナデ消し，内面は潰し調整を行う。胎土に結晶片岩混入する。	
29-35	3KⅣ-9区 2b層p124	外反する口縁部。外面は指押さえとヘラ状工具による調整が認められる。内面は，潰しによる調整。口縁端部に膨らみを持つ。	
29-36	3KⅣ-8区 2b層	外反する口縁部である。屈曲部に組織痕が残る。器面調整は内外面に潰しによる調整を行う。	籠目条圧痕 2点接合
29-37	3KⅣ-9区 2b層p115, 108 116	屈曲部の肩部上位に沈線を巡らし，肩部から頸部へ内傾し，頸部から口縁部へ外反する。口唇部は丸く納める。外面は条痕調整し，内面はナデ整形を行う。胎土に結晶片岩を混入している。	4点接合

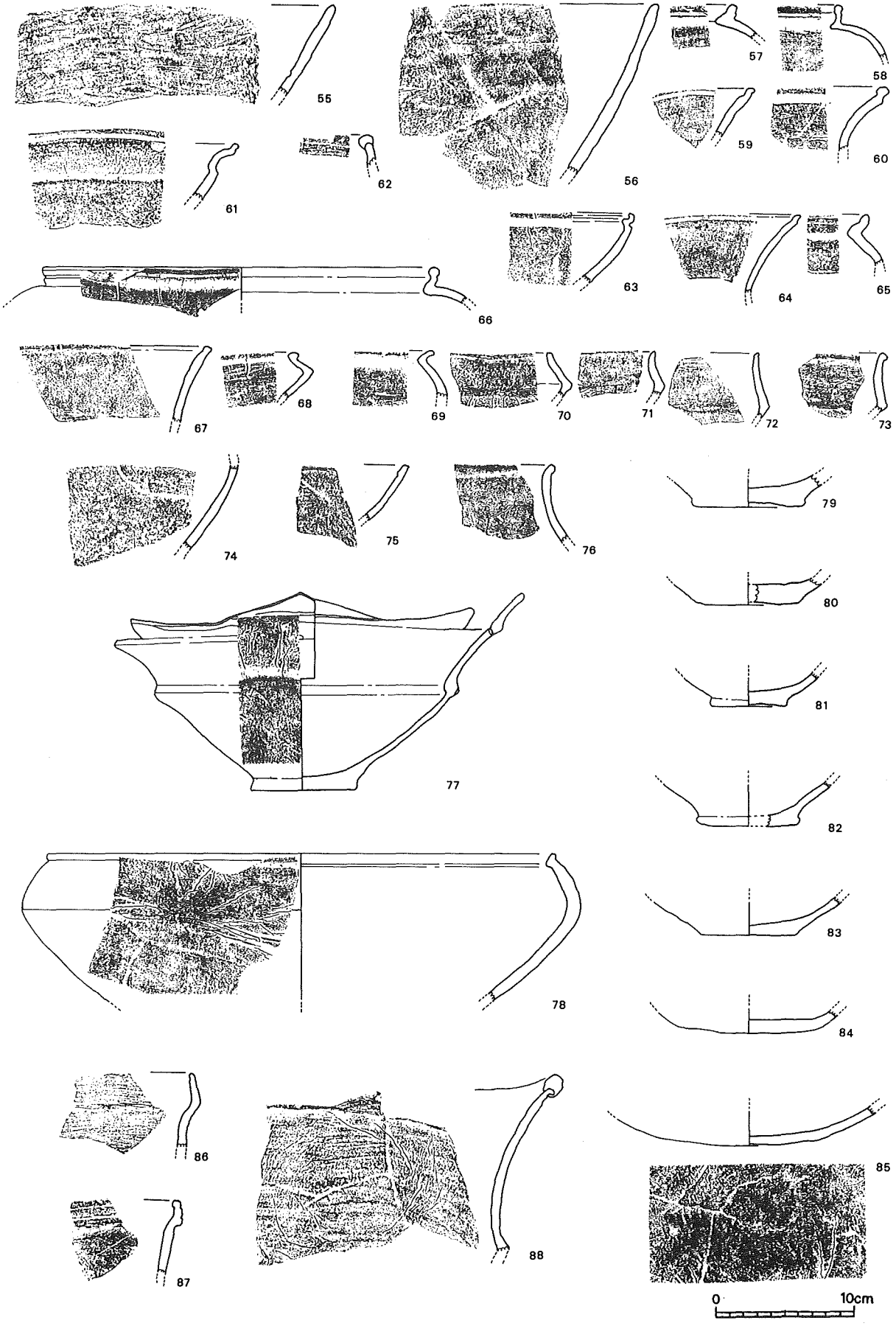
図番号	出土地区	特　　色	備考
29-38	3KⅣ-9区2b層p20, 50, 7, 6, 8, 238	外面は条痕を潰し，ナデ調整を行い。補修孔２個を有し，外径２cm，内傾８mmを測る。色調は，暗茶黒色を外面呈し，内面は暗黄灰色を呈する。	８点接合
29-39	3KⅣ-7区2b層p256, 245	胎土に結晶片岩混入。直線的に外反する器形をなす。口唇部に丸みを持つ。ナデ潰し調整を行う。	２点接合
29-40	3KⅣ-7区 2b層p285	外底面を潰しによって滑らかに整形。胎土は細かい粘土を使用し底端部がやや張り胴部へ移行。全面に潰し整形を行う。	底部
29-41	3KⅣ-11区 2b層p13	結晶片岩混入。外底面に大型の海獣骨を台に使用して製作しており，脊椎の形が残る。	２点接合
29-42	3KⅣ-11区 2b層p31	外底面を平坦となす。端部の張りはあまりなく胴部へ移行する。指押さえ調整の後ナデ整形する。	４点接合
29-43	3KⅣ-7区 2b層p335	凸凹のある外底面をなす。断面の厚みがさほどなく胴部へ移行する。器面全面にひびが入る。	
29-44	3KⅣ-9区2b層p14, 19, 53	底部の厚みは，中心部で７mmと非常に薄い作りをしている。底端部に丸みを持って胴部へ移行する。	３点接合
29-45	3KⅣ-7区 2b層p265	底部に凸凹がある。底端部から張りぎみに立ち上がり胴部へ移行する。指押さえによる外面整形で内面はナデ調整。	
29-46	3KⅣ-10区 2b層	厚みのある台形状の底部である。外底面及び外面は潰しとナデ調整を行っている。	２点接合
29-47	3KⅣ-10区 2b層p32	薄い断面の底部をなし，底端部から胴部へ直線的に外方へ延びる。胴部外面に条痕を残す。	
29-48	3KⅣ-6区2b層～2C住	１号住居跡から出土する。胴部は，内湾ぎみに上方へ延び，肩部でやや外湾しつつ口縁部へ移行する。口唇部は丸く納める。外面は粗い条痕整形とし，内面はナデ調整を行う。	１号住所跡
29-49	3KⅣ-6区2b層～2C住	外面は粗い条痕整形とし，内面はナデ調整を行う。胴部から外湾して口縁部へ移行する。	１号住居跡
29-50	3KⅣ-6区 2b層p141	口縁部が大きく外反し，口唇部は粘土帯を積み重ねた浅鉢形の土器としている。調整は，内外面ともに潰しによって器面調整を行っている。	１号住居跡
29-51	3KⅣ-6区2b層～2C住	48，49どちらかの底部と思われる。外面は粗い条痕整形とし，内面は粗いナデ整形としている。底端部が張らずに内湾する胴部へ移行する。	１号住居跡
29-52	3KⅣ-6区2b層p152, 160	底端部がやや張りぎみに内湾し胴部へ移行する。底部と胴部の境に条痕整形を行う。	１号住居跡
29-53	3KⅣ-5区 1号集石	外底面の中央部に凸凹があるが，器面は潰しにより滑らかである。外底端部に丸みを持って胴部へ移行する。	１号集石 ２点接合
29-54	3KⅣ-8区貯蔵穴-11号	底部と胴部の境に刻目突帯文を付す土器片。刻目の間隔は，５mm，右側から切り込みを入れる。色調は，暗茶褐色。	
30-55	3KⅣ-9区 2b層p59	直線的に外方へ延びる口縁部である。器面は，条痕を潰して滑らかにし，内面は条痕を粗くナデ調整する。	



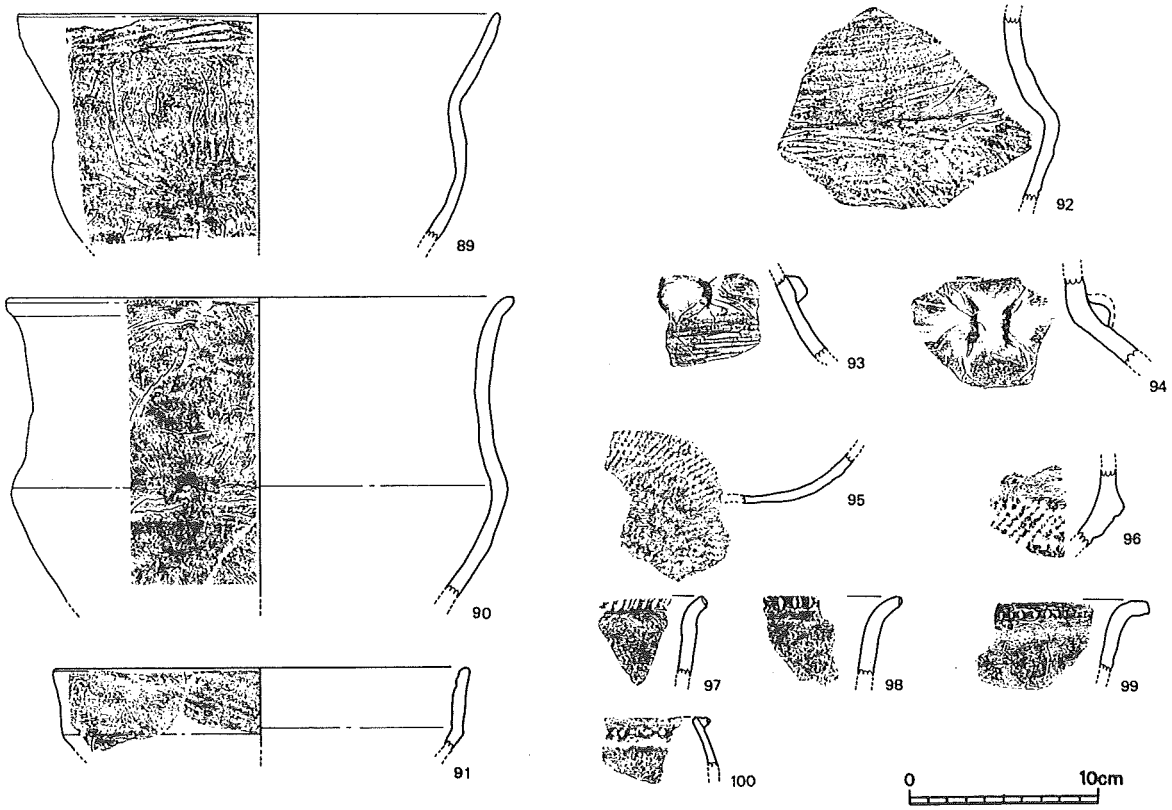
第28図　２ｂ層出土縄文時代の土器⑤



第29図　２ｂ層（31～47）・住居跡（48～52）・１号集石（53）・貯蔵穴（54）・出土土器⑥



第30図　２ｂ層出土縄文時代の土器⑦

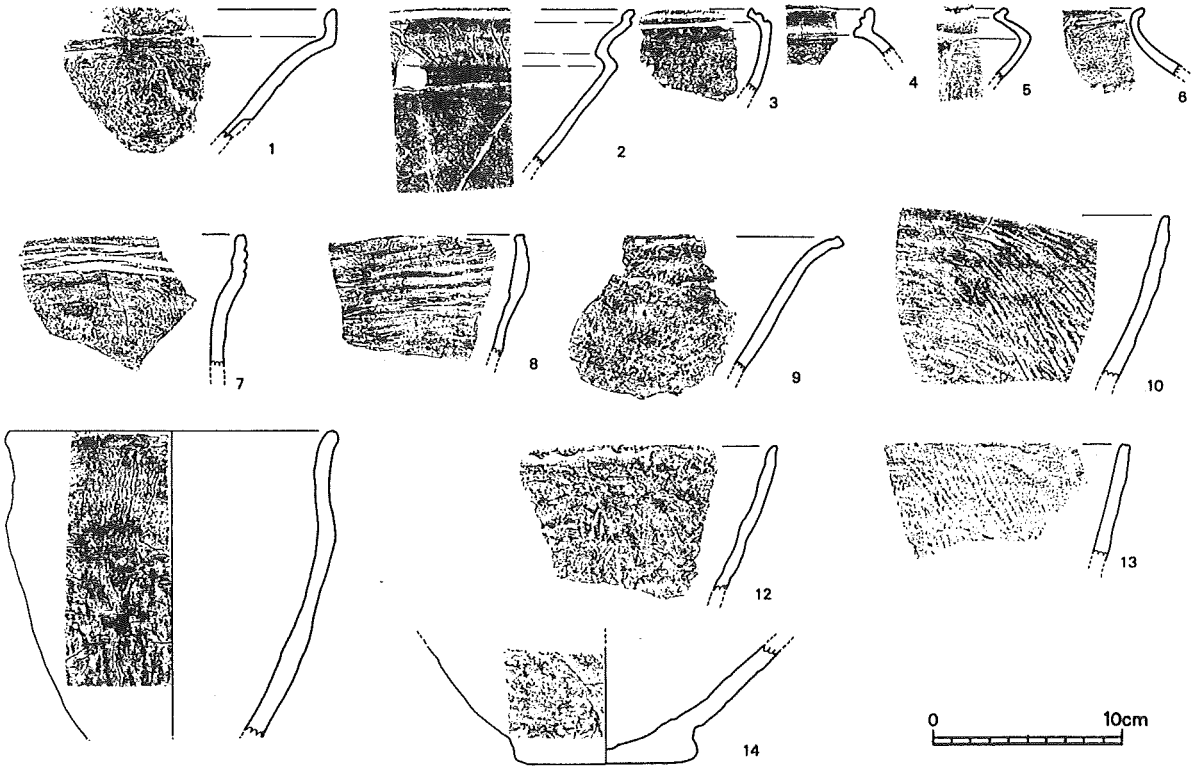


第31図　２ｂ層出土縄文～弥生時代の土器⑧

Ⅳ８区２ｂ層出土土器一覧表５

図番号	出土地区	特　　色	備考
30-56	3KIV-9区 2b層p441, 447	胴部から内湾ぎみに口縁部へ移行する。口唇部丸く納める。外面は，ヘラ状工具でナデ潰しを行う。内面はナデ調整。	
30-57	3KIV-10区 2b層p89	内湾した胴部に直立する口縁部を積み上げ浅鉢となす。口縁部に１条（幅２．５mm）の沈線を巡らす。内外の器面に磨きかかる。	
30-58	3KIV-8区 2b層p108	内湾した胴部が頸部へ移行し頸部から口縁部へ直に立ち上がる。口縁部の外面に１条（２．５mm）沈線と内面の頸部に１mm以下の沈線を巡らす。内外の器面に磨きかかる。	
30-59	3KIV-10区 2b層p17	外反し，口縁部へ移行する。口縁部外面に１条（３mm）の沈線を巡らした黒色研磨土器。	
30-60	3KIV-6区 2b層p118	肩部から頸部へ大きく外反し，口縁部は一段粘土紐を積み重ねて形成する。口縁端部は，丸く納めた研磨土器である。	3点接合
30-61	3KIV-9区 2b層p395, 396	内湾した胴部から肩で屈曲し，頸部へ移行する。口縁部はさらに屈曲して立ち上がる。口縁部の外面に１条（３mm）の沈線を巡らした黒色研磨土器。	浅鉢形
30-62	3KIV-6区 2b層p79	口唇部上にリボン条突起を付し，口縁下に１mmの細い沈線を巡らす。内外面ともにナデ調整を行う。	
30-63	3KIV-7区 2b層p345, 342	内湾した胴部から肩部で屈曲し，口縁部を形成する。口縁部内面に３mmの沈線を１条巡らす。器面は潰し整形で研磨は行っていない。	2点接合
30-64	3KIV-7･8区 2b層･p4	頸部が長く外反し，口縁部に丸みを持つ。口縁部の外面に３mmの沈線を１条巡らした黒色研磨土器である。	
30-65	3KIV-6区 2b層p66	内湾する胴部から屈曲し，外反する口縁部の器形をなす。口縁部外面に１mm以下の細い沈線を１条巡らす。外面は，磨きがかかるが内面は，ナデ調整である。	
30-66	3KIV-9区 2b層p54	内湾した胴部から屈曲し，口縁部へ移行する。口縁部に丸みを持ち外面に３mmの沈線を１条巡らす。内面は，潰しによる器面の調整を行う。	2点接合
30-67	3KIV-7区 2b層p43	頸部が長く外反し，口縁部へ移行する。口縁部内面に一条沈線を巡らす。緻密な粘土を使用し，器面は，潰し調整を行う。	
30-68	3KIV-10区 2b層p37	直線的な胴部から肩部で屈曲し，短く内傾して口縁部へ移行する。口縁端部は外へ摘み出すように形成。内外面を潰し調整で器面を終えている。	
30-69	3KIV-6区 2b層p87	内湾した胴部から外反して，口縁部を形成する。内外	

図番号	出土地区	特　　色	備考
30-70	3KIV-11区 2b層	屈曲した肩部から内反して口縁部へ移行する。口縁端部は丸く納める。内外面をナデ調整し器面ザラつく。	3点接合
30-71	3KIV-10区 2b層p18	肩部の屈曲があまりなく口縁部で外反する。内外面ともにナデ調整の器面としている。	
30-72	3KIV-7区 2b層p144	肩部から屈曲し，口縁部で外反する。内外面をあまい潰しで器面調整を終えている。	
30-73	3KIV-9区 2b層p295	肩部で屈曲し，口縁部で外反する。口縁端部がやや垂下ぎみとなる。内外面にあまい器面の潰しを行っている。	
30-74	3KIV-8区 2b層p28	内湾ぎみに移行する胴部片。色調は，外面が赤褐色，内面が暗黄赤色。内外面ともにあまい潰しの器面調整を行う。	2点接合
30-75	3KIV-7区 2b層	湾曲しつつ口縁部へ移行する。口縁部の内面に１cm程度の平坦な厚みを持たせている。器面は，内外面ともに潰し調整。	
30-76	3KIV-9区 2b層p297	壺形土器の口縁部。内傾する肩部から頸部で立ち上がり，口縁部は外反し，端部を丸く納める。内外面はあまい潰しの器調整としている。	
30-77	3KIV-6区 2b層p37	山形の口縁部を１カ所にもうけ両端を波状に造る。底部端部の張りはなく外湾した胴部から屈曲した肩部へ至。肩部は山形の口縁を中心とした部分の両脇に小さな突起を２カ所設け，肩部から屈曲し外反した頸部端に１カ所補修孔を穿つ。山形の口縁部の内外に１条の浅い沈線を有している。器面の調整は，外面ナデ，内面を潰しで整形している。	2点接合
30-78	3KIV-10区 2b層p81	直線的に外反し延びる胴部から肩部を内湾させ口縁部へ移行する。口唇部を平坦にし口縁端部は摘み出した形状をなす。外面は，潰しの整形とし内面は潰しによって磨きがかかる。内外面ともに黒色を呈する。	
30-79	3KIV-9区 2b層p430	鉢形土器の底部。外底面の凸凹がはげしい。底端部は，張りがなく胴部へ移行する。器面の外面は指押さえ，内面はナデ調整を行う。	
30-80	3KIV-10区 2b層	鉢形土器の底部。底端から胴部へ移行する。内外面ともに黒色を呈する。器面調整はあまい潰しを行う。	
30-81	3KIV-9区 2b層p134	鉢形土器。底部径が５．５cmで中央がややくぼむ。底端部の張りはあまりなく６mm程度で立ち上がり，内湾する胴部へ移行する。器面は内外ともにあまい潰し調整を行っている。	
30-82	3KIV-7区 2b層p332	結晶片岩の混入が胎土に認められる。底端部がやや張って胴部へ移行する。外面は粗い条痕，内面は条痕をナデ消し調整を施している。	

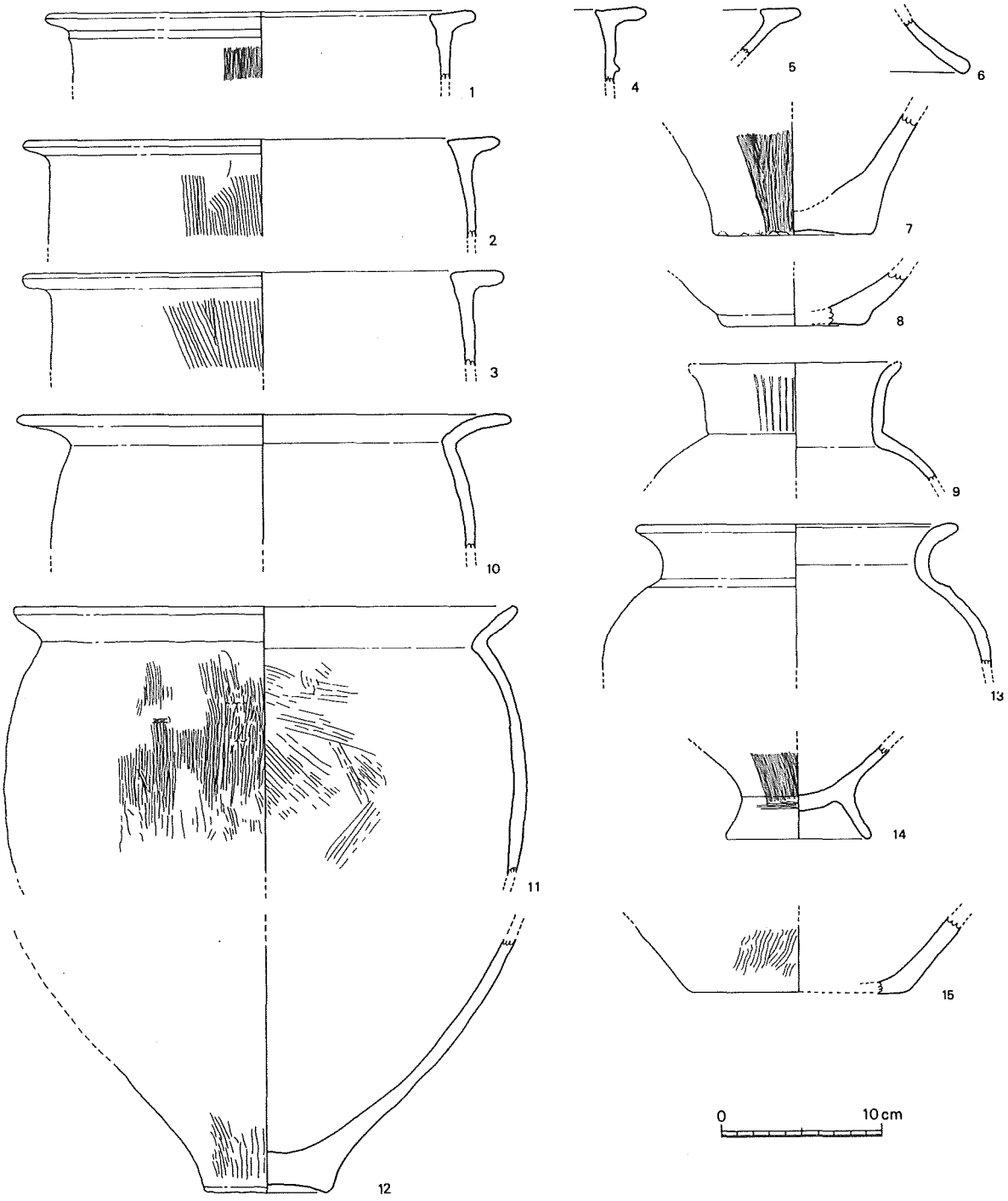


第32図　２ｃ層出土縄文時代の土器⑨

Ⅳ区２ｂ・２ｃ層出土土器一覧表６

図番号	出土地区	特　　色	備考
30-83	3KⅣ-10区 2b層	底端部からそのまま胴部へ移行する鉢形土器の底部。外底面の中央部がややくぼむ。器面の調整は内外ともに潰し調整を行う。色調は，黒色を呈する。	
30-84	3KⅣ-10区 2b層p79	平底に近い丸底である。器面はナデ調整を行う。	
30-85	3KⅣ-7区 2b層p239, 146, 237	平底に近い丸底。外面の輪積形成痕をナデと潰しで消す。外面が茶褐色，内面は，黒色を呈する。	
30-86	3KⅣ-7区 2b層p292	頸部から口縁部にかけて屈曲し，口縁部やや内傾して立ち上がる。結晶片岩を粉末状にして胎土に混入し焼成している。器面は，外面に条痕，内面ナデ調整を行う。	2点接合
30-87	3KⅣ-9区 2b層p132	頸部が直線的に外方へ延び，口縁部で厚みを増し内傾ぎみとなる。口縁部の外面に二条の沈線が巡る。器面の調整は内外ともにあまい潰しを行う。	2点接合
30-88	3KⅣ-8区 2b層p10, 19	長い頸部が外反し，口縁部に山形のリボンを付す。器面の外面は，条痕による整形，内面はナデ調整を行う。胎土に結晶片岩を混入する。色調は，外面が黒色，内面は暗黄色を呈している。	4点接合
31-89	3KⅣ-7区 2b層p180	結晶片岩を胎土に混入。外面は，粗い状痕と指押さえ。内面は条痕をナデ調整する。器形は胴部が内湾し，頸部で外反する。口縁端部を平坦になす。	
31-90	3KⅣ-9区 2b層p1, 2, 3, 239	肩部で湾曲し頸部は外湾ぎみに立ち上がり口縁端部で外反する。口端端部は丸みをもつ。器面は条痕整形後，ナデ潰しによって調整を外面行う。内面は，ナデによる調整を行う。	
31-91	3KⅣ-9区 2b層p137	肩部で屈曲し，頸部でやや外反し，口縁部へ移行する。口縁部は丸みを有する。外面ナデ，内面は粗い条痕整形とする。	2点接合
31-92	3KⅣ-6区 2b層p114	屈曲する肩部を形成し，頸部で外湾する。器面は，条痕整形を行ない，内面はナデ整形をしている。胎土に結晶片岩を混入している。	
31-93	3KⅣ-9区 2b層p121	リボン状突起を貼付た土器片。外面は，条痕整形をなし，内面はナデ調整を行う。胎土に結晶片岩を混入する。	
31-94	3KⅣ-10区 2b層p23	リボン状突起を貼付た土器片。外面の屈曲部上に二条の沈線を配する。器面調整は，内外面ともにナデ調整を行う。	
31-95	3KⅣ-8区 2b層	丸底の組織痕土器である。籠目状圧痕を付す。縦長に５mm間隔をおいて結節を生じ，底部中央部は指押さえによる整形とし，内面は，ナデ調整を行う。	籠目状圧痕
31-96	3KⅣ-9区 2b層p334	右から左へ斜行する籠目状圧痕を有す。結節部は３mm間隔で器面につく。内面はナデ調整とする肩部の破片である。	籠目状圧痕

図番号	出土地区	特　　色	備考
31-97	3KⅣ-7区 2b層p277	如意形の口縁部を形成する。口縁端部に右から左へ斜行する刻目を付す。内外の器面は，ナデ調整を行う。	
31-98	3KⅣ-7区 2b層p214	如意形口縁部を形成。口縁端部に左右から２mm幅の切り込みを入れる。内外の器面は，ナデ調整としている。	
31-99	3KⅣ-7区 2b層p106	直線的に外反して延びた胴部から，外反する口縁部へ移行して行く。口縁下端部に刻目を有する。外面はハケ目，内面は，ハケ目調整をナデ消している。	
31-100	3KⅣ-7区 2b層	内湾する口縁部に，刻目突帯を張付る。刻目は，左から切り込み，幅３mmを測る。器面は内外面ともにナデ調整を行う。	
32-1	3KⅣ-8区 2c層p176	やや屈曲する頸部から口縁部が直に立ち上がる。口縁端部に丸みを持つ。器面は，内外面ナデ潰し調整。	浅鉢形
32-2	3KⅣ-8区 2c層p161・2b層p49, 47, 48, 44	直線的に延びた胴部から肩部で屈曲し，頸部で外反して口縁部でさらに外反ぎみに立ち上がる。口縁部は，幅３mmの凹線が巡る。器面は，磨きと潰しによって滑らかである。	
32-3	3KⅣ-8区 2c層p191	内湾する胴部から口縁部へ移行する。口縁部に１．５mm幅の沈線を２本巡らす。器面は，内外面を潰しによって研磨されている。	
32-4	3KⅣ-8区 2c層p232	内湾する胴部に直に立ち上がる口縁部を付す。口縁部内面に２mmの沈線が１条巡る。内外面ともに器面はナデ調整を行う。	
32-5	3KⅣ-8区 2c層p185	胴部から肩部にかけ湾曲し，外反する口縁部を付す。口縁部を丸く納める。器面は，ナデ整形を行う。	
32-6	3KⅣ-8区 2c層p220	内傾する頸部から口縁部の境で外反する。口縁部は，丸みを持ち内外面の器面をナデ調整している。	
32-7	3KⅣ-10区 2c層p57	頸部と口縁部の境でやや屈曲し，口縁部は直に立ち上がる。口縁部の外面に３条の沈線を配する。器面は，ナデ調整を行う。	
32-8	3KⅣ-8区 2c層p236	胎土に結晶片岩を混入する。器形は，胴部から直線的に外方へ延び，口縁部で厚みを増し内湾する。器面は，内外面ともに条痕調整を行う。	
32-9	3KⅣ-6区 2c層p254・253	直線的に外方へ延びた胴部からさらに口縁部で外反する。口縁端部を平坦になす。内外面の調整は，ナデ整形を行なう。	
32-10	3KⅣ-8区 2c層p150	内湾ぎみに胴部から口縁部へ移行する。口縁端部は丸く納める。器面は，粗い条痕調整を行う。内面は粘土積みを指による押さえナデ整形を行う。内面にカーボンが付着する。	



第33図　Ⅴ－２区河川跡周辺(1～9, 15)・河川跡内(10～14)出土土器⑩

Ⅳ区２ｃ層・Ⅴ区出土土器一覧表７

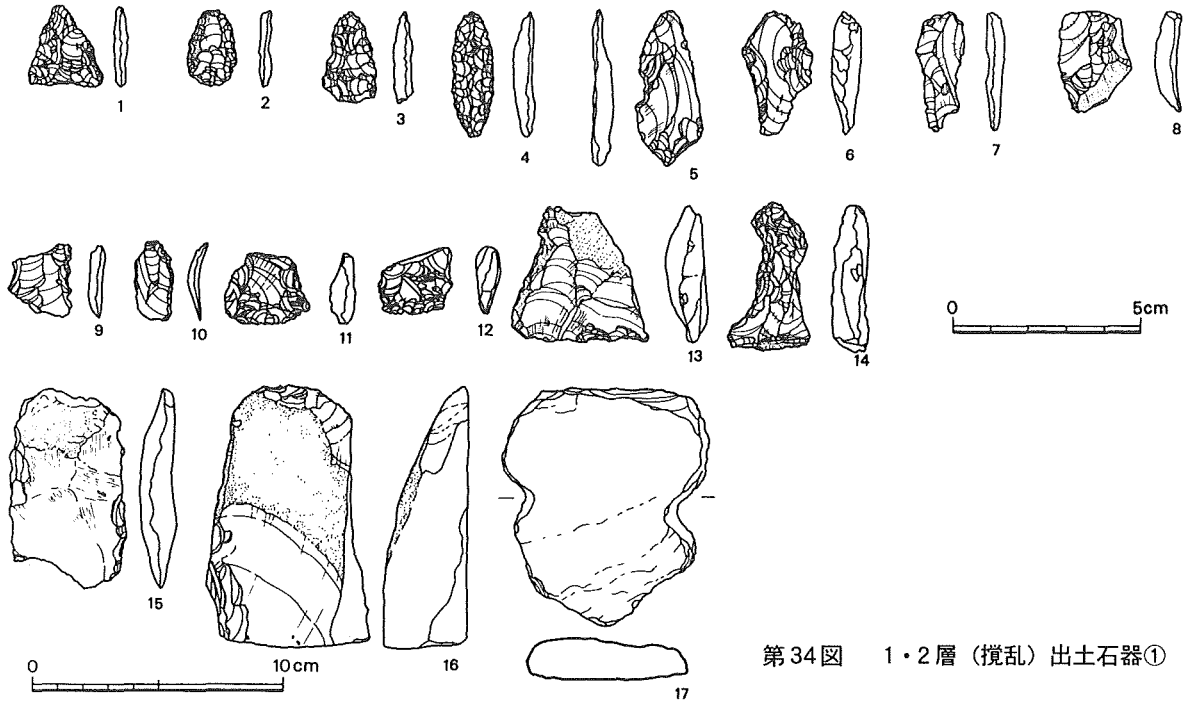
図番号	出土地区	特　　色	備考
32-11	3KⅣ-8区 2c層p154・157・159・160	胴部から緩やかに内湾し，肩部で屈曲し，頸部で外反し口縁部へ延びる。口縁端部は，丸みを持つ。外面指による押さえ，内面はナデ潰しを行なう。外面は肩部から上にカーボンの付着あり。	
32-12	3KⅣ-8区 2c層p159	胴部は直線的に外方に延び，口縁部でやや内傾する。口縁端部は指による整形で外側に摘みだした形となる。外面は，指による押さえとナデ潰し調整を行う。内面にカーボンの付着を認める。	3点接合

図番号	出土地区	特　　色	備考
32-13	3KⅣ-6区 2c層Jp242	直線的に胴部から口縁部へ移行する。口縁端部は，丸みを持つ。外面に条痕による整形をナデ消している。内面は，ナデ調整し胎土に結晶片岩を混入する。	
32-14	3KⅣ-6区 2c層Jp239・234・229	外底面の中央部がやや膨らみをもち，底端部が張りぎみに立ち上がり胴部へ移行する。胴部は，条痕調を行う。内面は，ナデ調整し，器面に凸凹が目立つ。	
33-1	3KⅤ-2区 p20	直線的に延びた胴部からＬ字形の口縁部へ移行する。口縁部は，内端からやや上向きに外端へ移行し端部を丸く納める。外面に縦位と横位のハケ目調整を行っている。	

V区出土土器一覧表８

図番号	出土地区	特　　色	備考
33-2	3KV-2区 p9	内湾する胴部から水平に形成した口縁部へ移行する。外面にわずかにハケ目整形を認める。	
33-3	3KV-2区 p28	直線的な胴部から平坦で厚みのある口縁部へ移行する。外面に縦位のハケ目整形残す。	
33-4	3KV-2区 p30	１条の三角突帯を胴部に貼り付け，内湾する胴部から下端部に膨らみを持った口縁部へ移行する。器面は，ナデ整形する。	
33-5	3KV-2区 p60	平坦な口縁部を有する高杯。内外面の色調は，明赤黄色を呈し，ハケ目がわずかに認められる。	
33-6	3KV-2区 p19	裾端部に浅い凹線を巡らした高杯の脚部である。内外面は，淡黄赤色を呈する。	
33-7	3KV-2区 p11	やや上げ底ぎみの底部。胴部全面にハケ目をつける。内面にハケ目の調整が一部認められる。	
33-8	3KV-2区 p10	底部の中央部やや凹む。膨らみを持った胴部をなす。外面は，潰しによって滑らかとなる。	
33-9	3KV-2区 p15	内湾する肩部から直立した頸部へ移行し，口縁部で外反する。頸部に暗文を有す。また肩部は，丹を塗布している。内面は潰しを丁寧に行って滑らか。	

図番号	出土地区	特　　色	備考
33-10	3KV-2区 p69	内湾した胴部から外反する口縁部を有する器形をなす。口縁部は，長く外湾した器形をし，端部を丸く納める。口縁部に丹を塗布している。調整は，ナデ整形としている。	河川跡内
33-11	3KV-2区 p56	内湾した胴部から外反する口縁部へ移行する。口縁部は１０ほどの長い口縁部でないが，外反し，端部を丸く納める。外面は，細いハケ目，内面は粗いハケ目の調整をナデ整形する。	河川跡内
33-12	3KV-2区 p53・36	凹をなす外底面から外湾する胴部へ移行する。外面に縦位の調整痕が残る。内面は，ナデ整形である。	河川跡内
33-13	3KV-2区 p52・46	内湾する胴部から外反して口縁部へ移行する。器面はナデ整形を行なう。頸部が短く口縁部は，さらに外反し端部は丸く納める。	河川跡内
33-14	3KV-2区 p49	台付甕の底部。外底面の中央部が膨らむ。底端部は丸みを持って直線的に内傾して立ち上がり，胴部へ移行する。外面はハケ目調整，内面は，煤の付着がある。	河川跡内
33-15	3KV-2区 p77	瓦質の鉢。外面に櫛描が残る。	東播系

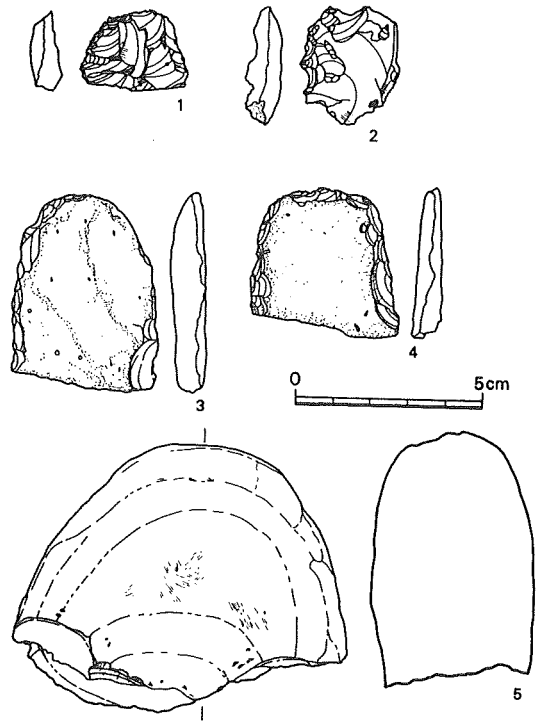


第34図　１・２層（撹乱）出土石器①

IV区１・２層出土石器１一覧表９

図番号	出土地区	特　　色	備考
34-1	3KIV-9区 ｶｸﾗﾝ	石鏃。脚が短く，稚拙な整形剥離を行う。平基鏃に近い。	黒曜石
34-2	3KIV-6区 ｶｸﾗﾝ	石鏃。正面は側縁から整形剥離を行うが，裏面は主要剥離面をそのまま残す。	黒曜石
34-3	3KIV-3区 1層	正面は，左右から整形剥離を施し，裏面は，左側縁に整形リタッチを加え，裏面は基部を中心に調整リタッチを加え両縁に簡単なリタッチ作業を行っている。	黒曜石
34-4	3KIV-6区 ｶｸﾗﾝ	正面の左側縁に，抉り調整剥離を行う。裏面は先端部に調整剥離を行う。	黒曜石
34-5	3KIV-5区 1層	正面の左側縁に調整剥離を行い刃部を形成。裏面は自然面を残す。	黒曜石
34-6	3KIV-10区 1層	正面に３カ所フルーテング剥離を行う。裏面の左側にリタッチを行い下部に抉りリタッチの調整施す。	黒曜石
34-7	3KIV-8区 ｶｸﾗﾝ	正面は，自然面除去剥離を行う。裏面は，主要剥離面を残し下端部両縁に細かいリタッチ調整をする。	黒曜石

図番号	出土地区	特　　色	備考
34- 9	3KIV-8区 ｶｸﾗﾝ	縦長剥片の正面右側縁に使用痕が残る。裏面は，主要剥離面を残す。	黒曜石
34-10	3KIV-8区 ｶｸﾗﾝ	縦長剥片の右側縁の正面に使用痕のリタッチを認める。刃器。	黒曜石
34-11	3KIV-6区 2層ｶｸﾗﾝ	爪形をした小型掻器。下部の正裏面に刃部を有している。	ﾊﾘ質安山岩
34-12	3KIV-6区 2層ｶｸﾗﾝ	四角形をなす剥片石器。調整剥離は素材の周囲にリタッチ調整を行う。	黒曜石
34-13	3KIV-9区 ｶｸﾗﾝ	台形を呈し，刃部を正面下部に持つ。主要剥離面を残す。	黒曜石
34-14	3KIV-6区 ｶｸﾗﾝ	抉り調整加工を行い三日月形をなす。裏面は，主要剥離に留める。	黒曜石
34-15	3KIV-6区 2層ｶｸﾗﾝ	磨製石斧を転用してスクレイパーとしている。正面は研ぎにより滑らかで，裏面は両側縁の上下から打撃して剥離調整を行う。	ﾌｪﾙﾝﾌｪｲｽ
34-16	3KIV-5区 1層	打製石斧。正面の上部と左側縁に階段状の剥離を施す。右側縁は，欠損する。裏面は，右側縁のみ調整剥離を行う。断面は，四角形を呈する。	安山岩
34-17	3KIV-6区 2層ｶｸﾗﾝ	石錘。短軸の両側縁に抉りを入れて紐掛かりとしている。	結晶片岩



第35図　遺構出土石器（5は1/6）①

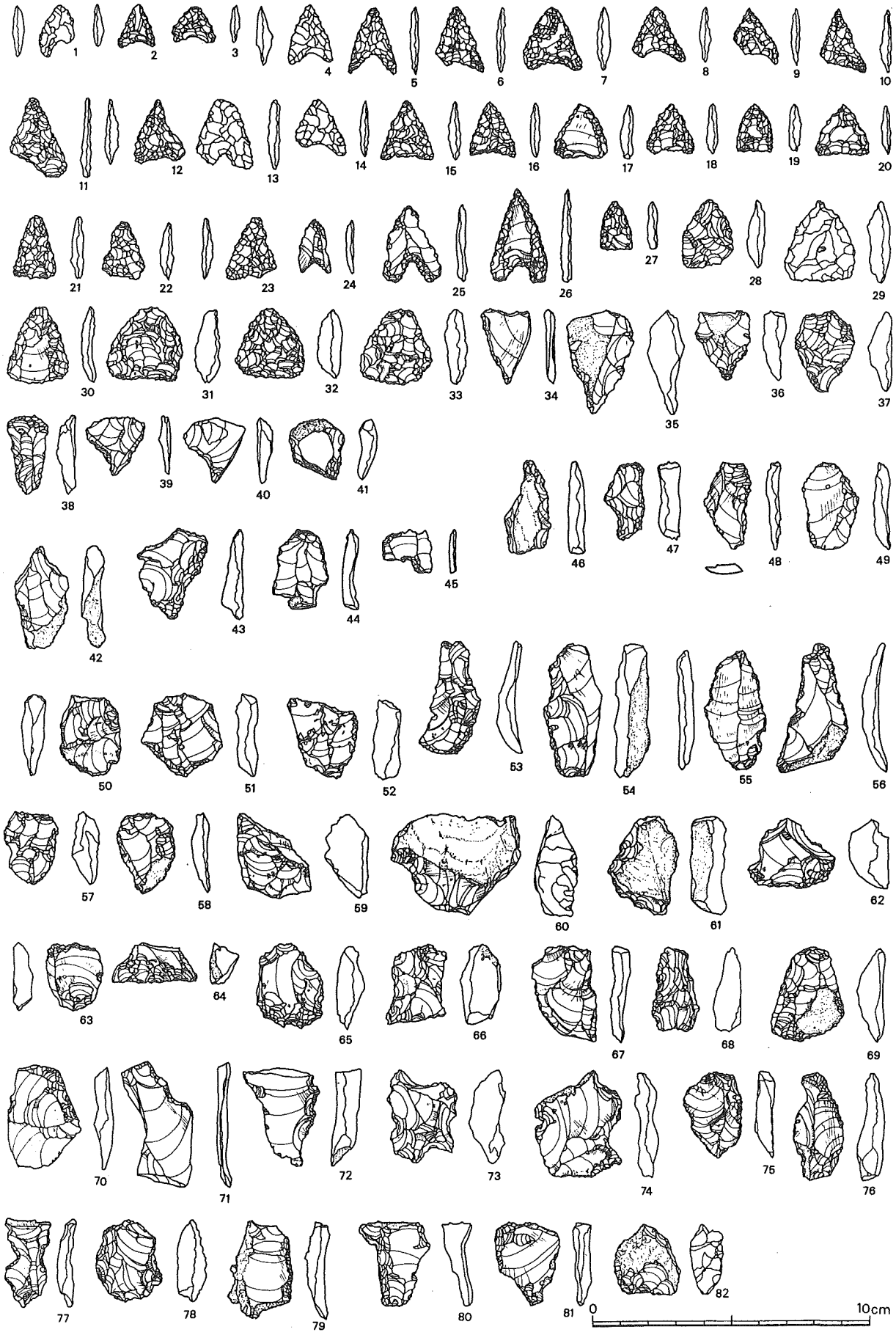
Ⅳ区遺構・2’層出土石器一覧表１０

図番号	出土地区	特　　色	備考
35-1	3KIV-5区 1号集石	縦長剥片の左側縁部に使用痕を認める。裏面は，主要剥離を残す。	黒曜石
35-2	3KIV-5区 1号集石	左側縁に鋸状刃部を形成する。裏面は，主要剥離で終えている。	川質安山岩
35-3	3KIV-6区 土壙1	偏平打製石斧。正裏面に両側縁から粗い調整剥離を施す。下部を欠損する。	安山岩
35-4	3KIV-6区 土壙1	偏平打製石斧。３と同様の剥離方法で石器を形成し，正裏面ともに中央部が平坦な断面四角形を呈する。	安山岩
35-5	3KIV-6区 2b層Js21	中央に凹を有する。凹石。長さ２０ｃｍ，厚さ１１．５ｃｍ。下部は欠損する。（安山岩）	住居跡の中央部から出土
39-1	3KIV-9区 2’層	抉り幅の広い石鏃。両側縁と抉り部分の三方向から中心部へ向かって押圧剥離を繰り返し行う。	黒曜石
39-2	3KIV-9区 2’層	半透明な石材に，押圧剥離を連続して石鏃を形成する。断面がカマボコ形を呈する。	黒曜石
39-3	3KIV-9区 2’層	両脚を欠損する石鏃。小型の部類に入る資料で，調整は側縁から中心部へ押圧剥離を繰り返す。断面は，凸レンズ状を呈す。	ｻﾇｶｲﾄ
39-4	3KIV-9区 2’層	抉りが浅く爪形状を呈する。先端部に鋭利な角度がない。	黒曜石
39-5	3KIV-9区 2’層	基部の抉りがなく，先端部の鋭利な作り出しも見られない。断面は凸レンズ状をなす。	黒曜石
39-6	3KIV-8区 2’層	偏平な剥片鏃。周辺にわずかな整形剥離を施す。	ｻﾇｶｲﾄ
39-7	3KIV-9区 2’層	正面の左側縁の脚がない石鏃。用途が石鏃でなく別な器種とも考えられる。	黒曜石
39-8	3KIV-7区 2’層	上下両端部が下がり，形状はポイント形をなす。下部の基部を，幾分偏平に作出している。	黒曜石
39-9	3KIV-8区 2’層	横長剥片を利用した削器。裏面の中位から上位にかけて調整剥離を行う。	ｻﾇｶｲﾄ

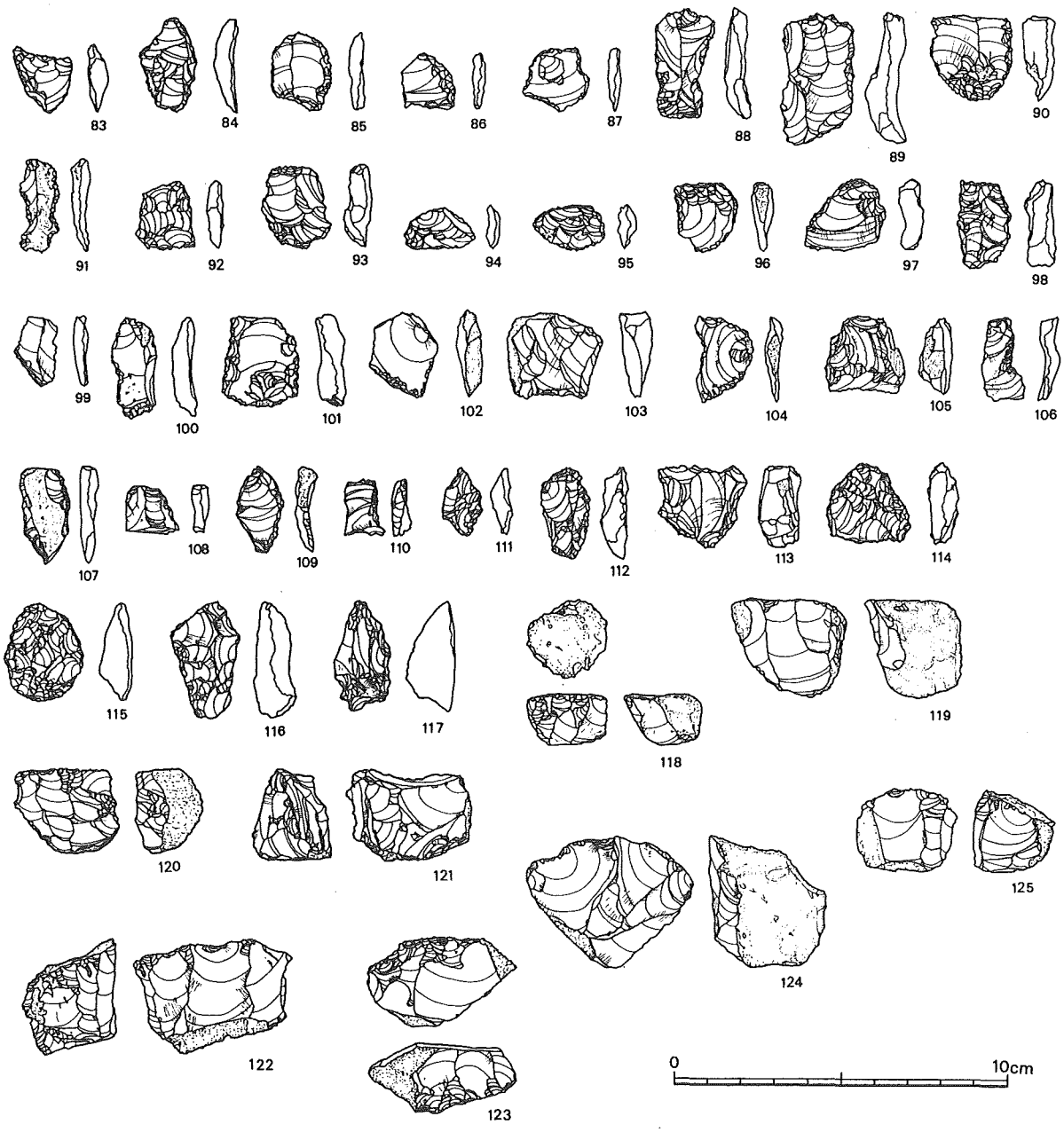
Ⅳ区2’・２ｂ層出土石器一覧表１１

図番号	出土地区	特　　色	備考
39-10	3KIV-9区 2’層	上部に鋸歯状の調整剥離をほどこし，下部は左右からの調整剥離で突起状の先端部を作出している。	黒曜石
39-11	3KIV-9区 2’層	上部の両端に突起状の作出が認められる。下部は，側縁からの調整剥離で尖る形状となる。下部端は，使用のため摩耗する。	ｻﾇｶｲﾄ
39-12	3KIV-9区 2’層	下部に微細な刃こぼれを残す剥片石器。	黒曜石
39-13	3KIV-9区 2’層	左側縁に抉りを入れた剥片石器。	黒曜石
39-14	3KIV-9区 2’層	右側縁に微細な使用痕のある剥片石器。	黒曜石
39-15	3KIV-9区 2’層	右側縁に微細な使用痕のある剥片石器。	黒曜石
39-16	3KIV-6区 2’層	石核剥片のチップ片。右側に調整痕が残る。	黒曜石
39-17	3KIV-9区 2’層	縦長剥片の右側面に微細な調整剥離を施す。	黒曜石
39-18	3KIV-9区 2’層	縦長剥片の右側縁に調整剥離を行う。	黒曜石
39-19	3KIV-6区 2’層	左側縁に使用痕のある剥片石器。	黒曜石
39-20	3KIV-9区 2’層	右側縁に微細な剥離のある剥片石器。	黒曜石
39-21	3KIV-7区 2’層	右側縁に微細な使用痕のある石器。	黒曜石
39-22	3KIV-9区 2’層	石核調整剥離の剥片。	黒曜石
39-23	3KIV-9区 2’層	石核調整剥離の剥片。	黒曜石
39-24	3KIV-8区 2’層	下部に微細な使用痕ある石器。	黒曜石
39-25	3KIV-9区 2’層	上下に調整剥離を行った削器。裏面は，自然面を残す。	黒曜石
39-26	3KIV-8区 2’層	裏面に微細な剥離を行った削器。	黒曜石
39-27	3KIV-6区 2’層	下部に微細な使用痕のある石器。	黒曜石

図番号	出土地区	特　　色	備考
39-28	3KIV-7区 2’層	下部に微細な使用痕ある石器。	黒曜石
39-29	3KIV-9区 2’層	石核調整剥離の剥片。	黒曜石
39-30	3KIV-9区 2’層	下部に微細な使用痕のある剥片石器。	黒曜石
39-31	3KIV-9区 2’層	下部に微細な使用痕のある剥片石器。	黒曜石
39-32	3KIV-6区 2’層	楕円形を呈した掻器。	ｻﾇｶｲﾄ
39-33	3KIV-7区 2’層	上部と下部から剥片剥離の作業を行う。下部を２カ所から剥離し，断面舟底形を呈する。	黒曜石
39-34	3KIV-6区 2’層	周囲から３０mm程度の剥片を亀の甲羅状に剥ぎ取る作業を連続して行った石核。	ｻﾇｶｲﾄ
39-35	3KIV-8区 2’層	石庖丁。上部端のエッジは丸く磨き上げ，やや外側へ反りぎみに作出する。穿孔を１カ所確認できる。	硬質砂岩
39-36	3KIV-9区 2’層	石庖丁。両刃をなし，刃部のエッジが内湾する。	粘板岩
39-37	3KIV-7区 2’層	刃部が使用によって欠けた状態にある。全面にわたって研ぎだしを丁寧に行っている。断面は，やや偏平な楕円形を呈する。	蛇文岩
39-38	3KIV-6区 2’層	正面の右側縁に剥離整形が認められる削器。	ｻﾇｶｲﾄ
39-39	3KIV-6区 2’層	短冊形の打製石斧。左側に厚みがあり，階段状剥離を集中している。右側縁は，大きな剥離で調整を行う。	玄武岩
39-40	3KIV-9区 2’層	両側縁から階段状剥離の調整で打製石斧を形成している。	玄武岩
39-41	3KIV-6区 2’層	石錘。長軸と短軸の両端に４カ所の打撃を加えた礫石錘。	安山岩
39-42	3KIV-6区 2’層	円礫の側面に使用部分が認められる。また，両上下面は研ぎがかかり滑らかである。	安山岩
40- 1	3KIV-10区 2b層s4	脚が短く胴長の形態をなす。調整剥離は，鱗状に両側縁から行っている。	黒曜石
40- 2	3KIV-8区 2b層s5	幅広の胴部をなし，断面は偏平なレンズ状を呈する。調整は，微細な鱗状の剥離を施している。	黒曜石
40- 3	3KIV-7区 2b層s7	五角形を呈した石鏃。下部の抉りが浅くまた広くなっている。	黒曜石



第36図　2層出土石器①



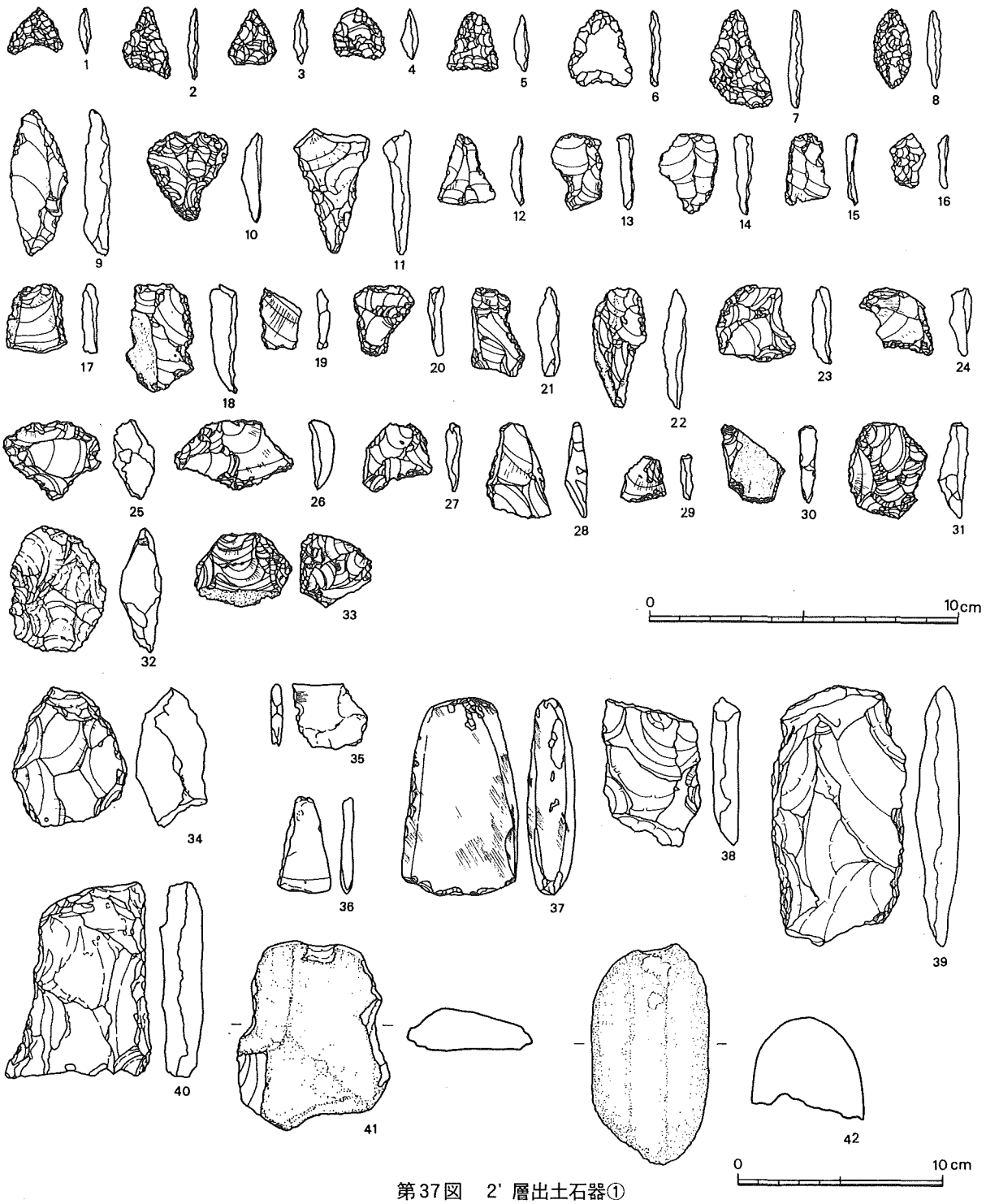
第37図　2層出土石器②

Ⅳ区２ｂ層出土石器一覧表12

図番号	地区番号	特　　色	備考
40-4	3KⅣ-11区 2b層s5	鋸歯状の側縁を持った石鏃。基部は直線的に作出している。	黒曜石
40-5	3KⅣ-7区 2b層	上下にクラックを生じた楔形石器。	黒曜石
40-6	3KⅣ-6区 土壙2	縦長剥片の両側縁を鱗状に調整剥離を連続させ石槍状の石鏃を作出する。裏面は，一部調整を行うが主要剥離面を残す。	黒曜石
40-7	3KⅣ-9区 2～2b層	下部に微細な使用痕を残す剥片石器。	黒曜石
40-8	3KⅣ-7区 2～2b層	左側縁に石核調整剥離を持った剥片。	黒曜石
40-9	3KⅣ-7区 2b層s80	縦長剥片の右側縁にノッチ状の調整剥離を一部行っている。	黒曜石
40-10	3KⅣ-9区 2b層s4	右側縁に石核調整で生じた剥離痕を持った剥片。	黒曜石
40-11	3KⅣ-9区 2b層	下部の左側縁から調整剥離を行ってドリル状の刃部を形成する。	黒曜石
40-12	3KⅣ-7区 2b層s34	石核より剥離された剥片。	黒曜石

図番号	地区番号	特　　色	備考
40-13	3KⅣ-9区 2b層	右側縁に使用痕のある剥片。裏面は，主要剥離面を残す。	黒曜石
40-14	3KⅣ-8区 2b層s17	左側縁に使用痕のある剥片。裏面は，主要剥離面を残す。	黒曜石
40-15	3KⅣ-9区 2b層	右側縁にノッチを有する剥片石器。裏面は，主要剥離面を残している。	黒曜石
40-16	3KⅣ-9区 2b層s58	両側縁に使用痕のある剥片。裏面は，主要剥離面を残す。	黒曜石
40-17	3KⅣ-11区 2b層s12	下部に使用痕のある剥片。裏面は，主要剥離面を残す。	黒曜石
40-18	3KⅣ-8区 2b層s11	右側縁に微細なリタッチのある剥片。裏面は，主要剥離面を残す。	黒曜石
40-19	3KⅣ-9区 2b層	左側縁に使用痕のある剥片。裏面は，主要剥離面を残す。	黒曜石
40-20	3KⅣ-10区 2～2b層	右側縁に微細な調整剥離のある剥片。裏面は，主要剥離面を残す。	黒曜石

第38図　2層出土石器③

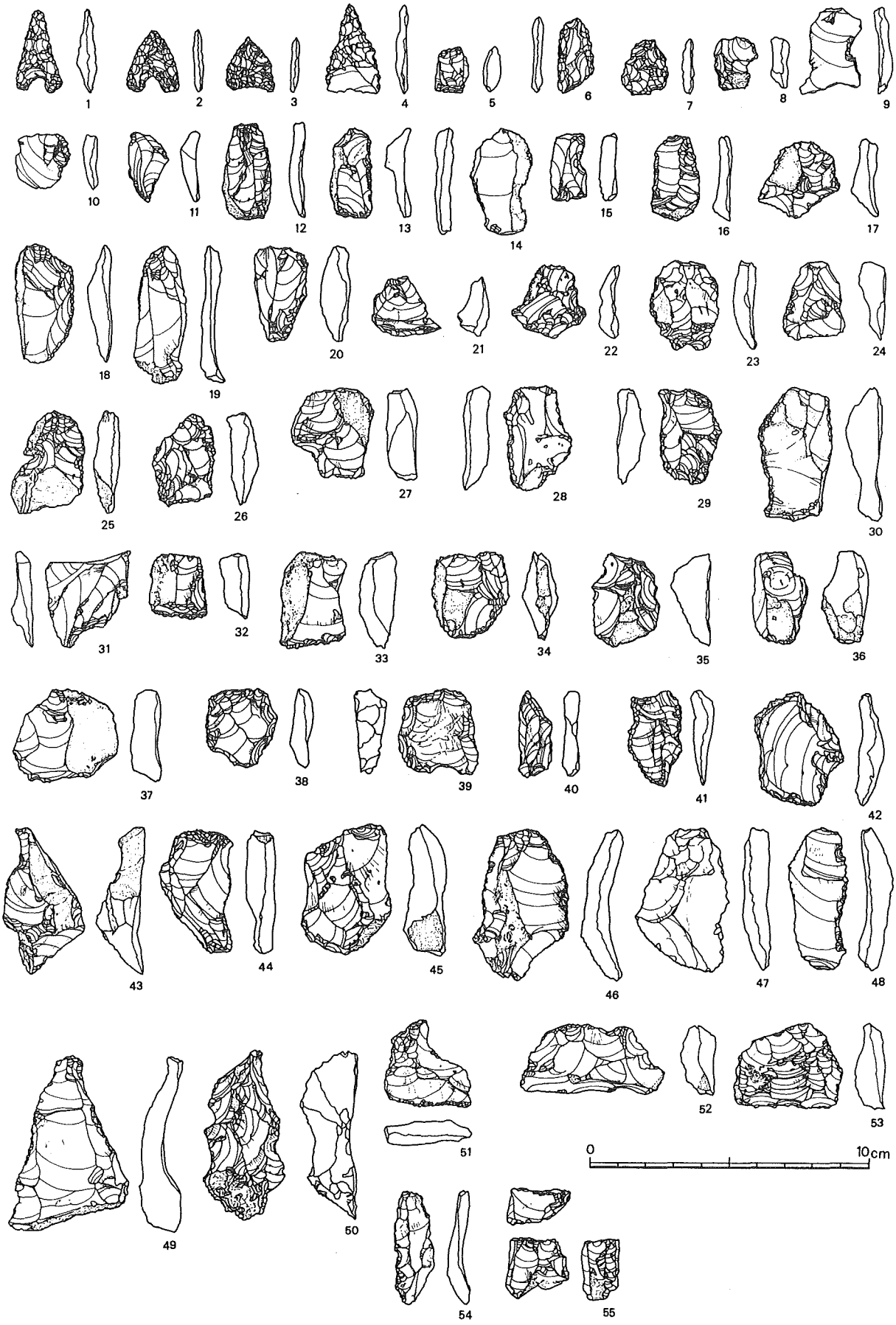


第37図　2' 層出土石器①

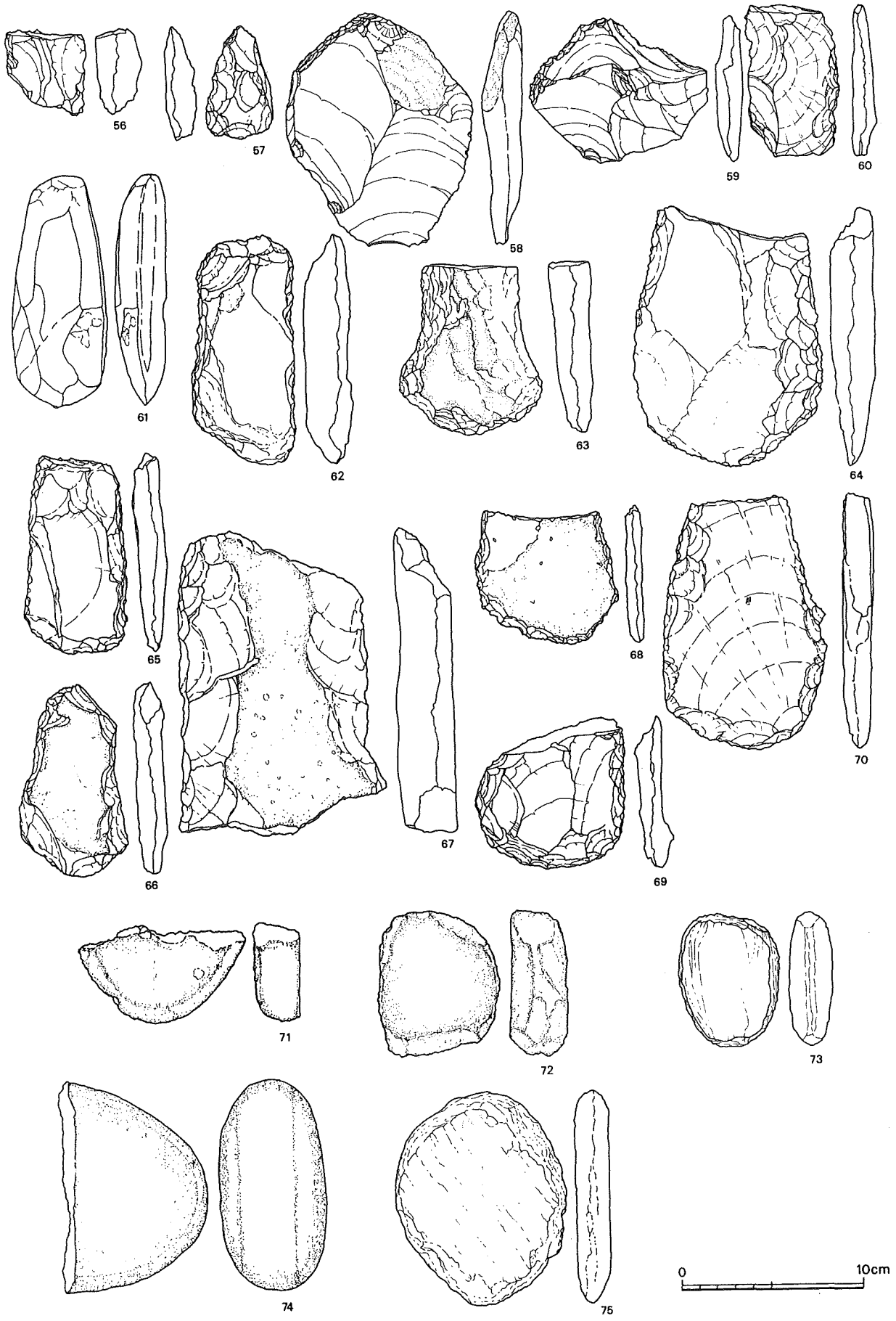
Ⅳ区２ｂ層出土石器一覧表13

図番号	地区番号	特　　色	備考
40-21	3KIV-7区 2b層s1	石核より剥離された剥片。	黒曜石
40-22	3KIV-5区 2層	石核より剥離された剥片。	黒曜石
40-23	3KIV-11区 2b層	石核より剥離された剥片。	黒曜石
40-24	3KIV-9区 2b層	石核より剥離された剥片。左側縁に調整剥離痕あり。	黒曜石
40-25	3KIV-9区2 ～2b層	右側縁に使用痕あり。裏面は，主要剥離面を残す。	黒曜石

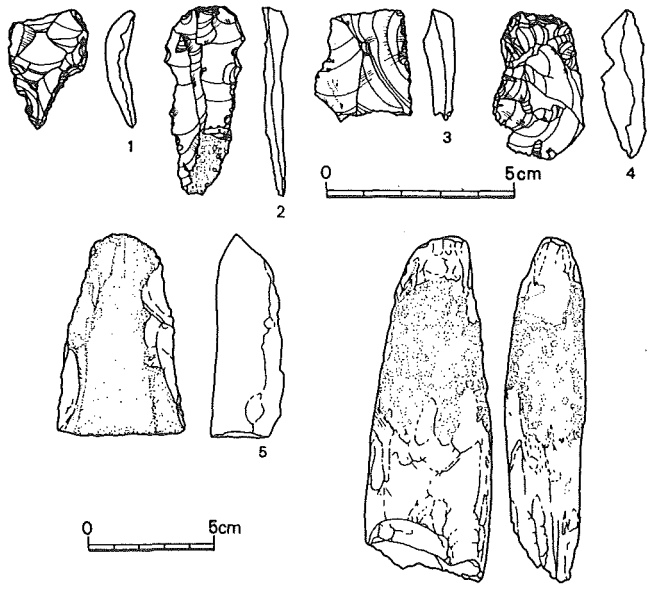
図番号	地区番号	特　　色	備考
40-26	3KIV-9区 2b層s72	下部に微細な使用痕のある剥片。	黒曜石
40-27	3KIV-11区 2b層s1	下部に微細な調整剥離がある。石核から剥離した剥片。	黒曜石
40-28	3KIV-11区 2b層s13	左側縁に調整剥離を行う。裏面は，主要剥離を残す。	黒曜石
40-29	3KIV-8区 2b層s14	左側に使用痕のある剥片。裏面は，主要剥離面を残す。	黒曜石
40-30	3KIV-9区 2b層s35	右側縁に微細なリタッチのある剥片。	黒曜石



第40図　２ｂ層出土石器①



第41図　2b層出土石器②



第42図　２ｃ層出土石器①

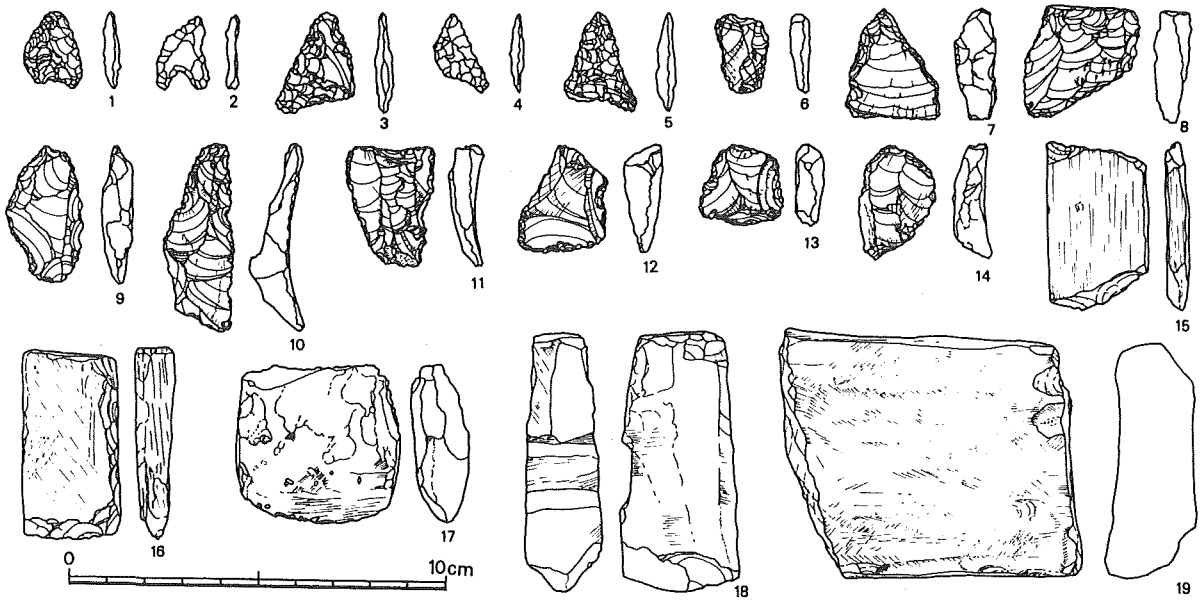
Ⅳ区２ｂ層出土石器一覧表14

図番号	地区番号	特　　色	備考
40-31	3KIV-10区2b層	裏面の右側縁に微細なリタッチのある剥片。	黒曜石
40-32	3KIV-9区2b層s12	石核より剥離させた剥片。	黒曜石
40-33	3KIV-10区2～2b	下部に調整剥離を施した剥片。	黒曜石
40-34	3KIV-11区2b層s9	上部に微細なリタッチを行う剥片。	黒曜石
40-35	3KIV-8区2b層s6	上部に微細な調整剥離を行う核器。	黒曜石
40-36	3KIV-11区2b層	３カ所より剥片を剥離した断面三角形の石核。	黒曜石
40-37	3KIV-11区2b層	左側から下面に剥離調整した剥片。	黒曜石
40-38	3KIV-9区2b層s20	全周に調整剥離を施した剥片石器。	黒曜石
40-39	3KIV-7区2b層S20	石核より剥離された剥片。	黒曜石
40-40	3KIV-9区2～2b層	縦長剥片の上頂部から左右に加撃し，彫刀面を作出する。	黒曜石
40-41	3KIV-9区2～2b層	左側縁部に調整剥離を行って刃部を形成した剥片石器。	黒曜石
40-42	3KIV-6区2b層	下部に微細なリタッチを施し，刃部を形成する剥片。	ハリ質安山岩

Ⅳ区２ｂ・２ｃ層出土石器一覧表15

図番号	地区番号	特　　色	備考
40-43	3KIV-7区2b層s38	下部先端の右側にリタッチ調整を施す。	黒曜石
40-44	3KIV-8区2b層	裏面の左側に微細な刃こぼれを生じた剥片。	黒曜石
40-45	3KIV-10区2～2b層	石核から剥離された剥片。	黒曜石
40-46	3KIV-9区2b層s79	右側縁に刃こぼれを生じた使用痕ある剥片。	黒曜石
40-47	3KIV-10区2b層s6	裏面に微細な剥離を施した剥片石器。	サヌカイト
40-48	3KIV-8区2b層s1	右側縁に調整剥離を行い刃部を形成した剥片石器。	黒曜石
40-49	3KIV-9区2b層s62	左右の側縁に使用痕のある剥片。	黒曜石
40-50	3KIV-7区2b層s13	断面三角形を呈する。両側縁から剥離し，裏面は上部から一撃でカットされた石核片である。	黒曜石
40-51	3KIV-7区2b層	下部に微細な調整剥離が残る。	黒曜石
40-52	3KIV-10区2b層	左側から下面に剥離調整した剥片。	黒曜石
40-53	3KIV-7区2b層s108	右側に微細な剥離が残る。	黒曜石
40-54	3K2b層	左側に微細な剥離が残る。	黒曜石
40-55	3KIV-7区2～2b層	左側面と正面及び裏面から剥片を剥離し，上部をカットした石核。	黒曜石
41-56	3KIV-11区2b層s11	大きな剥離の後に右側縁に細かな調整剥離を行い，石器を形成した礫核石器。	サヌカイト
41-57	3KIV-11区2b層s11	側縁部から剥離調整し，舌状ポイントを形成する。裏面も同様の剥離を行っている。右側は欠損する。	サヌカイト
41-58	3KIV-7区2～2b層	上部に微細な調整剥離を施した削器。	サヌカイト
41-59	3KIV-7区2b層s29	上部の左側縁に調整剥離を行う。５８と同様の大型の削器。	サヌカイト
41-60	3KIV-7区2b層s15	両側縁より剥離を連続させて打製石斧を形作る。	玄武岩
41-61	3KIV-8区2b層s8	刃部を丸刃にし，全面を研ぎ出す。刃部と基部の幅はあまり差のない形状をなす。断面は，楕円形をなす。	蛇文岩
41-62	3KIV-9区2b層s45	下部の刃部周辺は，使用のため剥離面が丸みを持つ。剥離は，階段状剥離で全周を調整して打製石斧を形成	玄武岩

図番号	地区番号	特　　色	備考
41-63	3KIV-11区2b層	下部に膨らみを持った打製石斧である。周辺は，階段状剥離によって形成される。	安山岩
41-64	3KIV-11区2b層	偏平な礫を用いて刃部を丸く作出する。両側縁から階段状剥離を行って打製石斧を形成する。	安山岩
41-65	3KIV-9区2b層s5	刃部が摩耗して丸みを持つ。全周にわたって階段状剥離を行っている。	玄武岩
41-66	3KIV-7区2～2b層	刃部が摩耗して丸みを持つ。全周にわたって階段状剥離を行っている。	安山岩
41-67	3KIV-6区2b層Js14	両側縁から階段状剥離を行う。大型の偏平打製石斧。	安山岩
41-68	3KIV-7区2b層s5	周辺に細かい調整剥離を行った偏平打製石斧。	安山岩
41-69	3KIV-11区2b層	周辺に階段状剥離を両側と刃部縁から行った偏平打製石斧。	玄武岩
41-70	3KIV-6区2b層Js13	周辺に階段状剥離を両側と刃部縁から行った偏平打製石斧。	安山岩
41-71	3KIV-10区2b層s16	正面と裏面及び側面をスリによって平坦にしたスリ石。	安山岩
41-72	3KIV-6区2b層s1	砥石。両端がへこみ，中央部がやや高い。使用した位置による消耗部分の変化が認められる。	砂岩
41-73	3KIV-6区2b層Js20	円礫の側面を使用したスリ石。	結晶片岩
41-74	3KIV-9区2b層s18	全面的に滑らかな円礫で下部側面に一部叩きによる使用が認められる。	硬質砂岩
41-75	3KIV-10区2b層s15	側面を全周にわたって使用する。	結晶片岩
42-1	3KIV-9区2c層s102	両側縁から下部に向かって調整剥離を行いドリルを作出している。	黒曜石
42-2	3KIV-8区2c層s19	縦長剥片の両側縁に使用痕のある剥片石器。	黒曜石
42-3	3KIV-9区2c層s68	右側縁に使用痕のある剥片石器。	黒曜石
42-4	3KIV-9区2c層s65	上部に調整剥離を施した掻器。	黒曜石
42-5	3KIV-9区2c層s64	両側縁に剥離を行った打製石斧。	玄武岩
42-6	3KIV-6区2c層Js20	幅が狭く身の長い磨製石斧。研ぎは，全面に行われず敲打痕が残る。刃部は欠損している。	硬質砂岩



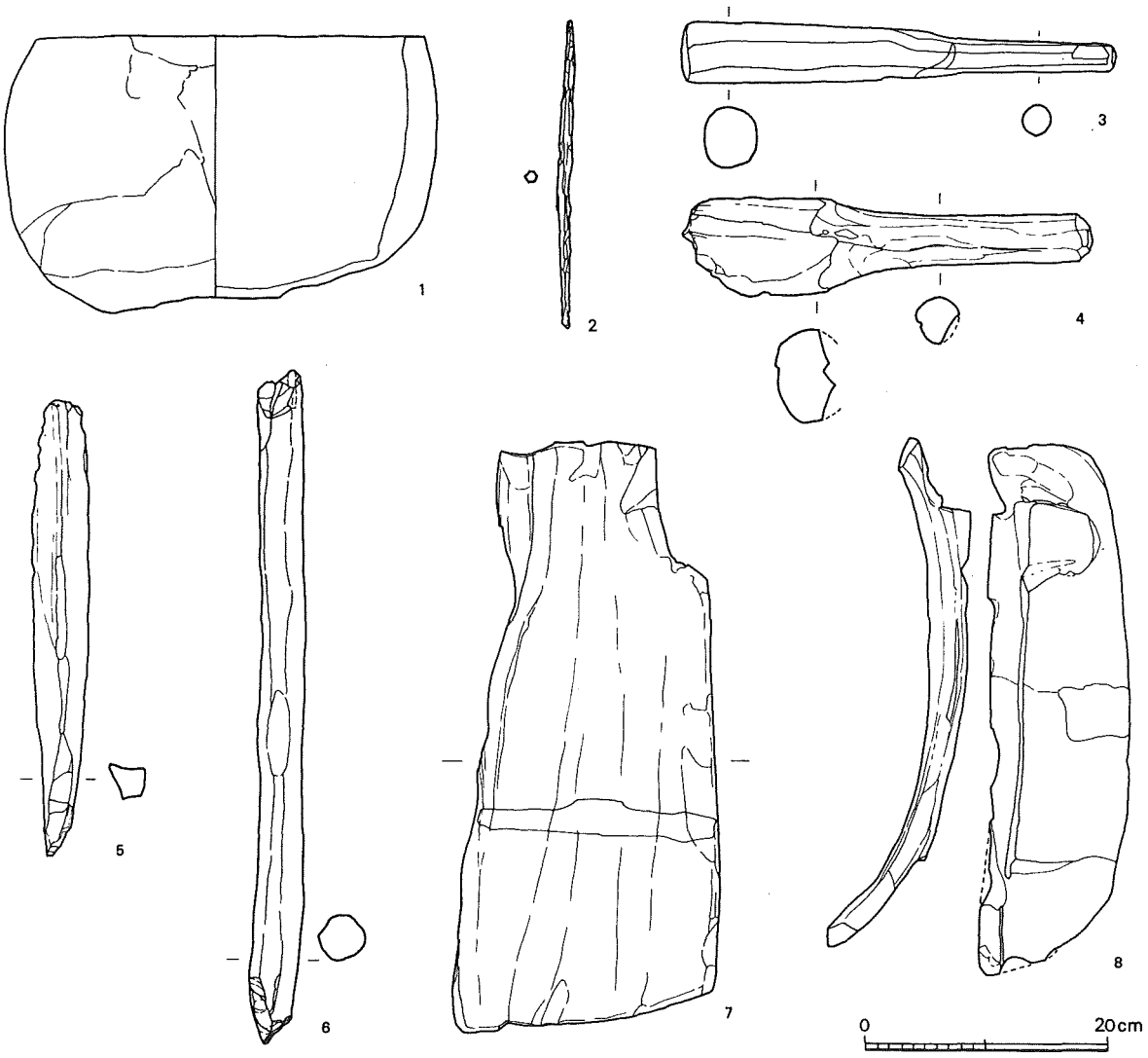
第43図　Ｖ－２区２・３層出土石器（19は1/6）

Ｖ－２区　出土石器一覧表16

図番号	地区番号	特　　色	備考
43-1	3KV-2区 2層	先端部が鈍角をなし，左側の脚の作出がない石鏃。	黒曜石
43-2	3KV-2区 2層	尖端部と抉り部が直線状になく，折れ曲がった形状で石鏃を作出した剥片石鏃。	サヌカイト
43-3	3KV-2区 2層	抉りが浅く，幅広く作出し脚の短い石鏃。	黒曜石
43-4	3KV-2区 3層	小型の石鏃類。剥離調整は丁寧に行ってバランスがとれる。脚を長めに作出している。	サヌカイト
43-5	3KV-2区 3層	胴が長く尖端にあまり鋭利さがない石鏃。押圧剥離を両側縁から繰り返して石器を形成する。	黒曜石
43-6	3KV-2区 1層	左側縁に微細なリタッチのある剥片石器。	黒曜石
43-7	3KV-2区 1層	左側縁に調整剥離を行って刃部を形成する。	チャート石
43-8	3KV-2区 3層	裏面の右側縁に剥離を行い刃部を形成する。	黒曜石
43-9	3KV-2区 3層上部	左側縁に細かなリタッチ調整が残る。	ハリ質安山岩
43-10	3KV-2区 3層	左右側縁に使用痕がある剥片石器。	黒曜石
43-11	3KV-2区 1層	両側縁に使用痕がある剥片石器。	黒曜石
43-12	3KV-2区 3層	下部に細かいリタッチで刃部を形成する剥片。	黒曜石（灰黒色）
43-13	3KV-2区 2層	左側片に剥離を施した剥片。	黒曜石
43-14	3KV-2区 2層	上部に調整剥離を行う剥片石器。	黒曜石
43-15	3KV-2区 2層	両側面の正裏面を研ぎだした磨製石斧。	粘板岩
43-16	3KV-2区 2層	両側の正裏面及び上面を研ぎ長方形をなす片刃磨製石斧。	粘板岩
43-17	3KV-2区 1層	両刃の磨製石斧。裏面に使用による刃こぼれを観察する。	蛇文岩
43-18	3KV-2区 3'層	抉入片刃磨製石斧。刃部を欠くが左側と正裏面及び基部ともによく研ぎだし抉りの長さ16.5㎜，幅19㎜を測る。	粘板岩
43-19	3KV-2区 s1	溝内より出土の砥石。使用により中央部が凹み，右側には２カ所に抉りを入れた特殊な使用を行っている。	砂岩

Ⅳ区・Ⅴ区　出土木器一覧表17

図番号	地区番号	特　　色	備考
44-1	3KIV-9区 ドングリ貯蔵穴5号	木製容器は，礫４点で押さえ込まれるように出土した。器高が２２．５ｃｍ，口径３１．４ｃｍ，断面の厚み最大２．５ｃｍ，底部で０．８ｃｍ，底径が１３．５ｃｍを測る。内面の削り幅は，１．９ｃｍで上部から下部へ連続して削り込みを行っている。外面は，横５ｃｍ×縦３．９ｃｍの削り痕が横方向に行われている。口縁部は，平坦に削りだしている。底部も平坦である。底部端から胴部の立ち上がりで器肉に厚みを増して，内湾ぎみに口縁部へ移行する。色調は，内面が黒色，外面は取り上げ時が暗赤褐色その後に黒茶色に変色する。	
44-2	3KV-2区 溝w-10	長さ２４．７ｃｍ，厚さ０．９５ｃｍを測る。削りを全体に行い先端を尖らせる。断面は，円形に角をつけた状態を呈する。基部は，平坦に削り出す。	籍
44-3	3KV-2区 溝w-8	長さ３５．１ｃｍ，先端の径５ｃｍ，柄の径が２．５ｃｍを測る。削り痕は明瞭でないが柄から胴部へ移行する部分にわずかに削りだしが認められ，この部分より太くなる。全体に滑らかで先端を丸く整形する。	横槌
44-4	3KV-2区 溝w-53	現存長３３．３ｃｍ，柄の径３．６ｃｍを測る。胴部と先端を欠失しているため長さと胴部径については，不明であるが３を一回り大きくした横槌である。	
44-5	3KV-2区 溝w-15	胴部断面が三角形を呈する。長さ３７ｃｍ，胴部径が４．４ｃｍを測る。木材を縦に削いて分割し杭としている。カット痕は先端部に残る。またカット部分に火を受け焼け焦げた部分が認められる。	杭
44-6	3KV-2区 溝w51	現存長が５４．７ｃｍ，径が３．９ｃｍを測る。下部は，２カ所から鋭利にカットされカット幅は３．５ｃｍ，長さ５．２ｃｍを測る。上部は，先端部分を一部欠失するが２カ所からカットとしている。	
44-7	3KV-2区 溝w-36	長さ４７ｃｍ，幅は最大で２０．９ｃｍ，最小で１２．５ｃｍまた厚みは，最大３ｃｍ，最小で１．１ｃｍを測る。正面は，両端が外にやや反りぎみにカットされ，裏面は自然樹皮が付き丸みを持つ。このほかカット面は上部右側に認められる。	
44-8	3KV-2区 溝w-47	長さ４３ｃｍ，幅１１．２ｃｍを測る。厳状木製品と考えられるが，左側辺下部のエッジが生きており器種については断定できない。上部には，縦が５．３ｃｍ，横５．２ｃｍ，厚さ２．４ｃｍの四角形をした突起を作出している。全体的に弓形に曲がり上下の端部を丸く形成している。左側は，５㎜程度の段が突起部から下部にかけて，削り出しの加工が認められる。	板材



第44図　Ⅳ－９区５号ドングリ貯蔵穴（１）・Ⅴ－２区河川跡出土木器（２～８）

Ⅲ　まとめ

平成７年度の調査地点は，縄文時代晩期の遺構・遺物を２ｂ～２ｃ層から主に検出し，弥生・奈良時代の遺物をⅣ区の２～２’層やⅤ－２区の小河川跡の堆積から出土している。

Ⅳ区の遺構は，先にも記述したようにⅣ－５区で集石・埋甕，Ⅳ－６区で縄文時代晩期の住居跡を検出した。また，Ⅳ－７区～１１区にかけては，縄文時代晩期のドングリ貯蔵穴を６２基発見し，県下ではこれまでに縄文時代から弥生時代にかけて６遺跡で発見されていたが，検出基数としては最も多く，その規模は縄文時代晩期の遺跡では全国的にも最大規模であった。

ドングリ貯蔵穴を検出した地区全体を３層上面で検証すると，Ⅳ－７・８区が東西方向に貯蔵穴を設置し，Ⅳ－９～１１区は，南北方向に配置している状況が認められる。また，Ⅳ－９・１０区にかけては東側が空白状況に置かれ，この部分は３層のドングリ貯蔵穴検出面の周辺より１０～２０ｃｍ程の高まりをなしており，遺物の出土が減少している。本来ドングリ貯蔵穴は湧水などのある水際に設置しており，ドングリ貯蔵穴を検出していない部分についてはあまり水に浸らない場所にあたり

ドングリ貯蔵穴部分は常に水に浸っていた部分であったと考えられる。このために，湿地帯での作業がしやすいように道[註15]としてⅣ－７区１５号ドングリ貯蔵穴周辺の東西方向に横たわる巨木を利用していた可能性が考えられる。

ドングリ貯蔵穴の特色をあげると，九州地方では初めてクリ[註16]の実を貯蔵したⅣ－７区１６号ドングリ貯蔵穴を検出し，Ⅳ－９区の５号ドングリ貯蔵穴からは毬状の木製容器が出土している。またⅣ－９区の３号ドングリ貯蔵穴は，イチイガシの実が手つかずの状態で検出したことが上げられる。

次にドングリ貯蔵穴の構造は，断面がフラスコ状とU字状の形態があり，径は上面が１ｍ前後で底面径が６０～８０ｃｍを測るものが平均的な大きさとなっている。また，壙の掘り込みは約６０～８０ｃｍ程度で６層の礫層を１０～２０ｃｍ穿っている。貯蔵穴の周囲は，円礫で囲み貯蔵穴を木材と枝材によって蓋をしていたことが検出状況から判断された。なお，円礫による囲みが集中して見られた地区は，Ⅳ－８区にある。貯蔵穴の蓋は，木材を利用して四角形に太い丸材で囲み枝材で壙の全面を覆うものと，大小の木材や枝材で覆うものが認められた。またこれらの蓋材が水によって流失しないよう重石として乗せられていた円礫が，貯蔵穴に落ち込んだ状況が認められた。

Ⅴ区の遺構は，Ⅴ－２区の調査北側に自然河川の流路を検出し，川幅は最大で３５０ｃｍ，最小で２００ｃｍあり調査区外の東西方向へ延びている。河川の堆積層からは，弥生時代後期の土器・石器・木器等の遺物が出土している。

遺物は，縄文時代晩期の土器がⅣ区全体の調査で主体を占め，組織痕[註17]や刻目突帯文及び条痕のある深鉢形土器と口縁部で屈曲する浅鉢形土器が２’・２ｂ層から出土している。２ｃ層は，口縁部に沈線を付した土器や器面全体に条痕調整を施した深鉢形と黒色研磨の浅鉢形土器が出土している。石器は，扁平打製石斧・磨製石斧・柳葉形石鏃・スクレイパー等が晩期の土器に伴って出土している。木器は，Ⅳ－９区のドングリ貯蔵穴５号から木製容器の出土があった。弥生時代の石器では，摩耗した石庖丁の破片が２点出土している。

Ⅴ－２区は，弥生時代中期の土器が自然河川跡外から出土し，河川跡内からは弥生時代後期の甕形土器が出土している。石器は，河川跡内から砥石を出土し，河川跡外からは黒曜石及びサヌカイト製の石鏃が出土している。木製品[註18]は，ヤス・横槌・杭・板材・鍬状木製品等が約６１点出土している。

調査は，道路建設に伴う路線内において行っており，ドングリ貯蔵穴はさらに数量的には増えることが想定される。縄文時代晩期は，稲作開始の段階にあり，この時期に大量のドングリ貯蔵穴を確認したことは，食糧確保の実態を知るうえで貴重な発見であると同時に黒丸遺跡の集落がかなり大規模に展開していたことが推定される判断材料となりうるものである。しかしながら，現在のところ縄文時代晩期の甕棺墓地については数基確認されているものの，集落跡の存在については不明の状況であり今後の発見に期待されるところである。

註１長崎県企画部企画課１９７４土地分類，基本調査「大村」

註２長崎県教育委員会１９８９「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅵ」

註３黒丸遺跡調査会１９８０「黒丸遺跡」

註４長崎県教育委員会１９９６「黒丸遺跡Ⅰ」長崎県文化財調査報告書第１２７集

註５大村市教育委員会１９８７「富の原」

註６大村市教育委員会１９８８「小佐古石棺墓群」

註７稗田遺跡調査会１９８８「稗田遺跡」

註８小田富士雄１９７０「九州考古学３９・４０長崎県大村市　黄金山古墳調査報告書」

註９大村市教育委員会１９９３「玖島崎古墳群」大村市文化財調査報告第１７集

註10大村史談会青年部１９８２「おおむら史記」

註11久田松和則１９８０「文献に見る中世の郡川周辺」『黒丸遺跡』黒丸遺跡調査会

註12註１１に同じ

註13大村市教育委員会１９９０「寿古遺跡」

註14大村市教育委員会１９８６「大村城（玖島城）」

註15姫路市教育委員会１９９６「佃遺跡」『かきかえられたひょうごの歴史』新発見考古速報展'95兵庫地域展図録

註16渡辺誠１９９１「一縄文時代の植物質食料採集活動について」『日本考古学論集５生業・生産と技術』株式会社吉川弘文館

註17渡辺誠１９９１「組織痕土器研究の諸問題」『交流の考古学』三島格会長古希記念

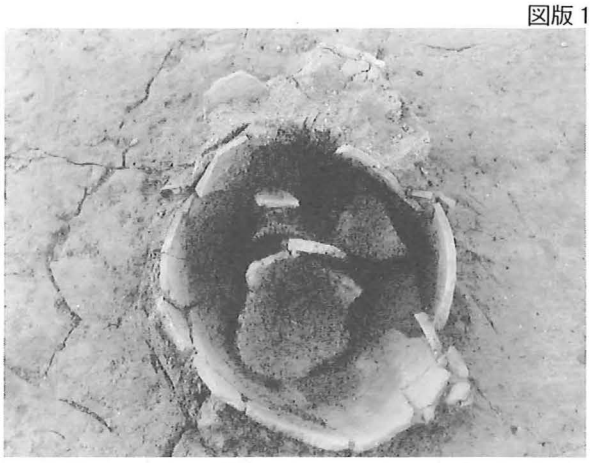
註18奈良国立文化財研究所１９９３「木器集成図録」資料第３６冊

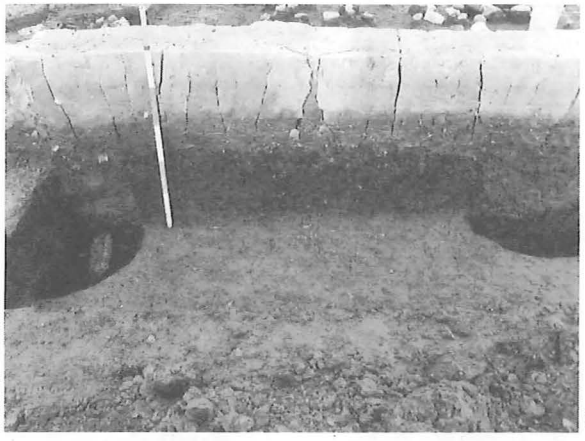
参考文献

松山利夫著１９９４『ものと人間の文化史４７，木の実』財団法人法政大学出版局

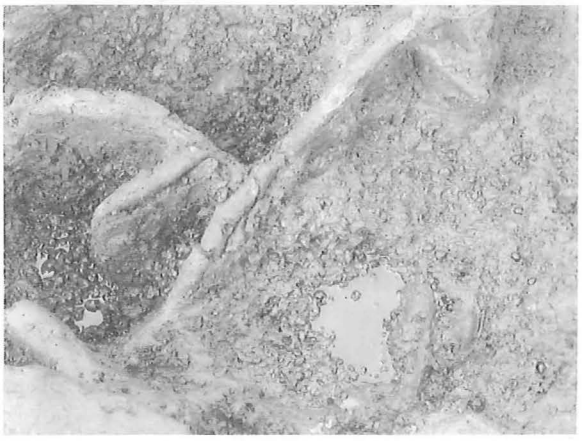
賀川光夫１９８４「九州」『新版考古学講座３先史文化』雄山閣出版株式会社

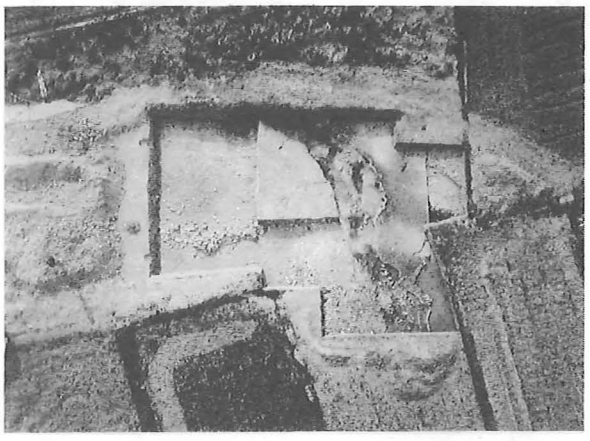
1


5

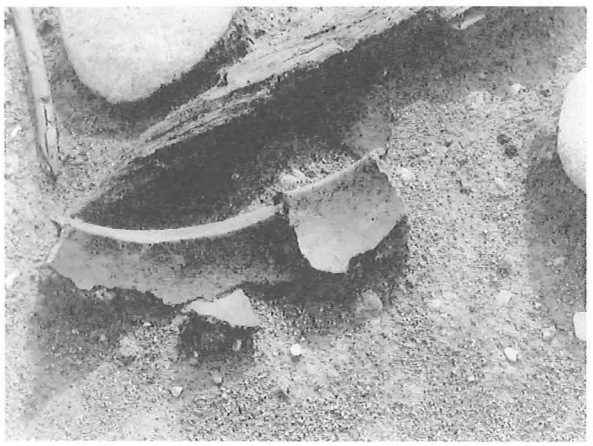

2

6


3

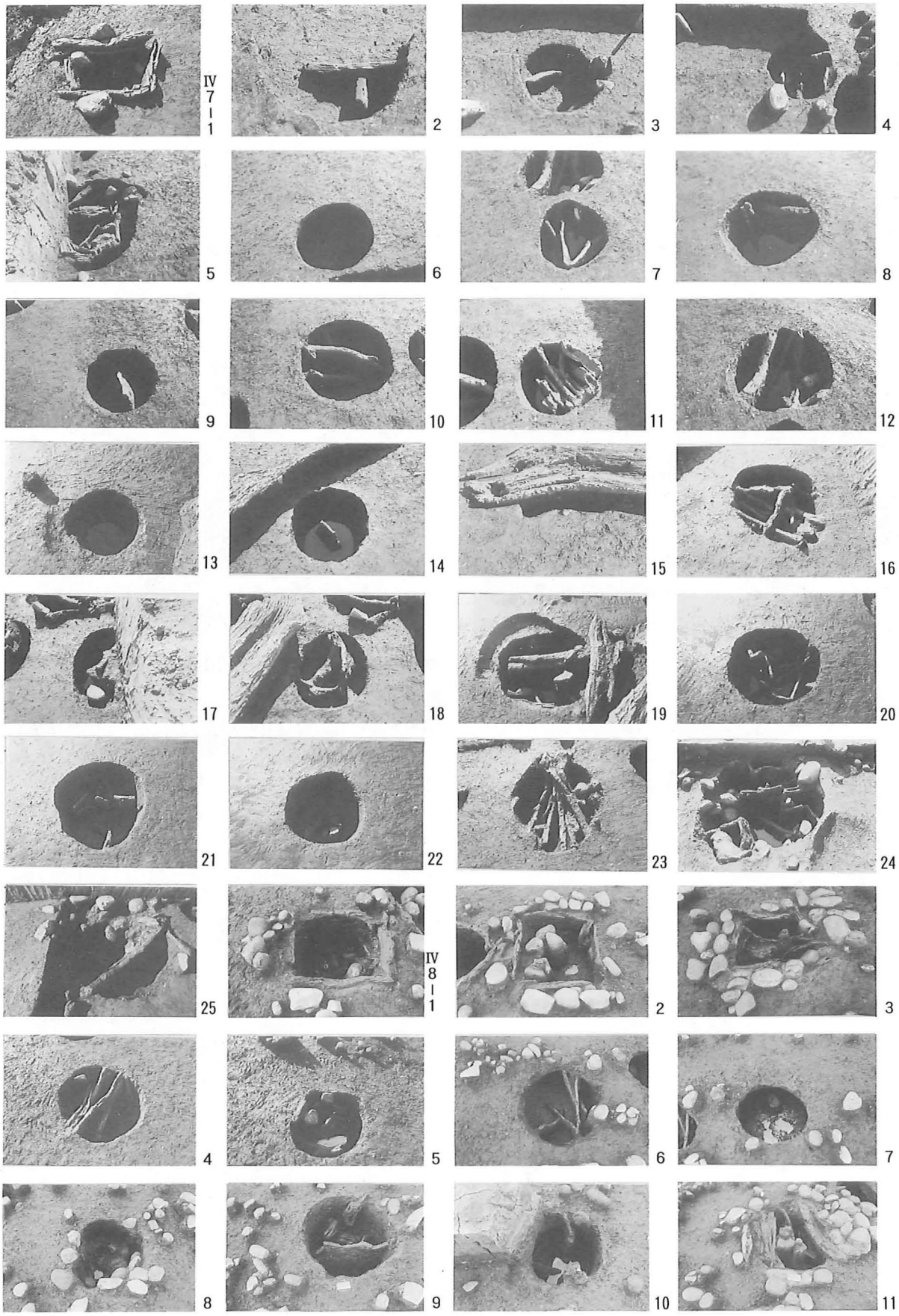

7

4

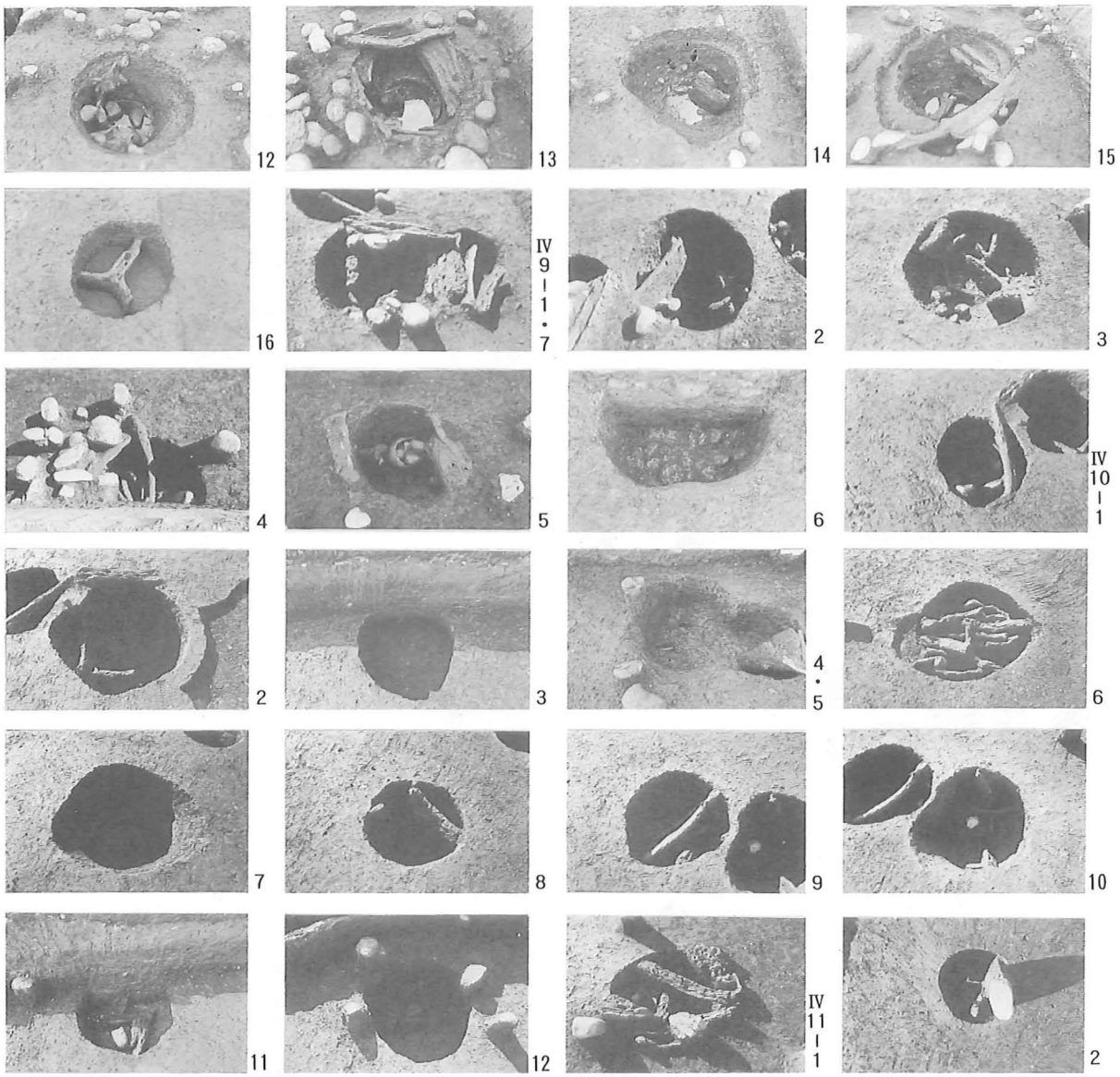

8

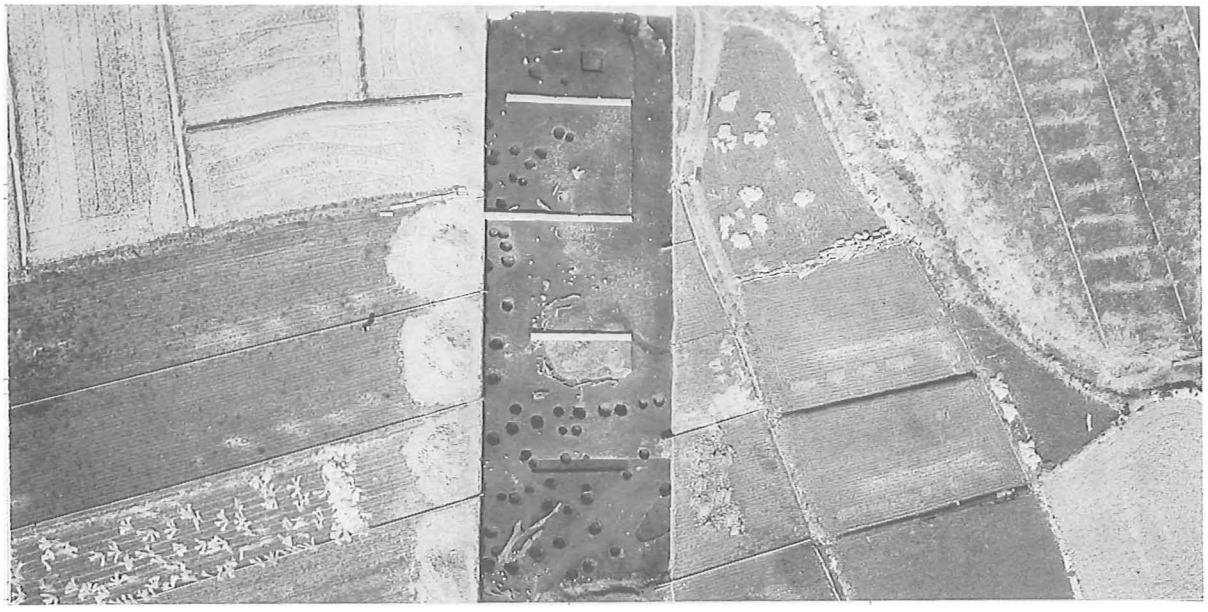
Ⅳ区（1～6）・Ⅴ－2区（7，8）の検出遺構と出土遺物

図版2



IV区ドングリ貯蔵穴①





IV区ドングリ貯蔵穴②

第 2 部

自 然 科 学 分 析

I　長崎県，黒丸遺跡における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

1．黒丸遺跡の植物珪酸体分析

はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり，植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。

試　料

試料は，Ⅳ-７区５号ドングリピット，Ⅳ-８区５号ドングリピット，Ⅳ-９区３号ドングリピットの覆土から採取された３点，およびⅣ-10区12号ドングリピットから採取された藁状の植物片の計４点である。

分析法

植物珪酸体の抽出と定量は，プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに，次の手順で行った。

１）試料の絶乾（105℃・24時間）
２）試料約１ｇを秤量，ガラスビーズ添加（直径約40μｍ・約0.02g）
　※電子分析天秤により１万分の１gの精度で秤量
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
５）沈底法による微粒子（20μｍ以下）除去，乾燥
６）封入剤（オイキット）中に分散，プレパラート作成
７）検鏡・計数

同定は，イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし，400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は，ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に，計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また，おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}g）をかけて，単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。ヒエ属型（ヒエ）の換算係数は8.40，ヨシ属（ヨシ）は6.31，ススキ属型（ススキ）は1.24，ネザサ節は0.48，クマザサ属は0.75である。

分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い，その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：ヒエ属型，キビ族型，ジュズダマ属，ヨシ属，ススキ属型（ススキ属など），ウシクサ族，ウシクサ族（大型），Aタイプ（くさび型），Bタイプ，ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節），クマザサ属型（おもにクマザサ属），タケ亜科（未分類等）

その他：表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来），茎部起源，地下茎部起源，未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属），クスノキ科，マンサク科（イスノキ属），その他

イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには，イネをはじめオオムギ族（ムギ類が含まれる），ヒエ属型（ヒエが含まれる），キビ族型A（アワが含まれる），ジュズダマ属（ハトムギが含まれる），オヒシバ属（シコクビエが含まれる），モロコシ属などがある。このうち，本遺跡の試料からはヒエ属型とジュズダマ属が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

(1) ヒエ属型

ヒエ属型は，Ⅳ-7区5号ドングリピットから検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエが含まれるが，現時点では栽培種とイヌビエなどの野生種とを完全に識別するには至っていない（杉山ほか，1988）。これは，植物分類上でも両者を識別するのが困難なためである。密度は3,800個/gと比較的低い値であるが，ヒエ属は葉身中における植物珪酸体の密度が低いことから，植物体量としては過大に評価する必要がある。

以上のことから，遺構周辺でヒエが栽培されていた可能性が考えられるが，イヌビエなどの野・雑草の可能性も否定できない。青森県三内丸山遺跡（縄文時代前期）ではイヌビエが食糧として利用されていた可能性が指摘されていることから，今回の結果は今後とも注目しておく必要があろう。

(2) ジュズダマ属

ジュズダマ属は，Ⅳ-7区5号ドングリピットから検出された。同属には食用や薬用となるハトムギが含まれるが，現時点では栽培種と野草のジュズダマとを完全に識別するには至っていない。また，密度も3,000個/gと比較的低い値であることから，遺構周辺でハトムギが栽培されていた可能性は考えられるものの，野草のジュズダマに由来するものである可能性も否定できない。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため，未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお，植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため，根菜類などの畠作物は分析の対象外となっている。

植物珪酸体分析から推定される植生・環境

(1) ドングリピット（Ⅳ-7区5号，Ⅳ-8区5号，Ⅳ-9区3号）

上記以外の分類群では，棒状珪酸体が多量に検出され，ウシクサ族も比較的多く検出された（図１）。また，キビ族型やヨシ属，ススキ属型，クマザサ属型，およびマンサク科（イスノキ属），ブナ科（シイ属），クスノキ科などの樹木起源も検出された。おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると，全体的にヨシ属が優勢であり，Ⅳ-７区５号ドングリピットではヒエ属型やススキ属型も多くなっていることが分かる。

以上の結果から，各ドングリピットの周辺はヨシ属を主体としてジュズダマ属なども見られる湿地的な環境であったと考えられ，部分的にススキ属型などが生育する比較的乾燥したところも見られたものと推定される。また，遺跡周辺にはイスノキやカシ類などの森林が分布していたものと推定される。

(2) 藁状の植物片（Ⅳ-10区12号ドングリピット）

藁状の植物片については，電気炉灰化法（550℃・６時間）で灰化した後，灰像プレパラートを作成して観察を行った。その結果，植物片には棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）が多量に含まれており，少量ながらススキ属型やヨシ属，茎部起源などが検出された（顕微鏡写真参照）。

以上のことから，藁状の植物片はススキ属およびヨシ属の茎の一部である可能性が考えられる。

参考文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定分量析法－．考古学と自然科学，9，p15－29.

杉山真二（1987）遺跡調査

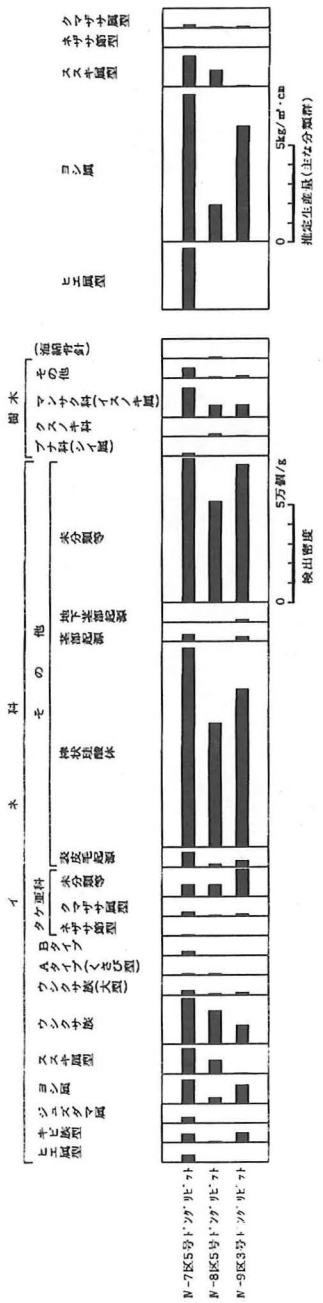


図１　長崎県，黒丸遺跡の植物珪酸体分析結果

表１　長崎県黒丸遺跡の植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群 ＼ 試料	Ⅳ-7区 5号ピット	Ⅳ-8区 5号ピット	Ⅳ-9区 3号ピット
イネ科			
ヒエ属型	38		
キビ族型	45	8	51
ジュズダマ属	30		
ヨシ属	120	30	95
ススキ属型	128	69	6
ウシクサ族	233	168	95
ウシクサ族(大型)	23	8	13
Aタイプ(模型)	8	8	
Bタイプ	23		
タケ亜科			
ネザサ節型	8		
クマザサ属型	23	8	13
未分類等	60	61	139
その他のイネ科			
表皮毛起源	75	15	32
棒状珪酸体	1016	633	808
基部起源	38		25
地下茎部起源			13
未分類等	738	518	707
樹木起源			
ブナ科(シイ属)	15		
クスノキ科		15	6
マンサク科(イスノキ属)	151	61	63
その他	53	8	13
(海綿骨針)		8	
植物珪酸体総数	2822	1608	2078

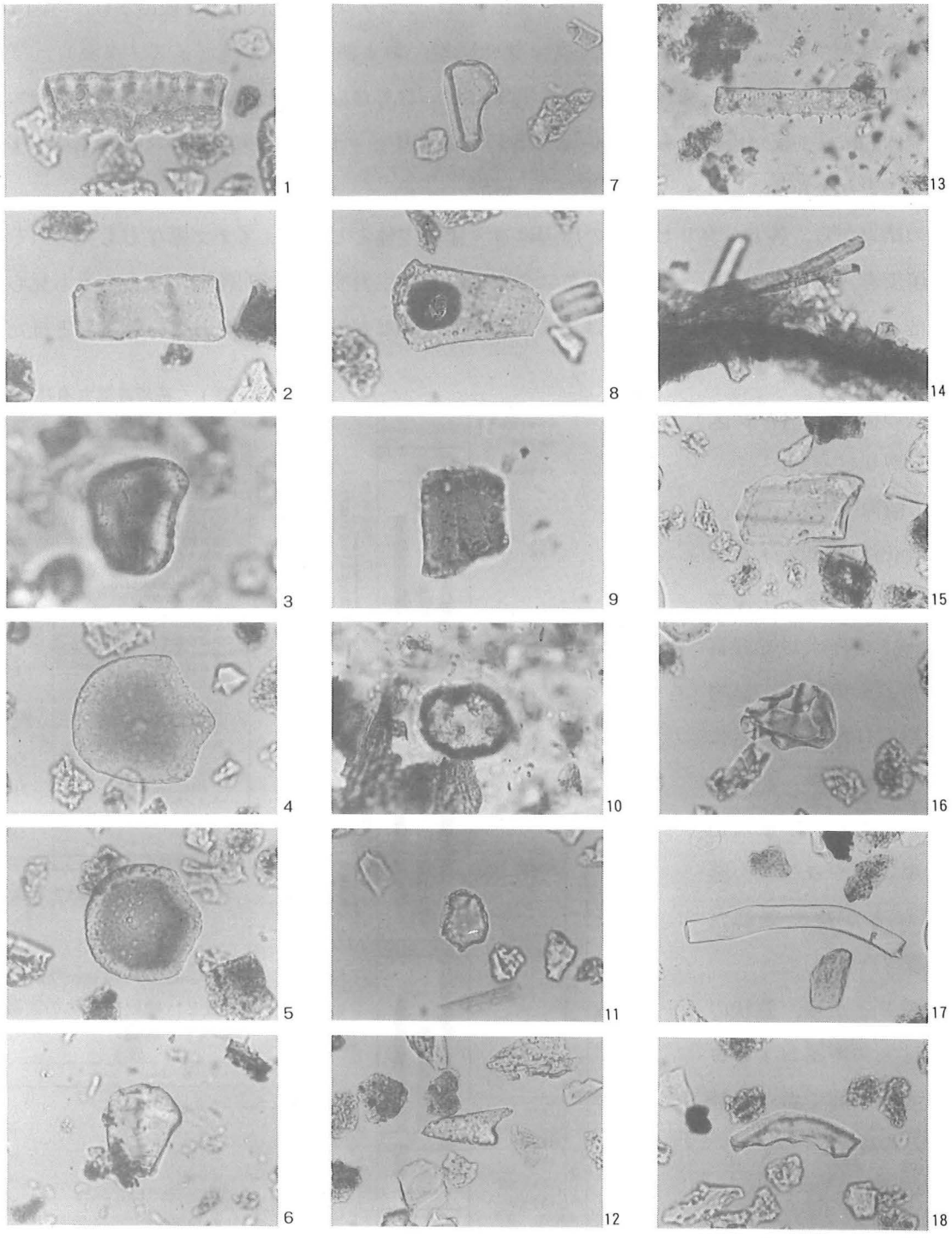
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

ヒエ属型	3.16		
ヨシ属	7.60	1.92	5.98
ススキ属型	1.59	0.85	0.08
ネザサ節型	0.04		
クマザサ属型	0.17	0.06	0.09

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

表２　植物珪酸体の顕微鏡写真

No.	分類群	地点・試料
1	ヒエ属型	Ⅳ-7区5号ピット
2	ヒエ属型	Ⅳ-7区5号ピット
3	ヒエ属型	Ⅳ-7区5号ピット
4	ヨシ属	Ⅳ-7区5号ピット
5	ヨシ属	Ⅳ-7区5号ピット
6	ススキ属型	Ⅳ-10区12号ピット
7	ウシクサ族	Ⅳ-8区5号ピット
8	イネ科A（クサビ型）	Ⅳ-8区5号ピット
9	不明	Ⅳ-10区12号ピット
10	不明	Ⅳ-10区12号ピット
11	クマザサ属型	Ⅳ-7区5号ピット
12	表皮毛起源	Ⅳ-9区3号ピット
13	棒状珪酸体	Ⅳ-10区12号ピット
14	棒状珪酸体	Ⅳ-10区12号ピット
15	イネ科の基部起源	Ⅳ-7区5号ピット
16	ブナ科（シイ属）	Ⅳ-7区5号ピット
17	マンサク科（イスノキ属）	Ⅳ-9区3号ピット
18	クスノキ科	Ⅳ-9区3号ピット



植物珪酸体の顕微鏡写真

における プラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第２号，ｐ．27－37

２．黒丸遺跡における花粉分析

試　料

試料は，Ⅳ-９区３号ドングリピットの堆積物である。

方　法

花粉粒の分離抽出は，基本的には中村（1973）を参考にし，試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

1）５％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

2）水洗した後，0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き，沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

4）水洗した後，氷酢酸によって脱水し，アセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。

5）再び氷酢酸を加えた後，水洗を行う。

6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い，グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は，1500rpm，２分間の遠心分離を行った後，上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに，生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は，島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとし，所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって，科，亜科，属，亜属，節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお，科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

結　果

出現した分類群は，樹木花粉20，樹木花粉と草本花粉を含むもの２，草本花粉12，シダ植物胞子２形態の計36である。これらの学名と和名および粒数を表３に示し，主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕

モミ属，ツガ属，マツ属複維管束亜属，ヤマモモ属，サワグルミ，ハンノキ属，クマシデ属－アサダ，クリ－シイ属－マテバシイ属，コナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属，ニレ属－ケヤキ，エノキ属－ムクノキ，サンショウ属，モチノキ属，ツバキ属，グミ属，ミズキ属，ハイノキ属，モクセイ科，ツツジ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

バラ科，ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属，イネ科，カヤツリグサ科，タデ属サナエタデ節，ナデシコ科，キンポウゲ属，ノブドウ，セリ科，オミナエシ科，タンポポ亜科，キク亜科，ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子，三条溝胞子

分析の結果，樹木花粉の占める割合が草本花粉より高く，樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属，クリ－シイ属－マテバシイ属が優占する。またマツ属複維管束亜属，エノキ属－ムクノキの出現率もや

や高い。草本花粉ではガマ属－ミクリ属，イネ科，カヤツリグサ科の出現率がやや高い。

推定される植生と環境

以上の結果から，Ⅳ-９区３号ドングリピットの周囲にはガマ属－ミクリ属などの水湿地植物やイネ科，カヤツリグサ科などが生育する小規模な水湿地が分布していたものと推定される。

また，当時の遺跡周辺にはコナラ属アカガシ亜属（カシ類），クリ－シイ属－マテバシイ属などの照葉樹林が分布していたと考えられ，ニヨウマツ類（マツ属複維管束亜属，アカマツかクロマツ），エノキ属－ムクノキなどの二次林要素も広がりつつあったものと推定される。

参考文献

中村純（1973）花粉分析．古今書院，ｐ．82－110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，ｐ．248－262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60ｐ.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91ｐ.

３．黒丸遺跡における種実同定

試　料

試料は，Ⅳ-９区３号ドングリピットおよびⅣ-７区16号ドングリピットの堆積物である。

方　法

Ⅳ-９区３号ドングリピット１については試料（堆積物）400ccを，Ⅳ-７区16号ドングリピット２については試料400ccすべてを0.25mmの篩を用いて水洗選別を行い，その残渣を双眼実体顕微鏡下で観察した。必要に応じて落射顕微鏡観察も行った。同定は

表３　黒丸遺跡における花粉分析結果

分類群		Ⅳ-9区3号
学名	和名	ドングリピット
Arboreal pollen	樹木花粉	
Abies	モミ属	6
Tsuga	ツガ属	1
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	47
Myrica	ヤマモモ属	1
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ	1
Alnus	ハンノキ属	2
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	3
Castanea crenata-Castanopsis	クリ-シイ属-マテバシイ属	64
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	3
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	102
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ	2
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ	25
Zanthoxylum	サンショウ属	1
Ilex	モチノキ属	1
Camellia	ツバキ属	1
Elaeagnus	グミ属	2
Cornus	ミズキ属	1
Symplocos	ハイノキ属	1
Oleaceae	モクセイ科	2
Ericaceae	ツツジ科	1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	
Rosaceae	バラ科	1
Araliaceae	ウコギ科	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属	25
Gramineae	イネ科	21
Cyperaceae	カヤツリグサ科	24
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節	1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1
Ranunculus	キンポウゲ属	1
Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ	1
Umbelliferae	セリ科	1
Valerianaceae	オミナエシ科	1
Lactucoideae	タンポポ亜科	5
Asteroideae	キク亜科	3
Artemisia	ヨモギ属	2
Fern spore	シダ植物胞子	
Monolate type spore	単条溝胞子	25
Trilate type spore	三条溝胞子	4
Arboreal pollen	樹木花粉	267
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	2
Nonarboreal pollen	草本花粉	86
Total pollen	花粉総数	355
Unknown pollen	未同定花粉	3
Fern spore	シダ植物胞子	29

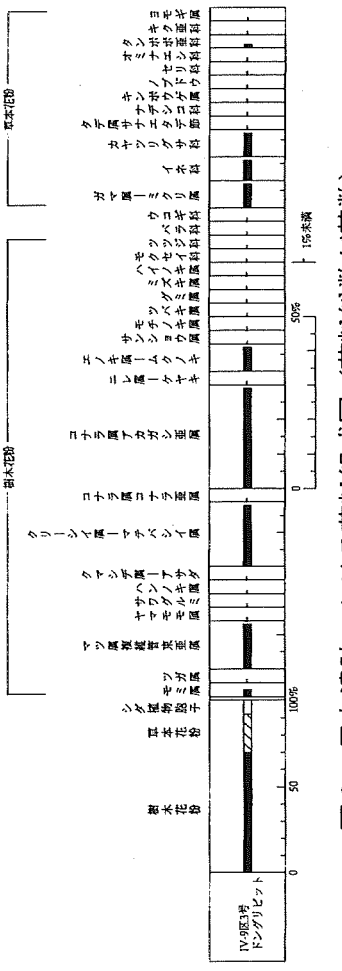


図２　黒丸遺跡における花粉組成図（花粉総数が基数）

形態的特徴および現生標本との対比で行い，結果は同定レベルによって科，属，種の階級で示した。

出現した分類群

樹木5，草本7の計12が同定された。学名，和名および粒数を表4に示し，主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

〔樹木〕

a．クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　堅果（破片）　ブナ科

黒褐色で広楕円形を呈し，下端に広い付き部がある。断面は楕円～半円形である。

b．コナラ属　*Quercus*　堅果（破片）　ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し，一端に基部が残る。表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し，属レベルの同定までである。

c．キイチゴ属　*Rubus*　核　バラ科

淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。長さ1.2㎜，幅0.7㎜。

d．センダン　*Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miq.　核　センダン科

黒褐色で楕円形を呈し，一端は円孔となる。縦に5本の発達した稜が走る。長さ16.0㎜，幅10.4㎜。

e．ヒサカキ属　*Eurya* Thunb.　種子　ツバキ科

黄褐色，不整形を呈す。表面に多数の小凹点がある。長さ1.8㎜，幅1.3㎜。

〔草本〕

f．イネ科　Gramineae　穎

茶褐色で楕円形を呈す。表面には微細な顆粒状の突起がある。長さ1.5㎜，幅1.0㎜。

g．カヤツリグサ科　Cyperaseae　果実

黒褐色で倒卵形を呈し，断面は両凸レンズ形である。長さ2.4㎜，1.6㎜。

h．コナギ　*Monochoria vaginalis* Presl var. plantaginea Solms-Laub.　種子　ミズアオイ科

淡褐色で楕円形を呈す。表面には縦方向に8～10本程度の隆起があり，その間には横方向に微細な隆線がある。種皮は薄く透き通る。長さ1.0㎜，0.4㎜。

i．カラムシ属　*Boehmeria*　種子　イラクサ科

ゆがんだ卵形，両端は尖る。表面はざらつき，種皮は厚くやや堅い。黄褐色。長さ2.8～3.3㎜，幅1.8～1.9㎜。

j．タデ属　*Polygonum*　果実　タデ科

黒褐色で先端がとがる卵形を呈す。表面にはやや光沢があり，断面は三角形である。長さ1.5㎜，幅1.1㎜。

k．ザクロソウ　*Mollugo pentaphylla* L.　種子　ザクロソウ科

黒色でやや光沢がある。円形を呈し，一カ所が切れ込み，白い種柄がある。表面には微細な網状斑紋がある。径0.4㎜。

l．ナデシコ科　Caryophyllaceae　種子

黒色で円形を呈し，側面にへそがある。表面全体に突起がある。径0.6㎜。

結果と考察

1）Ⅳ-9区3号ドングリピット

樹木では，コナラ属，キイチゴ属，センダン，ヒサカキ属，草本ではイネ科，カヤツリグサ科，コナギ，カラムシ属，ザクロソウ，ナデシコ科が検出された。コナラ属やキイチゴ属は食用にもなるが，検出された分類群の構成からみて，周囲の植生を反映しているとみなされる。コナラ属にはアカガシ亜属が含まれ，ヒサカキ属は照葉樹林の中低木相である。センダンは暖地の海岸沿いに多い樹木である。キイチゴ属は樹林下に分布する。草本のイネ科，カヤツリグサ科，カラムシ属，ザクロソウ，ナデシコ科は林縁のような森林のとぎれたやや日当たりのよいところに生育し，コナギは水湿地に生育する。

以上のことから，Ⅳ-9区3号ドングリピットの周囲は，森林内の小規模な水湿地とそれに連なる林縁のような環境であったと考えられる。

2）Ⅳ-7区16号ドングリピット

食用となるクリの堅果片が12片検出された。他の種実が検出されないことから，クリの堅果がドングリピットに貯蔵されていたものと推定される。

参考文献

南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p．276－283.

4．黒丸遺跡出土木材の樹種同定

試　料

試料は，Ⅳ-9区5号ドングリピットの木製用器（サンプル①）およびⅣ-7区の流木片（サンプル③）である。

方　法

カミソリを用いて試料の新鮮な基本的三断面（木材の横断面・放射断面・接線断面）を作製し，生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

表4　黒丸遺跡における種実同定結果

分類群			Ⅳ-9区3号ドングリピット(400cc中)	Ⅳ-7区16号ドングリピット(40cc中)
学名	和名	部位		
arbor	樹木			
Castanea crenata Sieb. et Zucc.	クリ	堅果（破片）		12
Quercus	コナラ属	堅果（破片）	1	
Rubus	キイチゴ属	核	2	
Melia azedarach L. var. subtripinnata Miq.	センダン	核	1	
Eurya Thunb.	ヒサカキ属	種子	3	
herb	草本			
Gramineae	イネ科	頴	1	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	1	
Monochoria vaginalis Presl var. plantaginea Solms Laub.	コナギ	種子	4	
Boehmeria	カラムシ属	種子	3	
Polygonum	タデ属	果実	1	
Mollugo pentaphylla L.	ザクロソウ	種子	1	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子	2	
Total	合計		20	12
Unknown	不明		1	

結　果

結果を次表に示し，以下に同定根拠となった特徴を記す。

表5　黒丸遺跡における樹種同定結果

試料	種類	樹種（和名／学名）
サンプル①	木製用器	クスノキ　*Cinnamomum camphora Presl*
サンプル③	流木片	クスノキ　*Cinnamomum camphora Presl*

クスノキ　*Cinnamomum camphora* Presl　　クスノキ科　　図版1・2

横断面：中型から大型の道管が，単独および２～数個放射方向に複合して，平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には，油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で，道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには，しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりクスノキに同定される。クスノキは，関東以西の本州，四国，九州，沖縄に分布する。常緑の高木で，通常高さ25m，径80cmぐらいであるが，高さ50m，径５mに達するものもある。材は堅硬で耐朽性が強く，保存性が高く芳香がある。建築材，容器類などに用いられる。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，ｐ．49－100.

5．放射性炭素年代測定結果

表6　試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	Ⅳ－9区3号ドングリピット	種子	酸－アルカリ－酸洗浄 ベンゼン合成	β線法
No. 2	Ⅳ－11区1号ドングリピット	木材	酸－アルカリ－酸洗浄 ベンゼン合成	β線法

表7　測定結果

試料名	^{14}C年代 （年BP）	δ^{13}C （‰）	補正^{14}C年代 （年BP）	暦年代 交点（1σ）	測定No. （Beta－）
No. 1	2890±50	−25.6	2880±50	BC1020 （BC1120～980）	92433
No. 2	2880±70	−27.7	2840±70	BC990 （BC1065～905）	92434

1）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から，単純に現在（1950年AD）から何年前(B.P.)かを計算した値。^{14}Cの半減期は5,568年を用いた。

2）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

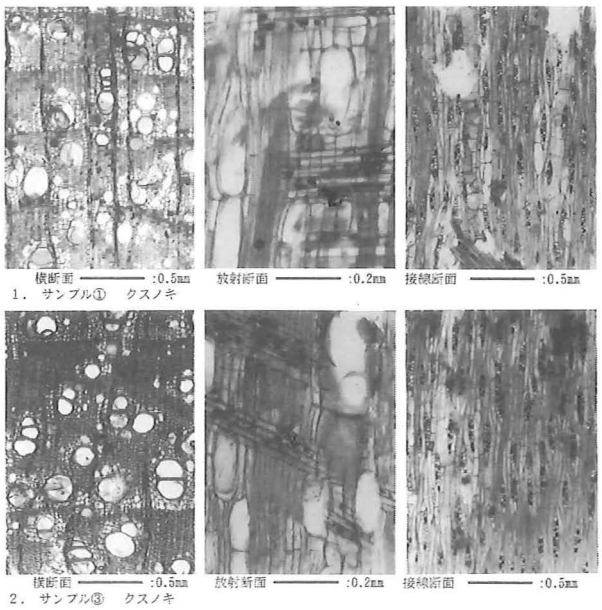
3）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り，^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

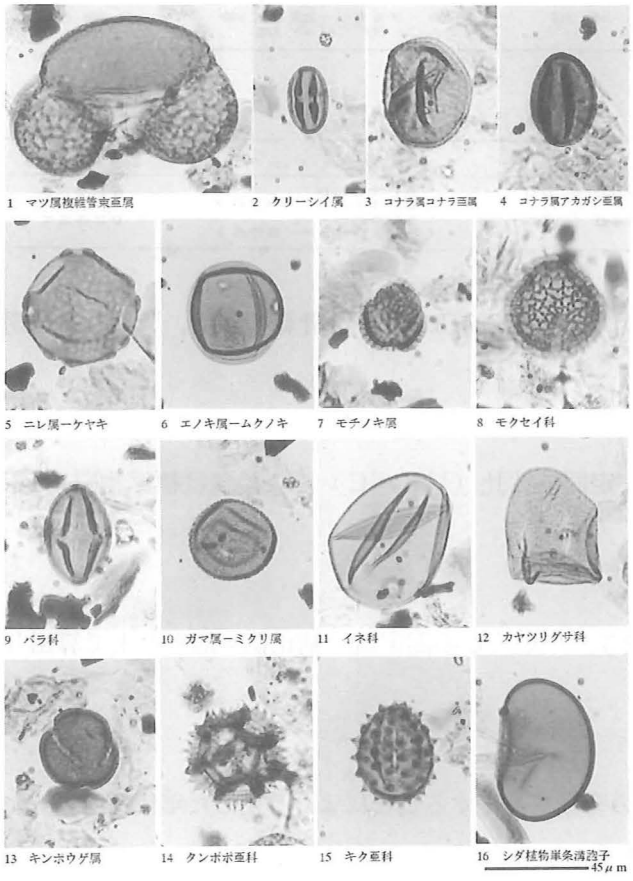
過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年B.P.より古い試料には適用できない。暦年代の交点とは，補正^{14}C年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σは補正^{14}C年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって，複

数の交点が表記される場合や，複数の１σ値が表記される場合もある。

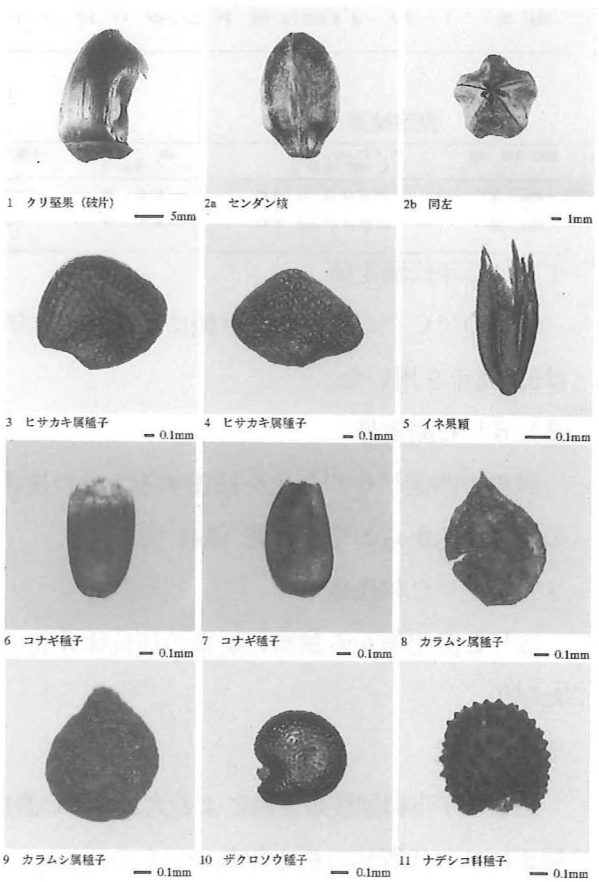


図版１

黒丸遺跡出土木材の顕微鏡写真



黒丸遺跡の花粉・胞子遺体



黒丸遺跡出土種実

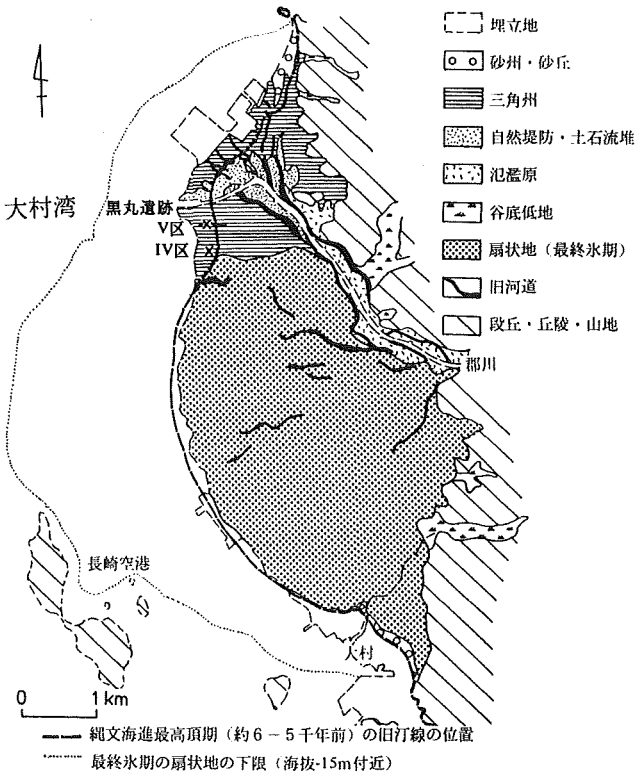
Ⅱ　黒丸遺跡の地形と地質

長崎大学教育学部　長　岡　信　治

1．黒丸遺跡周辺の地形

黒丸遺跡の分布する大村平野は，大村湾東岸に位置する扇状地主体の沖積平野である。形態は南北９km，東西３kmの扇形で，分布高度は45m以下である。この平野は，扇状地（最終氷期），谷底低地，氾濫原，砂州・三角州(完新世)に細分される(第１図)。

扇状地は，大村平野の面積の約70％をしめる地形面である。分布高度は海抜45～－20mで，平均勾配は13‰である。この扇状地は大村平野中央東縁を扇頂とする郡川の扇状地である。表面には傾斜方向に土石流堆などの微高地とその間の旧河道が認められる。扇頂部は，現郡川により浸食され，段丘化している。扇端部は海岸から海底面にそのまま連続し，水深20m付近で湾底に没する。扇状地を構成する砂礫層は70～80m以上の厚さがあり（長崎県，1973），大村湾底の沖積層基底礫層，更新世末のＢ層（国土地理院，1980）に連続する。Ｂ層は有明海の島原海湾層（有明海研究グループ，1965）に対比されている(国土地理院，1980)。以上から，この扇状地は，最終氷期の低海面期に形成されたと考えられる。



第１図　大村平野の地形分類図と縄文海進極相期の海岸線の位置
国土地理院（1980）を1984年国土地理院撮影の２万分の１航空写真で修正

谷底低地は，多良岳火山麓扇状地の段丘の開析谷中に分布する小規模な平野である。

氾濫原はＪＲ大村線より上流の郡川沿いに細長く分布し，旧河道が認められる。

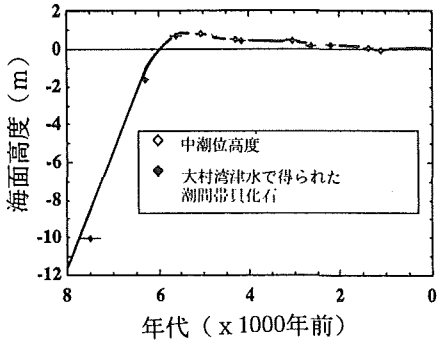
砂州は北部と南部の海岸沿いに僅かにみられる。

三角州は平野北部の郡川下流部の海抜10m以下に発達する。その平均勾配は7.5‰である。土石流堆か自然堤防と考えられる細長い高さ数mの微高地群が，三角州の上流側から放射状に分布している。下流部には分流する旧河道が数多く認められる。三角州は厚さ10m以上の砂礫とシルト・粘土の互層からなっていて（長崎県，1973；国土地理院，1980），それは大村湾底の完新世のＡ層（国土地理院，1980）に連続する。Ａ層は，有明海の有明粘土層（有明海研究グループ，1965）に対比されている（国土地理院，1980）。これらのことから，郡川の三角州は完新世の高海面に対応して形成されたと推定される。

黒丸遺跡はこの三角州の上に立地している。遺跡のⅣ区は後背湿地，Ⅴ区は旧河道付近に位置して

いる。

Ⅳ区周辺では河道の北への移動により縄文時代晩期以降に，乾陸化が進んだと考えられる。本遺跡の南南東13km，大村湾南西部の津水では，沖積層の貝化石の^{14}C年代測定をもとに完新世の海面変化曲線が描かれている（Yokoyama., *et.al*）。それによると，大村湾南東部の相対的海水準は約4280年前に海抜＋0.5mの完新世最高高度に達し，その後現在のレベルまで徐々に低下したと考えられている（第２図）。また，大村湾南岸の伊木力遺跡では，相対的海水準は５千５～５千３百年前に０mの現高度にまで上昇し，その後から現在までこれを越えることはなかった（長岡ほか，1995）。これらの報告によれば，大村湾では，隆起運動が卓越する日本各地で認められる数mを越える完新世の高海面期は認められない。このことは大村湾の地殻変動が安定的，静的であることを示唆している。今回の黒丸遺跡の発掘現場では海成層を直接確認することはできなかったが，Ⅳ区でも海抜0.5m以下に海成層が存在すると予想される。



第２図　大村湾南東部における海面変化曲線
Yokoyama et.al.,1996

また，Ｖ区では，弥生時代後期の土器片が土石流性の砂礫層に含まれていることから，弥生時代後期まで河川の氾濫や土石流の影響を直接受けていたと考えられる。

このように黒丸遺跡付近では，約６千～５千年前に縄文海進で一旦浅海域となった後，河川の前進により氾濫原や湿地が形成され，そこに縄文時代晩期以降遺跡が成立したと推定される。また，こうした低湿な環境は，貯蔵穴建設や稲作には適した場所であったと思われる。

２．Ⅳ区における地層の堆積環境と貯蔵穴の関係

２－１．層序

Ⅳ区は直接本流の影響を受けにくい三角州南縁部の後背湿地上に位置し，堆積物もこれを反映して全般に細粒のシルト・粘土からなる。遺跡で見られた層序は上位より以下の通りである（第３図）。

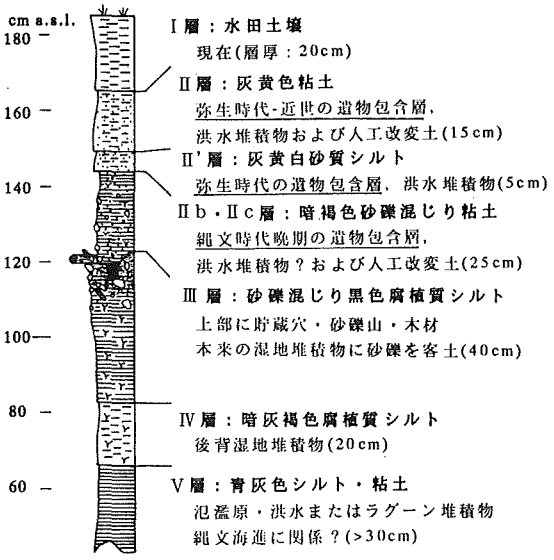
Ⅰ層：暗褐色シルト，グライ化，最近の水田土壌

Ⅱ層：灰黄色粘土，弥生時代－近世の遺物包含層，洪水堆積物および人工改変土

Ⅱ′層：灰黄白色砂質シルト，弥生時代の遺物包含層

Ⅱｂ・Ⅱｃ層：暗褐色砂礫混じり粘土，縄文時代晩期の遺物包含層，洪水堆積物？および人工改変土

Ⅲ層：砂礫混じり黒色泥炭質シルト，最上部に縄文時代晩期の貯蔵穴，上部は人工改変土，下部は湿地堆積物



第３図　Ⅳ区の地質層序

Ⅳ層：暗灰褐色泥炭質シルト，湿地堆積物

Ⅴ層：青灰色シルト・粘土，氾濫原または潟湖堆積物

Ⅴ層からⅢ層の層相変化から，サイトが，氾濫原から後背湿地，泥炭地に変化していくのがわかる。Ⅲ層以降は，ときどき洪水が襲ったものの主河道がより北へ移動したか海面低下のために，基本的には乾陸化し人間の生活の場になったと考えられる。

２－２．Ⅲ層の堆積環境と貯蔵穴群の建設

数多くの貯蔵穴が穿たれていたⅢ層（写真１）の堆積環境を，層相から検討してみる。

Ⅲ層は，泥炭質シルト層に黄赤色に酸化した砂や砂礫が不均質混じりあっているのが特徴で，特に上部に多い（写真２）。泥炭質シルトそのものは均質で，もともとは後背湿地の堆積物と考えられる。混入する砂や砂礫は，橙～黄色に酸化しており，明らかに堆積以前に一度地表にさらされたものである。そして，これらは泥炭質シルトと十分混合したり地層をなすことなく，泥炭質シルト中に砂礫の塊として散在している。個々の塊は，長径20cm以下で，不定形な斑模様を呈している（写真３）。一般的に，砂礫が塊として泥炭中に存在するには，湿地に砂礫が空気中から落下してくるような状況を想定しなくてはならない。砂礫の混入は，河川や洪水，土石流などによるものではない可能性が高い。貯蔵穴の存在などから，人の関与を推定することは容易である。つまり，人為的に他の場所から搬入され，散布されたと考えられる。また，パイプ状の砂のパッチがあり（写真４），散布の際，木を使って砂や砂礫を混ぜたことを思わせる。砂礫はおそらく，湿地に貯蔵穴を掘ったり貯蔵物を運搬する時に，足場を固めるために散布されたと推定される。

また，サイトの中央では，Ⅲ層の上面が円形の土俵状の盛り上がりを形成している（写真５，６）。この盛り上がりは，特に砂礫が多く，無遺物であることから，河原などから運んできた砂礫を一旦貯めた盛り土跡，土砂置き場跡と解される。ここから，周囲の湿地に砂礫を蒔いたと考えられる。

さらに，貯蔵穴周辺には，長さ２m以上の大木が横たわっている（写真１，７，８）。これらの大木の根は失われていることが多い。また，残された根の一部が河成円礫を取り込んでいる（写真９）。このような観察事実から，木はこの場所で生育していたのではなく，別の河原などの砂礫質な場所に生えていたとみられる。Ⅲ層を構成する粘土や泥炭は一般的に静水環境に堆積するので，ここで見られるような大木を運ぶような運搬力を持った強い水流があったとは思えない。木材も砂礫同様，人間が運んできたと考えるのが妥当であろう。おそらく貯蔵穴の作業用の渡り板か休憩用の椅子として利用されたのであろう。盛り土周辺を取り囲む木材や大礫（写真10）も作業用か休憩用と考えられるが，小形の木材は混ぜ土を行う際の工事用具として使用された可能性もある。

以上のように，Ⅲ層の層相から，もともと後背湿地であった場所が人工改変されたと推定される。Ⅲ層に含まれる砂礫や木材は，縄文人が貯蔵穴を建設したり，使用する際に利用されたものと結論できる。彼らは，河原などから砂礫を運び込んで貯め，さらにそれらをぬかる泥炭地に散布して歩きやすくした。また，木材を渡り板や休憩椅子などとして利用していた。

3．Ⅴ区の小流路の成因

Ⅴ区では東西方向の長さ16m，幅４m，深さ50cm以下の流路が発見された（写真11)。この流路が弱いながら蛇行していること（写真11，12），流路は扇状地の最大傾斜方向に一致していることなどから，自然の旧河道と推定される。また，両岸の微高地は中礫以下の河成礫からなり（写真13，14），この河成礫にはインブリケーションが認められる（写真13）。この砂礫層中から磨耗した弥生式土器も発見されている。このことから，周囲の微高地は土石流堆のようなものと考えられる。

しかし，河川の横断面に注目すると，両岸に不自然な一段のステップがある（写真12）。これは，水を利用するために人工的に浅瀬を作って河道を拡大したのかもしれない。

このようにⅤ区は弥生時代まで，河川の流路沿いにあたっていて，たびたび河川の氾濫や土石流の被害を受けたとみられる。

4．まとめ

1）黒丸遺跡は完新世の三角州上に立地している。特に縄文海進以後，三角州が前進，陸化した部分に位置する。

2）Ⅳ区は後背湿地上に，Ⅴ区は旧河道上にそれぞれ位置している。

3）Ⅳ区では，縄文時代前・中期の最高海水準以後，湿地が発達していた。縄文時代晩期には，灰汁抜きの貯蔵穴が作られた。その工事や利用の際，砂礫が客土された。客土にあたって，一旦砂礫の集積場所が決められ，盛り土が作られた。そして，そこから周辺の湿地へ散布された。また，渡り板などとして大形の木材も持ち込まれた。

4）郡川河口に近いⅤ区では，弥生時代まで，しばしば土石流や洪水の被害を受けた。発掘された流路は基本的には土石流堆の間に形成された自然の河川と考えられる。

引用文献

有明海研究グループ（1965）有明海・不知火海域の第四系．地団研専報，11号，地学団体研究会，86ｐ．

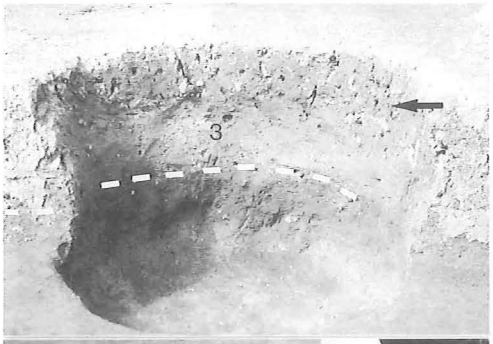
国土地理院（1980）２万５千分の１沿岸海域地形図，同土地条件図および報告書（大村湾地区）．109ｐ．

長岡信治・横山祐典・前田保夫・中田正夫・奥野淳一（1995）長崎県大村湾南岸，伊木力遺跡周辺の沖積層と海面変化，．長崎大学教育学部自然科学研究報告，53号，27－40

長崎県（1973）５万分の１土地分類基本調査「大村」．28ｐ．

Yokoyama,Y., Nakada,M., Maeda,Y., Nagaoka,S., Okuno,J., Matsumoto,E., Sato,H., Matsushima,Y.,(1996) : Holocene sea-level change and hydro-isostasy along the west coast of Kyusyu, Japan. *Palaeogeogr.Palaeoclimat.Palaeoecol.* , 123, 29－47.

1



2

3

4

5

6

7

1．Ⅳ区のⅢ層上面に沿ってはぎ取られた遺構面
　A：貯蔵穴群
　B：作業に使用された木材
　C：客土跡
　D：客土用盛り土跡

2．貯蔵穴の断面に現れたⅢ層
　白線より上位３：Ⅲ層、矢印の部分に特に多く砂礫が混入している。

3．Ⅲ層に斑状に混じる砂

4．木などで耕した跡と思われるパイプ状の砂のパッチ（矢印）

5．砂礫を貯めた跡と考えられる盛り土（西側より）
　土木作業に用いたと考えられる木材が取り囲む。かつては高さ数mの小山を作っていたにちがいない。

6．砂礫を貯めた跡と考えられる盛り土（東側より）

7．貯蔵穴建設や貯蔵物搬入に用いられた木材

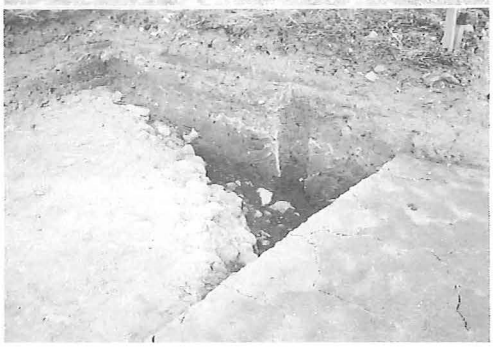
8

9

10

12

13



14

8．石の上などに不自然に置かれた木材

9．河成礫を取り組んだ根

10. 盛り土を取り囲む木材と礫
これらも作業用に使用されたであろう

11. V区の小流路
A：流路　小さく蛇行している
B：土石流堆積物
C：土石流堆の縁辺（写真14）

12. 小流路の内部　矢印はステップ

13. 流路周辺の堤防を作る河成礫
左側が上流、左から右側への流れを示すインブリケーションが見られる

14. 河成礫の高まり
土石流堆の側端部

11

報告書抄録（記載様式）

ふりがな	くろまるいせき
書名	黒丸遺跡
副書名	都市計画道路杭出津・松原線改良工事に伴う発掘調査報告書
巻次	2
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第132集
編著者名	町田利幸・荒木伸也
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850　長崎県長崎市江戸町2－13　TEL0958－26－5010
発行年月日	西暦 1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
黒丸遺跡（くろまるいせき）	大村市黒丸町（おおむらしくろまるまち）587番地1-352	42205	5-86	32° 57′	29° 56′ 2″	19961101 ～ 19970315	1,792㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
黒丸遺跡	遺物包含地	縄文時代 弥生時代	ドングリ貯蔵穴 住居跡 土壙	縄文時代の土器・石器 弥生時代の土器	

長崎県文化財調査報告書第132集

黒丸遺跡 II

1997

発　行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町２番13号

印　刷　株式会社　クイックプリント
長崎市樺島町８番12号